

河南町文化財調査報告第3冊

大阪芸術大学グラウンド整備に伴う
東山遺跡発掘調査報告書Ⅱ

2011年5月

河南町教育委員会

序 文

南河内郡河南町は大阪府の東南部、東を金剛山地の峰々に画されて奈良の地と接しています。町は葛城山を頂とする山地と、その前面に広がる丘陵、段丘から成り、山並みの青たなびく万葉の「青旗の葛城山」が緑の豊かさを古くから伝えつづけています。

遺跡周辺には、太子町にまたがる一須賀古墳群、その周辺に広がる7世紀の王陵、王陵にならぶ規模をもつ平石古墳群、双円墳である金山古墳などがあり、古代国家の成立において大きな位置付けをもった地であったことを物語っています。

東山遺跡は梅川と太井川に挟まれた丘陵上にあり、その発見は高度経済成長期の昭和40年代に遡ります。大阪府教育委員会の調査によって、百を超える古墳、窯跡とともに、「高地性集落」と呼ばれる弥生の集落跡として遺跡を著名なものとししました。このとき調査された集落跡は宅地造成工事によって消滅しましたが、古墳が密集する一部は府立近つ飛鳥風土記の丘として保存・公開され、府立近つ飛鳥博物館とともに貴重な文化遺産を広く伝え、様々な活動の場として府民に親しまれています。

昭和59年に始まった大阪芸術大学のグラウンドおよび体育館用地の造成による調査は、地域の首長の古墳、中世集落という新たな側面を遺跡に付け加えることとなりました。本書ではその西側で新たに計画された、大阪芸術大学のグラウンド造成に伴う発掘調査の成果を報告しています。遺跡の範囲がさらに西に広がることを明らかにし、弥生集落と方形周溝墓、古代や中世の集落の様相など新たな知見が得られたものであります。

最後になりましたが、調査の実施にあたっては大阪芸術大学をはじめ、施工関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を、関係諸機関、諸氏にご指導とご配慮を賜りました。ここに各位に対し厚く感謝いたしますとともに、今後もより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成23年5月

河南町教育委員会
教育長 浅野雅美

例 言

1. 本書は大阪府南河内郡河南町大字東山に所在する東山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の経費は学校法人 塚本学院が負担した。
3. 調査は平成 20 年 9 月に試掘調査を、平成 21 年 2 月 16 日から平成 21 年 8 月 26 日まで現地調査を行い、平成 22 年から平成 23 年にかけて整理作業を行い、本書刊行をもって完了した。
4. 発掘調査および整理作業は、河南町教育委員会が赤井毅彦、向井 妙（平成 21 年 7 月以降）を担当者として以下の体制で実施した。

平成 21 年 2 月～平成 21 年 3 月	教育長 浅野雅美、教育次長 葛田隆夫、教育課長 河合重和
平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月	教育長 浅野雅美、教育次長 河合重和、教育課長 木矢年謙
平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月	教育長 浅野雅美、教育次長（8 月以降 教・育部長）松田友宏、 教育課長 木矢年謙
平成 23 年 4 月以降	教育長 浅野雅美、教・育部長 松田友宏、教育課長 堀壘喜弘
5. 調査の実施にあたっては、下記の関係機関、諸氏にご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい（敬称略）。

大阪府教育委員会、太子町教育委員会、千早赤阪村教育委員会、藤井寺市教育委員会、池田貴則、和泉大樹、小川裕見子、鍋島隆宏、西山昌孝、藤田徹也、山田孝弘
6. 遺物の実測、写真撮影等は、河南町教育委員会の監督のもと株式会社 島田組に委託して行った。
7. 本書の執筆は 1・2 章を赤井と向井が、そのほかを向井が行った。編集は向井が行った。
8. 本調査に係わる遺物・写真・実測図などの記録類は河南町教育委員会において保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構実測図の基準高は、T.P. 値（東京湾平均海面）を使用している。
2. 遺構平面図の座標値は、世界測地形（測地成果 2000）に基づく国土地理座標第VI系で表記する。報告書内での単位は、cm である。
3. 遺構実測図に付す方位針は、全て国土地理座標第VI系の座標北を示す。
4. 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』農林水産省農林水産技術会事務局監修・財団法人 日本色彩研究所監修を用いた。
5. 遺構番号は調査区ごとに分け、さらに整理作業の過程で追加（901～933）した。遺物登録番号も同様に調査区ごとに分けた。具体的には以下の通りである。

1 区	遺構番号	1～200, 901～904	遺物登録番号	No.1～129
2-1 区	遺構番号	201～299, 910～919	遺物登録番号	No.201～274
2-2 区	遺構番号	301～378	遺物登録番号	No.301～348
3-1 区	遺構番号	401～518, 931	遺物登録番号	No.401～521
3-2 区	遺構番号	701～831, 932	遺物登録番号	No.601～779
3-3 区	遺構番号	601～689, 933	遺物登録番号	No.801～926
3-4 区	遺構番号	691～693	遺物登録番号	No.1001～1003
6. 掲載遺物番号は調査区に関わらず通し番号（1～348）とした。
7. 本書内の挿図・図版は通し番号とする。
8. 掲載図面の縮尺は、調査区平面は 1/100、遺構図は 1/40・1/80、土器 1/4、石製品 1/4、打製石器 2/3 を基本とする。なお、必要に応じて縮尺を変更したものについては各図中に縮尺を明示した。
9. 土器類の断面は、須恵器・施釉土器・磁器を黒塗り、瓦質土器・瓦をアミフセ 30%、その他を白抜きとした。
10. 図版掲載遺物の縮尺は任意である。
11. 出土遺物の記述に関しては第 3 章に挙げた文献を参考にした。

本文目次

序文	i
例言	iii
凡例	iv
本文目次	v
挿図目次	vi
図版目次	viii
第1章 調査に至る契機と経過	1
第2章 位置と環境	3
第3章 調査・整理の方法	8
第4章 1区の調査成果	
第1節 概要	9
第2節 層序	9
第3節 遺構と遺物	
(1) 方形周溝墓	9
(2) 井戸状遺構	15
(3) 掘立柱建物	16
(4) 落ち込み状遺構	16
(5) ピット	20
(6) 溝	21
(7) 遺構に伴わない遺物	23
(8) 小結	25
第5章 2区の調査成果	
第1節 概要	26
第2節 層序	26
第3節 遺構と遺物	
(1) 集石遺構	26
(2) 掘立柱建物・ピット列	32
(3) ピット・土坑	34
(4) 溝	37
(5) 遺構に伴わない遺物	37
(6) 小結	38
第6章 3区の調査成果	
第1節 概要	39
第2節 層序	39
第3節 遺構と遺物	
(1) 竪穴建物	39

(2) 溝状遺構	50
(3) 落ち込み状遺構	53
(4) 掘立柱建物	54
(5) ピット列・ピット・土坑	60
(6) 溝	65
(7) 遺構に伴わない遺物	65
(8) 小結	66
第7章 1・2区出土埴輪	67
第8章 まとめ	68
図版	73
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

図 1	東山遺跡調査区位置図 (1/5,000)
図 2	試掘トレンチ・調査区配置図 (1/3,000)
図 3	東山遺跡周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)
図 4	1区全体平面図 (1/200)
図 5	1区西壁・南壁土層断面図 (1/80)
図 6	1区 SX25, 25・26, 26 遺物出土状況・土層断面図 (1/40)
図 7	1区 SX25, 25・26, 26, 28, 29 出土遺物実測図 (1/4)
図 8	1区 SX15 平面・土層断面図 (1/40)
図 9	1区 SX15 出土遺物実測図 (1/4)
図 10	1区 SB1 平面・断面・土層断面図 (1/80)
図 11	1区北側下層遺構平面図 (1/80)
図 12	1区 SX4, 7, 32 土層断面図 (1/80)
図 13	1区 SX20, 30, SK34 土層断面図 (1/80)
図 14	1区 SX4, 5, 7, 32 出土遺物実測図 (1/4)
図 15	1区 SX20 出土遺物実測図 (1/4)
図 16	1区 SX30 出土遺物実測図 (1) (1/4)
図 17	1区 SX30 出土遺物実測図 (2) (1/4)
図 18	1区 SX34 出土遺物実測図 (1/4)
図 19	1区 SP80, 112, 114, 115 土層断面図 (1/40)
図 20	1区 SP80, 114, 116, 184 出土遺物実測図 (1/4)
図 21	1区 SD10, 12, 14 土層断面図 (1/80)
図 22	1区 SD41 礫検出状況平面図 (1/80)
図 23	1区 SD10, 12, 41 出土遺物実測図 (1/4)

- 図 24 1区包含層出土遺物実測図 (1/4, 石鏃 2/3)
- 図 25 2区全体平面図 (1/200)
- 図 26 2区南壁・西壁土層断面図 (1/80)
- 図 27 2区 SX217, 274, 299, 335 平面・土層断面図 (1/40)
- 図 28 2区 SX217, 299 (1) 出土遺物実測図 (1/4)
- 図 29 2区 SX299 (2), SX298 出土遺物実測図 (1/4)
- 図 30 2-1区 SB2, 周辺遺構平面・土層断面図 (1/80)
- 図 31 2区土坑・ピット平面・土層断面図 (1/40)
- 図 32 2区 SP201, 216, 230, 308, SK301, SD225 出土遺物実測図 (1/4)
- 図 33 2区 SP277, 287, SK279, 281 出土遺物実測図 (1/4)
- 図 34 2区包含層出土遺物実測図 (1/4)
- 図 35 3区全体平面図 (1/400)
- 図 36 3-1区平面図 (1/100)
- 図 37 3-2区平面図 (1/100)
- 図 38 3-3区平面図 (1/100)
- 図 39 3-1区南壁・北壁土層断面図 (1/80)
- 図 40 3-2区北壁・東壁, 3-3区北壁土層断面図 (1/80)
- 図 41 3-4区西壁土層断面図 (1/80)
- 図 42 3-3区 SH625 平面・断面・土層断面図 (1/50)
- 図 43 3-3区 SH625 柱穴・ピット・SD614, 626 土層断面図 (1/50)
- 図 44 3-3区 SH625, SD614, 626 遺物・礫検出状況平面図 (1/20)
- 図 45 3-3区 SH630 平面・土層断面図 (1/50)
- 図 46 3-3区 SH625, SD614, 626, 656, SP673, 676, SH630 出土遺物実測図 (1/4)
- 図 47 3-2区 SD778 遺物出土状況図 (1/20)
- 図 48 3-2区 SD778, 779, 772 出土遺物実測図 (1/4)
- 図 49 3-2区 SX741 出土遺物実測図 (1/4)
- 図 50 3-2・3区 SX612, 650, 788 出土遺物実測図 (1/4)
- 図 51 3-1区 SB3 平面・土層断面図 (1/100)
- 図 52 3-1区 SB3 掘りかた・周辺ピット出土遺物実測図 (1/4)
- 図 53 3-1区 SB4 平面・土層断面図 (1/100)
- 図 54 3-1区 SB4 掘りかた出土遺物実測図 (1/4)
- 図 55 3-2区 SB5 平面・土層断面図 (1/100)
- 図 56 3-2区 SB5 掘りかた出土遺物実測図 (1/4, 石器 2/3)
- 図 57 3-3区 SB6 平面・断面・土層断面図 (1/100)
- 図 58 3-3区 SB6 掘りかた出土遺物実測図 (1/4)
- 図 59 3-3区ピット列平面・土層断面図 (1/100)
- 図 60 3-1区ピット土層断面図 (1/50)
- 図 61 3-2・3区ピット・土坑・溝土層断面図 (1/50)

- 図 62 3-2・3区ピット出土遺物実測図(1/4, 石製品 1/2)
 図 63 3区SD442, 635, 704 出土遺物実測図(1/4, 石器 2/3)
 図 64 3区包含層出土遺物実測図(1)(1/4, 石器 1/2)
 図 65 3区包含層出土遺物実測図(2)(2/3)
 図 66 1・2区出土埴輪実測図(1/2)
 図 67 3-3区SH625 変遷模式図
 図 68 東山遺跡周辺遺跡分布図(1/10,000)

図 版 目 次

- 図版 1 東山遺跡遠景(3区から) 南東方向を臨む、南方向を臨む、南西方向を臨む
 図版 2 1区遺構(1) 調査区全景(北から)、調査区全景(南から)
 図版 3 1区遺構(2) SX25完掘状況(東から)、SX26完掘状況(東から)、SX25土器検出状況(北から)
 図版 4 1区遺構(3) SX25・26土器検出状況(南から)、SX15半裁断面(西から)、SB1完掘状況(北から)
 図版 5 2区遺構(1) 調査区全景(北から)、調査区中央(北から)
 図版 6 2区遺構(2) SX217礫検出状況・土層断面(西から)、SX217焼土層上面検出状況(北から)、SX217完掘状況(北から)
 図版 7 2区遺構(3) SX335上層礫検出状況(西から)、SX274,299完掘状況(東から)、SX299土層断面(東から)
 図版 8 3区遺構(1) 3-1区完掘状況(東から)、3-2区完掘状況(東から)
 図版 9 3区遺構(2) 3-3区完掘状況(東から)、3-4区完掘状況(南から)
 図版 10 3区遺構(3) SH625検出状況(南東から)、SH625, SB6完掘状況(南東から)、SH625南東土層断面(北東から)
 図版 11 3区遺構(4) SH625土器検出状況(南東から)、SD614土器検出状況(北西から)、SD626完掘状況(北東から)
 図版 12 3区遺構(5) SH630検出状況(南西から)、SH630完掘状況(南西から)、SH630西・SP687土層断面(南から)
 図版 13 3区遺構(6) SD778, 779完掘状況(北から)、SD778土器検出状況(北から)、SX741完掘状況(南から)
 図版 14 3区遺構(7)・調査地南部
 SB5完掘状況(南から)、SP730半裁土層断面(東から)、1区南側にあらわれた断層(南から)
 図版 15 1区出土遺物(1) SX25, 25・26, 26, 30
 図版 16 1区出土遺物(2) SX4, 5, 7, 15, 20, 34
 図版 17 1区出土遺物(3) SX34, SD10, SP184, 包含層, 青磁
 図版 18 2区出土遺物(1) SX299
 図版 19 2区出土遺物(2) SX217, 298, SP225, 277, 279, 287
 図版 20 3区出土遺物(1) SH625, SD614, 626, 772, 778
 図版 21 3区出土遺物(2) SX741, SP414, 441, 655, 705, 770, 包含層
 図版 22 3区出土遺物(3)・1～3区出土埴輪・石器・土製品

第1章 調査に至る契機と経過

既往の調査 一須賀古墳群内において、昭和42年から昭和43年（1967～1968）にかけて、大和団地株式会社による大規模な住宅開発計画、約66haの阪南ネオポリス宅地造成計画が持ち上がった。大阪府教育委員会は、より正確な遺跡分布状況を把握するため昭和43年5月から分布調査を行った。この分布調査では、古墳13基、窯跡2基、弥生式土器散布地4ヶ所が確認された。その後、昭和43年から翌年（1968～1969）にかけて行われた本調査で、A・B・C・D地区の4ヶ所は大規模な弥生時代集落であることが判明した（図1 68・69年度調査区）。東山遺跡の本格調査の端緒である。

その後、第1期計画については最終的に宅地化（現 河南町大宝）されたが、古墳が最も集中する第2期開発計画は中止して古墳群を保存することとなり、昭和45年から昭和48年（1970～1973）にかけて大阪府教育委員会により29ha（古墳数102基）が公有化され、昭和61（1986）年に大阪府立近つ飛鳥風土記の丘として開園された。

昭和59（1984）年には、大阪芸術大学敷地拡張計画に伴う大阪芸術大学構内の試掘調査が大阪府教育委員会によって実施された。前述のA・B地区の北約400mにあたる。試掘調査では、弥生時代後期の竪穴式住居跡、古墳の周溝と考えられる溝など、調査地域のほぼ全域で遺跡の存在が確認された。

昭和61（1986）年度には、大阪芸術大学のグラウンドと体育館用地の造成に伴って、河南町教育委員会が86年度調査区として、約5,800㎡の発掘調査を実施した（図1 86年度調査区）。その後、開発計画の進捗状況から約8年の中断期間を経たが、平成6（1994）年12月から翌年7月にかけて、94年度A・B・C調査区として、残りの造成部分の発掘調査を再開した（図1）。さらに、翌年になって府道柏原駒ヶ各千早赤阪線山城バイパス整備事業が具体化し、大阪芸術大学の造成計画と合わせて発掘調査を行うこととなった。これを受けて河南町教育委員会では、道路工事で影響を受ける94年度C調査区の南東部を拡張し調査を実施した。弥生時代の集落のほか、古墳時代の土壙墓や古墳を検出したものである。

調査の経緯 平成20（2008）年、大阪芸術大学の南西側に広がる農地は後継者不足のため大半が荒地となっていた。土地所有者らによる希望を受けて、学校法人塚本学院はこの土地を買い取り、大阪芸術大学のグラウンドとする計画がもちあがった。これを受けて、河南町教育委員会は学校法人塚本学院と協議を行い、調査費用を学校法人塚本学院が負担して発掘調査を実施することとした。

平成20年9月に、グラウンド外周道路部分を影響範囲として1～9トレンチを設け、試掘調査を実施した（図2）。平成21（2009）年2月から、遺構が確認された部分1,727㎡を対象に本調査を行った（図1 09年度調査区）。1区では、510㎡を、2区では対象の275㎡を、農道によって分断される東側を2-1区、西側を2-2区に分割して発掘した。3区では対象の742㎡を、農道や石垣によって分断される西側から3-1区、3-2区、3-3区、3-4区に分割して、1区、2区、3-1・3-4区、3-2区の順に着手した。各調査区で、現代耕作土下の遺物包含層を掘削し、地山まで調査した。遺構検出数約1300、検出面は1面である。出土遺物は中世、飛鳥から平安時代、弥生時代に所属するものが主で、土器・石器など33コンテナである。平成21（2009）年8月に現地調査を完了した。その後、平成22（2010）年7月にグラウンド造成地内のクラブハウス建築に伴って協議を行った結果、基礎高を上げて遺跡への影響を避け、保存を図ることとした。

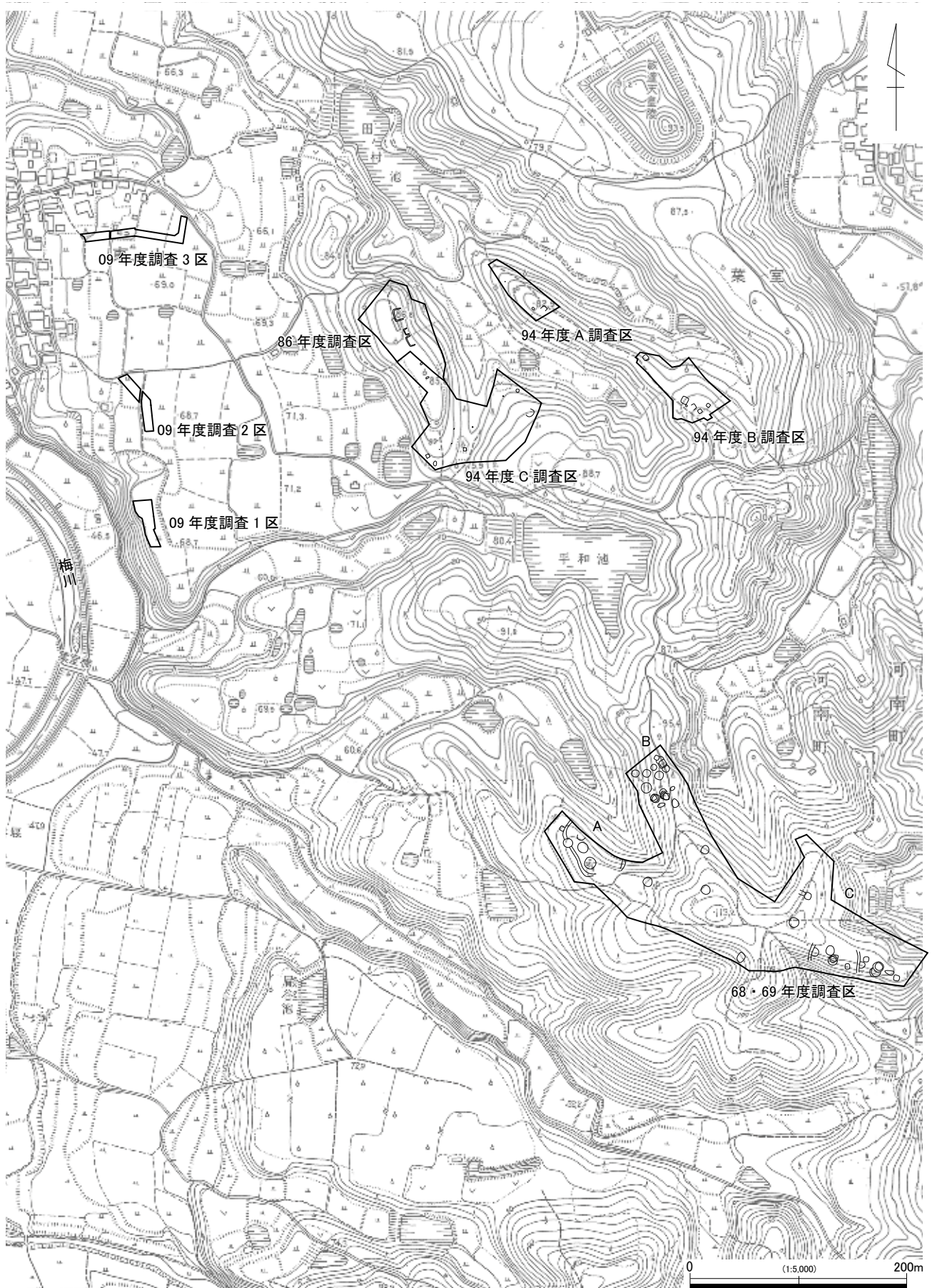


图1 東山遺跡調査区位置図 (S=1/5,000)

第2章 位置と環境

地理的環境 大阪府南河内郡河南町は大阪府の東南部に位置する。北は太子町、西は富田林市、南は千早赤阪村、東は葛城山の頂をもって奈良県北葛城市、御所市と接している。北には大和の飛鳥に通じる竹内峠があり、葛城山の南、金剛山との間には葛城の地へと通じる水越峠がある。また、西側には石川が北流し、陸路・水路の交通の要衝といえる。

葛城山の西にはその前山である三つの山塊がある。一番北、太子町との間にまたがる山塊の北側の丘陵上に一須賀古墳群が存在する。この山塊の西側にもいくつかの丘陵がのびており、この丘陵上に営まれたのが南河内屈指の高地性集落である東山遺跡である。葛城山の前山の西側には東西約1km、南北約3kmの段丘地形がみられ、段丘上は河南町の中央にあたることから通称河南台地と呼ばれている。台地の西側は千早川が北流し石川に合流している。東側には天満川が北流し梅川を経て石川に合流している。

地質的にみると葛城山は花崗岩類によって構成され、その前面には砂礫と粘土からなる大阪層群、段丘礫層が、さらにその前面には軟弱な粘土と砂礫からなる沖積層がある。葛城山地の北にある二上山は瀬戸内火山系に属する火山で、安山岩類で構成される二上層群からなる特殊地域である。その噴出物である長石讃岐岩（サヌカイト）は石器の材料に、凝灰岩は石棺や建築用材に、ざくろ石安山岩の風化堆積物は金剛砂という研磨剤として古くから利用されており有名である。

東山遺跡は大阪府の南東部、近鉄長野線富田林駅から石川を越えて、東へ約3kmのところにある。葛城山の西にはその前山である、「一のはげ山塊」、「持尾山塊」、「白木・中村山塊」の三つの山塊がある。一番北の、東山・北加納・平石・畑・葉室・伽山の集落に囲まれた「一のはげ山塊」は、南側が高く、北側には北西方向へ尾根が幾筋ものびている。この尾根上には約200基からなる一須賀古墳群が存在し、東山遺跡は一須賀古墳群の北西部にあたる。



図2 試掘トレンチ・調査区配置図(S=1/3,000)

大阪芸術大学・大宝住宅造成以前の地形図（図1・68）をみると、昭和43・44年に大阪府教育委員会が調査したA・B・C地区の南東には、北東側と南西側から深い谷が入り込んでおり、一須賀古墳群の古墳が密集する尾根から切り離されたような、独立丘陵状の地形となっている。高地性集落の名にふさわしい場所を選地しているといえよう。A・B・C地区の集落と付近の標高60m付近の平坦面からの比高は30～40m、またC地区で検出された集落と南東側の各部との比高は20mを測る。なお、A・B・C地区の中間の山頂には、鑢頭太刀や金銅製の杵が出土したことで有名な一須賀WA1号墳が存在する。

B地区がある尾根は、先で北方向と西方向の二股に分かれる。北方向の尾根を行くと、標高87mの鞍部をはさんで標高108mの山へいたる。この山が大学敷地最東端にある山である。そして86年・94年度の調査地は、この山から派生する尾根上にあるため、昭和43・44年の大阪府教育委員会による調査が行われたA・B・C地区から尾根づたいに行き来できる場所にある。

大学敷地南東端にある標高108mの山からは、さらに北方向と北西方向に2本、計3本の尾根がのびている。北方向の尾根は、途中で北西方向に屈曲し、徐々に幅を広げていく。この部分には、敏達陵古墳が築かれ、さらに北西には葉室西峯遺跡、伽山遺跡が存在する。東山遺跡と葉室西峯遺跡、伽山遺跡が一つの独立丘陵内に存在することは、集落のあり方を考える上で興味深い事実である。

86年・94年調査区は、残る大学敷地東端の山から北西方向へのびる2本の尾根にある。2本の尾根のうち、北側の尾根の基部は広いが、中程は細く非常に痩せており、先端付近で少し広がっている。先端付近に設定したのが94年度A調査区、基部が94年度B調査区である。南側の尾根は上部の平坦面が広く大阪府教育委員会の試掘調査で一辺約8mの竪穴住居が見つかったところで、この平坦面は今回の造成区域からははずされている。さらに谷をはさんで北西には独立した尾根があり、この独立した尾根の北半分が86年度調査区で、南半分から谷にかけてが94年度C調査区である。86年度調査区のさらに北西には、やはり独立した尾根があり、ここから北西に低い尾根が北西にのびている。現在、大阪芸術大学の校舎が建ち並んでいるところである。

調査区の標高は、86年度調査区で標高80～86.5m、94年度A調査区はT.P.+76～83m、B調査区はT.P.+80～90m、C調査区は86年度調査区寄りT.P.+86m、谷底部でT.P.+73m、南東の最も高いところはT.P.+88mに位置する。竪穴式住居が検出されたレベルは94年度B調査区でT.P.+83m～89m、94年度C調査区でT.P.+82m、また試掘調査第14トレンチでT.P.+87mを測る。付近の平坦面からの比高は約20～30mで、昭和43・44年に調査されたA・B・C地区と比較すると約10m低い。

歴史的環境 この地域は調査が十分に及んでおらず、調査の手が及んでいない空白地帯も多いが、二上山北麓で旧石器時代の石材採掘坑や加工場が確認されており、この付近の歴史は旧石器時代に遡る。

縄文時代では、遺構は確認されていないが河南町神山遺跡・寛弘寺遺跡・山城廃寺、富田林市錦織遺跡・西板持遺跡などで縄文土器が出土している。神山遺跡では河道から縄文早期の押型文土器や中期末と考えられる加曾利E式系の文様を有する土器が、包含層から中期末から後期初頭の土器が出土している。河道出土の土器はローリングをあまり受けておらず、土器のみ出土する分厚い包含層があることから周辺の台地上に縄文集落の存在が考えられる。最近、太子町ミヤケ北遺跡から滋賀里Ⅲ式期の土器棺墓や土坑が検出されており、台地上だけでなく、不安定な砂州上にも遺構が形成されていたことが推測できるようになってきた。しかし、調査がすすんでいない地域があることを考慮しても、縄文時代の人々の足跡は希薄といえる。

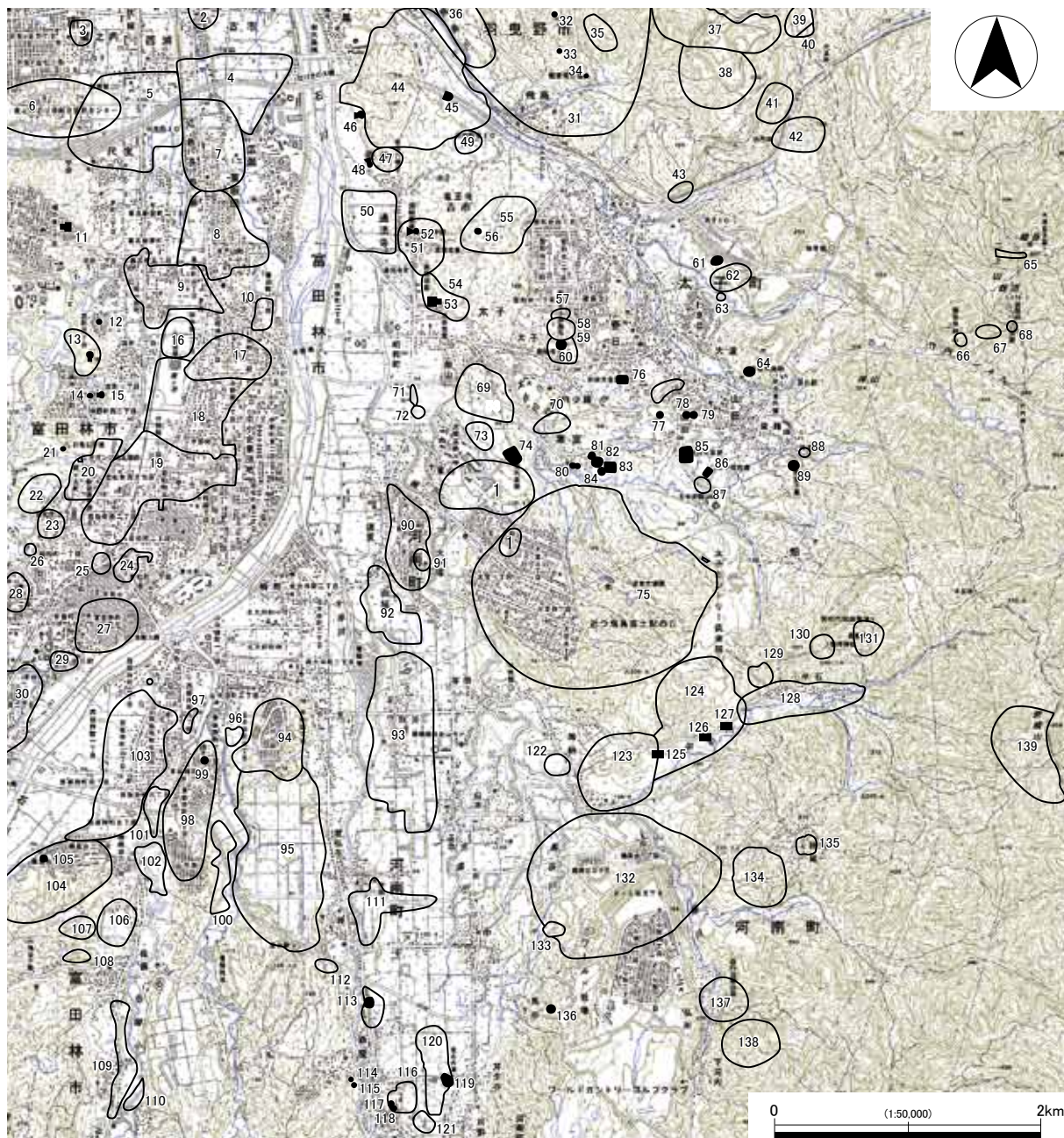


図3 東山遺跡周辺主要遺跡分布図(S=1/50,000)

1. 東山遺跡 2. 城山遺跡 3. 蔵之内遺跡 4. 西浦東遺跡 5. 尺度遺跡 6. 農林センター散布地 7. 東阪田遺跡 8. 喜志遺跡 9. 喜志西遺跡
10. 喜志南遺跡 11. 平1号墳 12. 鍋塚古墳 13. 宮神社裏山古墳群 14. 宮前山古墳 15. 真名井古墳 16. 栗ヶ池遺跡 17. 桜井遺跡
18. 中野北遺跡 19. 中野遺跡 20. 新堂庵寺 21. お亀石古墳 22. 新堂古墳群 23. 新堂南遺跡 24. 畑ヶ田遺跡 25. 堀ノ内遺跡
26. 明楽遺跡 27. 富田林寺内町遺跡 28. 毛人谷遺跡 29. 谷川遺跡 30. 甲田遺跡 31. 飛鳥千塚古墳群 32. 鉢状山南峰古墳 33. 観音塚上古墳
34. 観音塚古墳 35. オウコ古墳群 36. 駒ヶ谷古墳群 37. 石万尾遺跡 38. 株山遺跡 39. ドンズルポー遺跡 40. ドンズルポー石切場跡 41. 穴虫峠遺跡
42. 牡丹洞石切場遺跡 43. 柏峯遺跡 44. 駒ヶ谷遺跡 45. 蔵塚古墳 46. 壺井丸山古墳 47. お旅山遺跡 48. お旅山古墳 49. 河内飛鳥寺跡 50. 通法寺糸里遺構
51. 通法寺遺跡 52. 通法寺裏山古墳 53. 九流谷古墳 54. 九流谷遺跡群 55. 御嶺山遺跡 56. 御嶺山古墳 57. チンチの森遺跡 58. 叡福寺遺跡
59. 上城古墳(聖徳太子墓) 60. 叡福寺 61. 茶白山古墳(紀吉継墓誌出土地) 62. 地獄谷遺跡(旧妙見寺) 63. 片原山遺跡(采女竹良埜城碑出土地)
64. 上ノ山古墳(孝徳天皇陵) 65. 二上山城 66. 鹿谷寺跡 67. 岩屋峠西方石切場跡 68. 岩屋 69. 伽山遺跡・伽山古墳 70. 上所遺跡 71. ミヤヶ北遺跡
72. ミヤヶ遺跡 73. 葉室西峯遺跡 74. 奥城古墳(敏達天皇陵) 75. 一須賀古墳群 76. 向山古墳(用明天皇陵) 77. 山田西古墳 78. 松井塚古墳
79. 仏陀寺古墳 80. 塚穴古墳 81. モンド塚古墳 82. 釜戸塚古墳 83. 葉室塚古墳 84. 石塚古墳 85. 高松古墳(推古天皇陵) 86. 二子塚古墳
87. 長野前遺跡 88. 万法蔵院跡 89. 伝小野妹子墓 90. 大ヶ塚寺内町遺跡 91. 大ヶ塚城跡 92. 山城庵寺 93. 別井遺跡 94. 西大寺山古墳群・善山城跡
95. 寛弘寺遺跡・古墳群 96. 山中田北遺跡 97. 梅田遺跡 98. 板持古墳群 99. 板持丸山古墳 100. 尾平遺跡 101. 柿ヶ坪遺跡 102. 下佐備南遺跡
103. 西板持遺跡 104. 彼方遺跡 105. 彼方丸山古墳 106. 佐備神社南遺跡 107. 柳谷南遺跡 108. イタイゴ古墳群 109. 佐備川西岸遺跡 110. 岸之本遺跡
111. 神山遺跡 112. 神山丑神遺跡 113. 大森遺跡・大森塚古墳 114. 森屋1号墳 115. 森屋2号墳 116. 御旅所遺跡 117. 御旅所北古墳 118. 御旅所古墳
119. 金山古墳 120. 芦生谷遺跡 121. 川野辺遺跡 122. 加納遺跡 123. 加納古墳群 124. 平石古墳群 125. シシヨツカ古墳 126. アカハグ古墳
127. ツカマリ古墳 128. 平石遺跡 129. 平石城跡 130. 磐船神社遺跡 131. 高貴寺 132. 白木古墳群 133. 下河内散布地 134. 持尾遺跡 135. 持尾城跡
136. 馬谷古墓 137. 弘川寺 138. 陣屋山城跡 139. 持尾古墳群

弥生時代前期も同様で、羽曳野市東阪田遺跡で前期の土器が出土しているが、遺構は未確認である。前期の遺跡は石川と大和川が合流する付近の船橋遺跡、国府遺跡まで北上しなければならない。石川中流域に稲作のための本格的な開発が始まったのは中期になってからである。羽曳野市と富田林市にまたがる喜志遺跡、富田林市中野道跡・甲田南遺跡で中期の集落が確認されている。喜志遺跡は石川西岸の中位段丘に位置し、東西 200m、南北 200m ほどの範囲に集落が営まれている。集落の東、段丘の縁辺と南側で大きな溝が確認されており環濠集落の可能性が指摘されている。また、集落内では居住域と土器や石器の製作域が分かれている可能性が考えられ、集落周辺に墓域、水田域が想定でき集落構造を考える上で興味深い遺跡である。集落は中期前半に成立し、中期中頃から後半に盛行し、後期になると急激に衰退する。中野遺跡は喜志遺跡の 1.5km 南にある。集落の中心は石川を臨む段丘上にあり、喜志遺跡と同じく段丘縁辺で大溝が確認され、石器加工場を伴っていたようである。甲田南遺跡は、中野遺跡の南西 3km のところに位置する。やはり、石川西岸の下位段丘上に集落が営まれ、段丘縁辺には大溝が確認されている。集落の範囲は東西 200m、南北 150m で、北側に墓域が設けられる。遺跡の盛行時期は中期後葉である。この 3 遺跡はいずれも石川を臨む段丘上という立地条件、集落の規模、環濠かどうかは意見の分かれるところではあるが、段丘縁辺に大溝が存在する、集落周辺の墓域のあり方など共通要素が多く、石川流域の弥生時代中期の集落を特色付けるものである。また、喜志・中野の両遺跡はサヌカイトの原石、石器の未製品、石屑やチップが多量に出土することから石器製作の集落と考えられている。これは喜志遺跡の北 1.5km にある城山遺跡も同様である。国府・船橋遺跡を拠点とし、南に 1.5～3km の間隔で集落が存在し、それぞれ有機的に結ばれていたことが想定される。そして、これら中期の集落は後期になるとなぜか突如として消滅する。

弥生時代後期になると代わって丘陵上に集落が形成されるようになる。いわゆる高地性集落である。羽曳野市駒ヶ谷遺跡・御嶺山遺跡、太子町チンチの森遺跡・葉室西峯遺跡、河南町寛弘寺遺跡・神山遺跡そして東山遺跡などである。寛弘寺遺跡では農地造成に伴い 1984 年から 12 年に及ぶ調査で瘦せた尾根上に百数十棟を越える竪穴式住居が検出されている。これら後期の高地性集落は生業の場である水田とはかなりの比高差を有すが、数度の建替えを行う住居がかなりあり、一時的な集落ではなく定住期間を考える必要があるだろう。

やがて時代は古墳時代へと移っていく。石川谷周辺では古墳時代前期前葉の古墳は未だ確認されていない。1 段階遅れて石川西岸に築かれた真名井古墳（前方後円墳 60m）が初現である。真名井古墳の西には近接して前期後葉の鍋塚古墳（円墳 25m）が築かれる。石川と千早川の中間の丘陵には前期中葉の板持丸山古墳（円墳 35m）、次いで板持 3 号墳（前方後方墳 40m）が築かれ、石川東岸の太子町から羽曳野市にかけての丘陵上に前期中葉の壺井丸山古墳（前方後円墳 69m）、九流谷古墳（前方後方墳 70m）、次いでお旅山古墳（前方後円墳 46m）、通法寺裏山古墳（前方後円墳 47m）が築かれる。こうした古墳の動向は小地域を基盤とした首長層の台頭を物語るものであろう。中期になるとこれら前方後円（方）墳は無くなり、首長墳の造営も止む。この地域の前方後円（方）墳は、後期中葉の奥城古墳（前方後円墳 113m）、蔵塚古墳（前方後円墳 54m）まで待たなければならない。中期初頭に造営が開始され、後期中葉に造営を終える古市古墳群との関係が考えられる。しかしその一方で、寛弘寺古墳群では前期中葉に始まった造墓活動は衰退することなく中期、後期、さらに終末期へと連綿と続き、これまでに 90 基以上の古墳が確認されている。さらに南、神山遺跡では主体部不明の円墳（17 m）と横穴式石室を主体部とする墳形不明墳の計 2 基が確認された。出土土器から 6 世紀初頭と 6 世紀末から 7 世紀

初頭に比定される。寛弘寺古墳群とあわせて、在地の造営主体の存在をこれまで以上に補強する成果となる。

後期になると一須賀古墳群、飛鳥千塚古墳群など横穴式石室を内部主体とする群集墳が形成され、この地の古墳は爆発的に増加する。一須賀古墳群は二百余基からなる古墳群で、ほとんどが直径10～20mの横穴式石室を内部主体とする円墳で、出土遺物や石室構造から造営主体には渡来系氏族が考えられている。

前方後円墳が終焉を迎えた後、この地の古墳は再度生彩を放つ。その一つが7世紀の王陵を始めとする大型古墳である。前方後円墳の終焉直後、河南台地の最奥部に金山古墳が築かれる。大小二つの円丘を合わせた形の双円墳で全長85.8mを測る。北丘には全長約10mの横穴式石室があり、内部には2個の刳抜式家形石棺が納められている。南丘でも墓道が確認され横穴式石室を内部主体とすることがわかっている。この時期の大型古墳で内部構造がわかる貴重な例である。磯長谷にも向山古墳（方墳60m）、高松古墳（長方墳60m）、葉室塚（長方墳75m）、上城古墳（円墳52m）などがある。向山古墳、高松古墳、上城古墳はそれぞれ用明陵、推古陵、聖徳太子墓に比定されている。陵墓の比定には異論もあるが、磯長谷の大型古墳が王陵クラスの古墳であることは確実である。

もう一つ、7世紀の古墳を特色付けるものに横穴式石槨がある。石川西岸の丘陵上に築かれたお亀石古墳、宮前山古墳、羽曳野市東部の鉢伏山南峰古墳、観音塚古墳、磯長谷の松井塚古墳、仏陀寺古墳と枚挙にいとまがない。一須賀古墳群の南、平石峠を通過して大和に通じる平石谷には、平石古墳群が広がる。貼石や敷石を伴う墳丘を3段にもち、基壇部で40mを超える大型の長方墳3基である。特にシシヨツカ古墳では、羨道部出土の須恵器が6世紀後半から末に比定され、横穴式石槨の編年に再考を促すこととなった。被葬者について官人層をあてる議論はあるが、同時期に横穴式石室を営む勢力との関係にも着目すべきである。

古墳時代の集落については不明な点が多い。寛弘寺古墳群と千早川をはさんで対岸にある神山遺跡では中期の竪穴式住居が数棟密集してみつきり、寛弘寺古墳群との関係が注目される。太子町上所遺跡で古墳時代前期・中期の住居が、伽山遺跡でも中期の住居が確認されているが、古墳に比べその検出数は圧倒的に少ない。今後の調査に期待されるところである。

前方後円墳が終焉するころはまた、これに代わる政治的モニュメントとして寺院が建立され始める時期でもある。石川谷周辺の古代寺院は、石川と大和川の合流付近である古市・志紀郡に比べ分布密度が低い。富田林市にある新堂廃寺は飛鳥時代の創建で、白鳳期の再建伽藍の一部が確認されている。その他は、瓦が採集されているだけで伽藍等が不明な寺院が多い。その中で異彩を放つものとして、奈良時代に造営された鹿谷寺跡と岩屋をあげることができる。両者は二上山麓の凝灰岩石切場跡を利用して造られたもので、日本ではここにしかない石窟寺院である。鹿谷寺には分厚い凝灰岩の岩盤を削り出して造った十三重の石塔が現在もそびえている。遠くインドに起源をもつ石窟寺院がこの地に造られたのはいかなる理由によるものであろうか。

奈良・平安時代以降、中世にいたるまで、石川あるいは佐備川、千早川といったその支流周辺の段丘上に集落が営まれる。中野遺跡では弥生時代の集落に重なるように中世の集落が広がる。神山遺跡でも奈良時代から平安時代にかけての遺構が確認され、当該期の集落が段丘上に広がると予想される。この地はまた楠木正成ゆかりの地である千早赤阪村に近いこともあり、南北朝期の城跡も数多く残されている。陣屋山城跡、持尾城跡、平石城跡などである。城塞の遺構をよくとどめ縄張り図なども作成されて

はいるが、発掘調査は未だ行われていない。

戦乱により荒廃したこの地であるが、16世紀になって大ケ塚、富田林で寺院を中心に町場が興り、発展していく。近世には石川郡・古市郡にまたがる一万石の代官所として、白木と東山に陣屋が営まれていることが文献に残る。そして、この発展は現在へと続く。

【参考文献】

- 天野末喜 1990「地域の古墳・近畿中部・大阪」『古墳時代の研究』10
大阪府教育委員会 1983～1995『寛弘寺古墳群発掘調査概要』I～VII
大阪府教育委員会 1994『甲田南遺跡発掘調査概要』
河南町役場 1968『河南町誌』
太子町立竹内街道歴史資料館 1995『二上山麓の古代寺院』
富田林市役所 1985『富田林市史』第1巻
羽曳野市役所 1994『羽曳野市史』第3巻

第3章 調査・整理の方法

調査区の位置 調査地は既知の埋蔵文化財包蔵地外、西側へ広がり、大阪府南河内郡河南町大字東山に位置する（図2）。

地区割 世界測地系(2002年4月以降)の国土座標軸に準拠し、調査区ごとに4×4mグリッドに分割し、遺構実測などの基本単位とした。ただし包含層中の遺物の取り上げはこれによっていない。

高さ、方位、色調、遺構番号、遺物番号 凡例の通りである。

遺物の取り上げ 遺構出土の遺物は検出遺構別に、包含層の遺物は、掘削土層ごとの取り上げを基本とし、必要に応じて平面的な位置で分割した。遺物登録番号は取り上げ単位ごとに付した。

図面作成 各区の調査区全体図は地区杭を基準とした測量で縮尺1/40で作成した。土層断面図は縮尺1/20で作成した。単独の遺構や遺物出土状況などは対象物に応じて適宜図化した。

遺物整理 調査現場で登録を行い、整理期間中に洗浄、注記を行った。遺物登録番号ごとに報告書掲載遺物をピックアップし、復元、実測、写真撮影などを行った。遺物の記述については、主に次の文献を参考にした。そのほか特に参考にしたものは本文中に示した。

【参考文献】

- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2
巽淳一郎 1991「考察 土器」『平城宮発掘調査報告XIII』p.p.370-383 奈良国立文化財研究所
田辺昭三 1966『須恵邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ
玉田芳英・巽淳一郎 1995「考察 土器」『平城宮左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』p.p.481-496
奈良国立文化財研究所
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
寺沢薫・森井貞雄 1989『弥生土器の様式と編年 近畿編I』木耳社
中村浩 1978「和泉須恵邑出土の時期編年」『須恵邑III』大阪府教育委員会
西弘海 1976「考察 土器」『平城宮発掘調査報告VII』p.p.139-149 奈良国立文化財研究所

第4章 1区の調査成果

第1節 概要

1区は今回調査地で最も南に位置する。調査時は平坦な耕地だったが、かつては梅川にそって南にのびる中位段丘の縁辺西部であったものと思われる(図1)。この段丘先端部と段丘を横切った形で試掘を行ったが、遺構の検出は見なかった。北側にも浅い谷が入りこんでいるため、遺跡は1区東側に広がると予測される。調査面積は510㎡、調査前地盤高はおおよそT.P.+67.3mで崖下の梅川とは比高差約20mを測る。現代耕作土層を重機で約20～60cm除去し、層厚40～60cmの包含層を人力掘削した。

遺構検出面はT.P.+66.4m前後の地山面で、東部では約T.P.+67.0mまで上がる。北西の一部では溝・落ち込みの埋没もしくは整地によって平坦な面を形成し、地山面より上層T.P.+66.6mで遺構面を検出しており、遺構は、方形周溝墓、掘立柱建物、溝、土坑、ピット等がある(図4、図版2)。

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器があるが、小片がほとんどである。数量的には中世に所属する土器が最も多い。包含層中には多時期の遺物小片が混在し、東西に横切る土管が埋設されているなど、現代の耕作に伴う削平や整地も頻繁に行われている。

第2節 層序

1区の西辺、南辺で、現代耕作土層を除去した約T.P.+67.3m以下地山面まで観察・図化を行った(図5)。

層序は全調査区でほぼ共通し、黄灰色耕作土(1区①層)、黄橙～褐灰色粘質土の床土(1区②層)、黄褐色ベースの遺物包含層(1区西壁③⑦層など)が水平堆積する。これらの層は単位が大きく、砂礫や地山由来と思われる土を含む攪拌した土であり、自然堆積というより整地に伴うものであろう。北西部の落ち込みにはやや粘性をもつ黄褐色土(⑨～⑬層)が堆積する。

第3節 遺構と遺物

(1) 方形周溝墓(図5～7、図版3・4・15)

1区西壁沿いに検出したSX25、SX25・26、SX26は、方形周溝墓の周溝と考えられる。主体部や盛土は確認できなかったが、方形の区画や、長軸中央が深く両端に向かって浅くなる溝、溝の埋土から出土した弥生土器を検出した。西側は調査区外の急崖で、崩落もしくは削平を受けて現存しない。

SX25 南辺・北辺の一部と東辺を検出した。全体形は不明だが、方形部南北長4.6mを測る。周溝幅0.6～1.6m、深さは東辺中央で深く30～45cm、北端・南端では深いところでも22cmと浅くなる。軸は西へ約10°振る。

SX25・26 SX25の北辺、SX26の南辺にあたる。幅1.6～2.2m、深さ約40cm。西壁土層断面で底部形状に区切りが確認でき、掘削は別に行われたことが推測される。しかし堆積土や遺物からSX25とSX26間で明確な区分は見いだせない。従って時期差をもって掘削されたとしても、一時期は確実に周溝を共有し、埋没は同時期であったと考える。

なお、溝は幅と深さを減じつつも東方向へ延びることから、東側にも墓域が広がっていた可能性はある。ただし根拠となる遺構や遺物は検出していない。

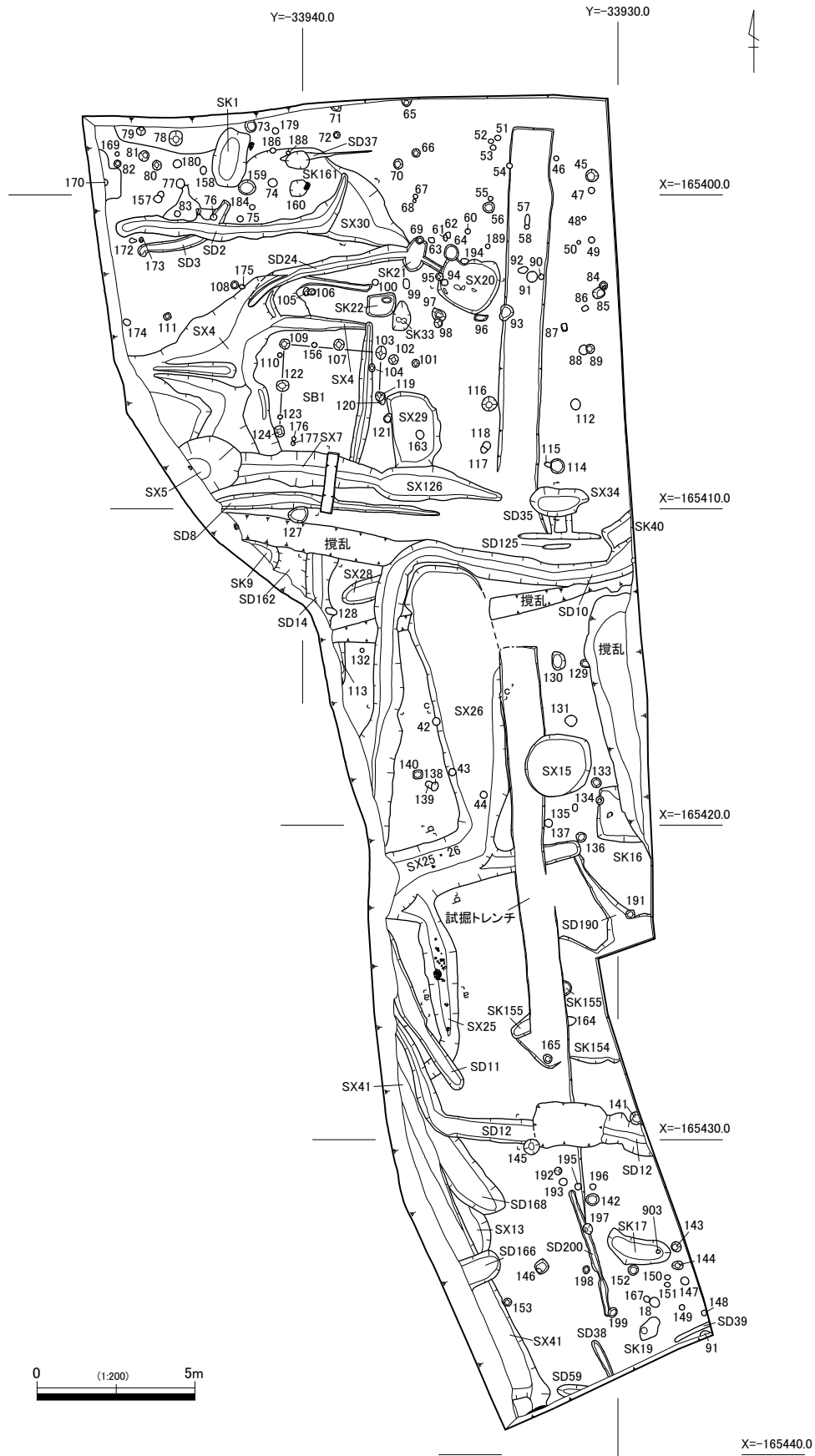
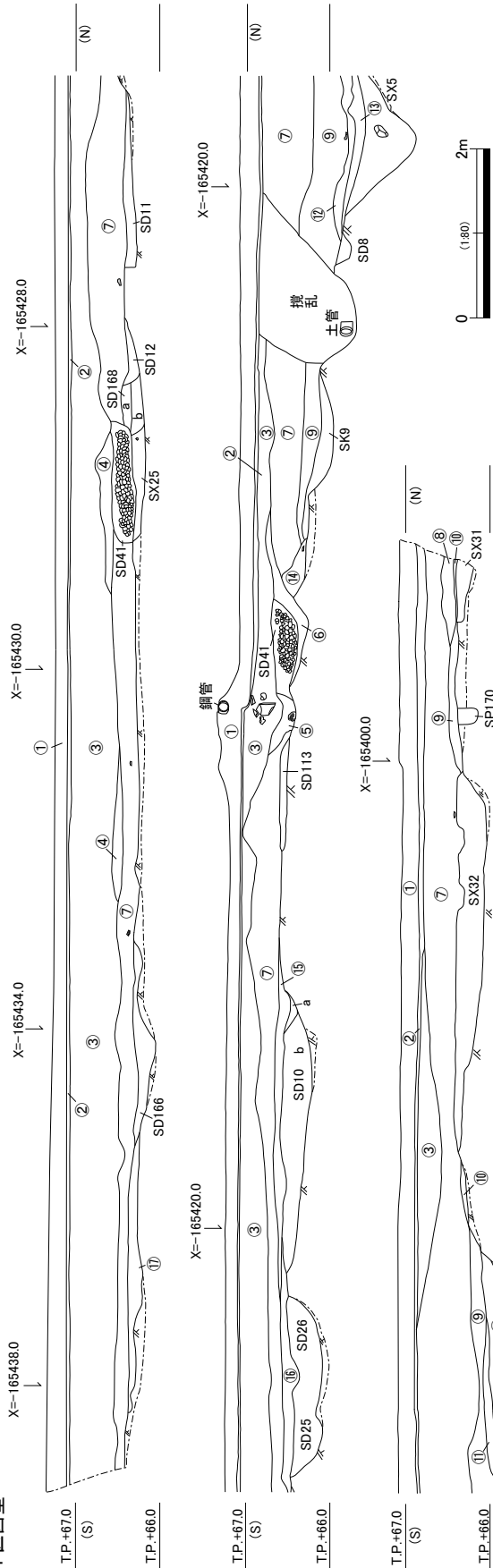
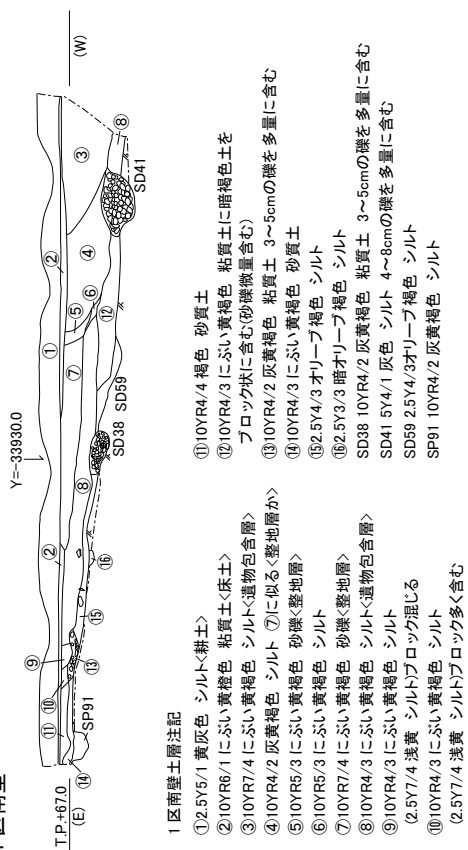


图 4 1 区全体平面図 (S=1/200)

1 区西壁



1 区南壁



- 1 区西壁土層注記
- ① 2.5Y5/1 黄灰色 シルト<耕土>
 - ② 10YR6/1 褐灰色 粘質土<床土>
 - ③ 10YR7/4 にぶい黄褐色 シルト<礫層>
 - ④ 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
 - ⑤ 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘質土<攪乱>
 - ⑥ 10YR にぶい黄褐色 粘質土
 - ⑦ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト<遺物包含層>
 - ⑧ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
 - ⑨ 2.5Y7/4 浅黄色 シルト<ブロック状に混じる>
 - ⑩ 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土
 - ⑪ 10YR7/6 明黄褐色 砂質土
 - ⑫ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
 - ⑬ 2.5Y7/4 浅黄 シルト<ブロック状に混じる>
 - ⑭ 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘質土 砂礫少量含む
 - ⑮ 2.5Y6/2 灰黄色 粘質土 砂礫少量含む
 - ⑯ 10YR3/3 暗褐色 シルト 1~3mmの礫を多く含む
 - ⑰ 10YR4/3 に暗褐色 シルト<遺物包含層>
 - ⑱ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト<遺物包含層>
 - ⑲ 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土 砂礫少量含む
- 1 区南壁土層注記
- ① 2.5Y5/1 黄灰色 シルト<耕土>
 - ② 10YR6/1 にぶい黄褐色 粘質土に暗褐色土をブロック状に含む<砂礫少量含む>
 - ③ 10YR7/4 にぶい黄褐色 粘質土 3~5cmの礫を多量に含む
 - ④ 10YR4/2 灰黄褐色 シルト<遺物包含層>
 - ⑤ 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂礫<礫層>
 - ⑥ 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト
 - ⑦ 10YR7/4 にぶい黄褐色 粘質土
 - ⑧ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト<遺物包含層>
 - ⑨ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 4~8cmの礫を多量に含む
 - ⑩ 2.5Y7/4 浅黄 シルト<ブロック状に混じる>
 - ⑪ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
 - ⑫ 2.5Y7/4 浅黄 シルト<ブロック状に混じる>
- 1 区西壁土層注記
- SX5 2.5Y6/3 にぶい黄色 粘質土 砂礫少量含む
 - SK9 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土 砂礫少量含む
 - (10YR3/3 暗褐 シルト)<ブロック状に混じる>
 - SD10a 10YR4/4 褐色 粘質土
 - b 10YR4/4 褐色 シルト
 - SD11 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土 マンガン多く含む
 - SD12 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土 マンガン多く含む
 - SD14 5YR4/1 灰色 シルト 4~8cmの礫を多量含む
 - SX25, SX26 10YR3/3 暗褐色 シルト 1~3mmの礫を多く含む
 - SX31 10YR3/3 暗褐色 シルト 1~3mmの礫を多く含む
 - SD41 5Y4/1 灰色 シルト 4~8cmの礫を多量含む
 - SD113 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土
 - SP170 10YR5/2 灰黄褐色 粘質土 砂礫少量含む
- 1 区南壁土層注記
- ① 10YR4/4 褐色 砂質土
 - ② 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土に暗褐色土をブロック状に含む<砂礫少量含む>
 - ③ 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土 3~5cmの礫を多量に含む
 - ④ 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土
 - ⑤ 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト
 - ⑥ 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト
 - ⑦ 10YR7/4 にぶい黄褐色 粘質土
 - ⑧ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 3~5cmの礫を多量に含む
 - ⑨ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 4~8cmの礫を多量に含む
 - ⑩ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
 - ⑪ 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
 - ⑫ 2.5Y7/4 浅黄 シルト<ブロック状に混じる>

図 5 1 区西壁・南壁土層断面図 (S=1/80)

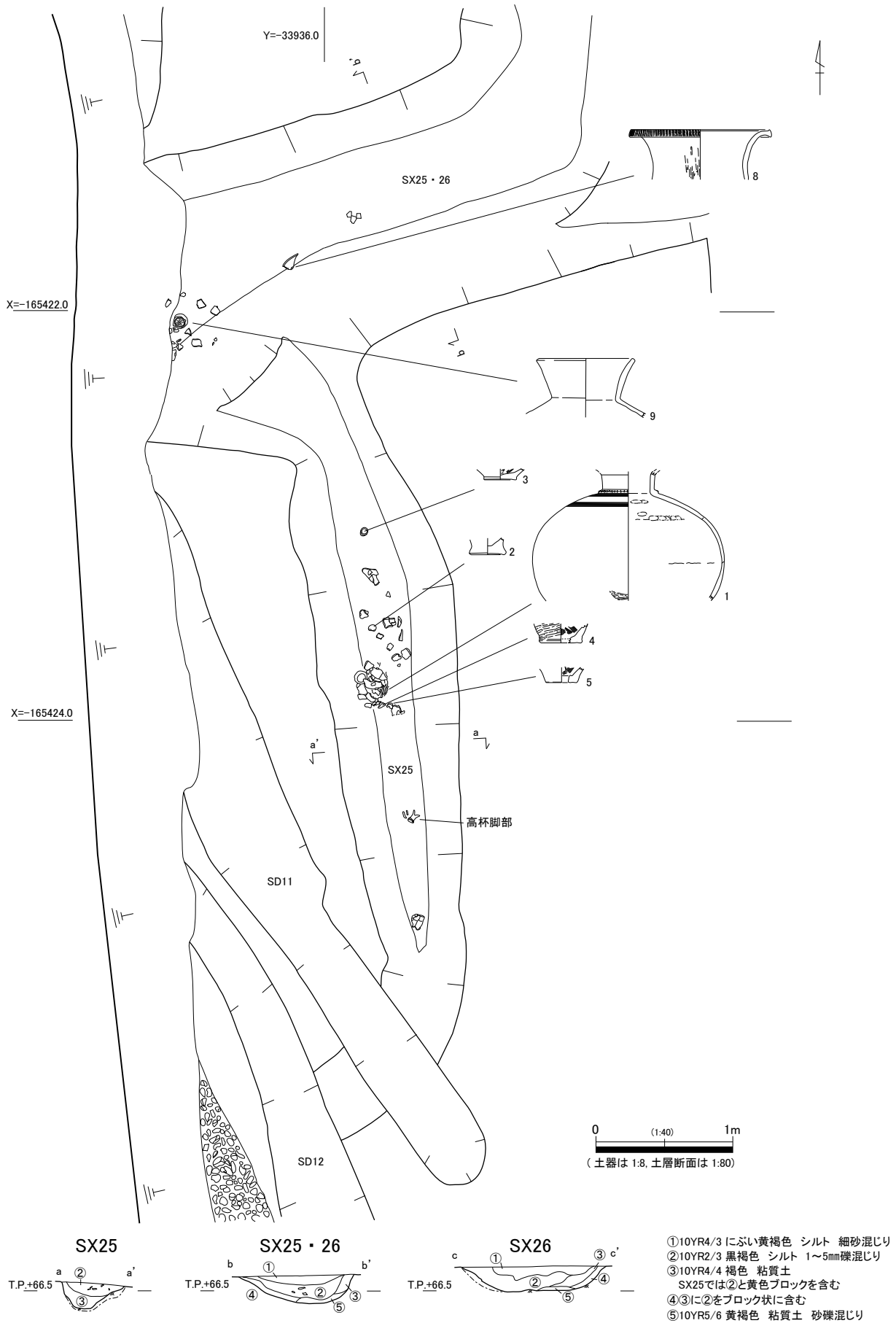


図6 SX25,25・26,26 遺物出土状況,土層断面図(S=1/40)

SX26 南北にのびる溝で、北端で幅を広げる。SX28を北辺と考えると、方形部が南北長約7.8m、周溝幅1.2m～2.2m、深さは中央の深い所で約40cm、南北端では20～30mを測る。

遺物出土状況 SX25・26の周溝内には上層に黄褐色土(①層)が、下層に黒色土(図6-②層)が堆積し、②層から特にまとまって弥生土器が出土する。SX25の東辺周溝ほぼ中央で、壺(1)が口縁を西に向けてつぶれた形で出土しており、その周辺に土器がやや集中する。

SX25・26では②層の中位から、壺(9)が口縁を下にして、やや東に離れて壺(8)が、同じく東に離れて高杯(11)が出土した。いずれも溝の底面ではなく埋土中位の出土であり、溝内に堆積土がある程度たまってから墳丘上にあったものが溝中に転落したものと考えられる。

出土遺物 SX25では弥生土器片、サヌカイト剥片3片が出土している(図7-1～7)。図示したもののほか14に似た壺口縁や、強めに外反する杯部をもつ高杯などが出土している。1は広口壺。頸部に浅い刻み目を施す突帯をもつが、肩部に2条のクシ描き直線文がめぐり新旧の要素を合わせもつ。頸部は短く直立して口縁につづき、体部は扁球形を呈する。底部を欠くが、2の突出した底部と胎土、焼成ともに良く似通っている。2～5は底部。3は角閃石を含む。生駒山西麓産か。4は外面にタタキが残り、甕と考えられる。穿孔をもつ可能性があるが、欠損のため不明瞭。5は焼成前穿孔。高杯は6と7があり、6は外面ハケ調整、7は脚台裾部が広がる。

SX25・26では弥生土器片、サヌカイト剥片1点が出土している(8～13)。8は広口壺の口縁～頸部。頸部がゆるやかに外反して口縁端部は上下に肥厚する。風化が著しく明らかではないが、凹線状の痕跡が一部みられる。SX20出土のものと同接合している。9は短頸壺で、口縁端部は丸みを帯びつつも面をもつ。風化のため調整不明。10は受口状に肥厚する口縁端部。甕か。11は高杯の円錐台形脚台。裾は広がりをもつ。底部12にはタタキが残り、13は高台状に引き出されている。全体に赤変するため甕と思われる。

SX26からは弥生土器片、サヌカイト剥片6片のほか、須恵器片と瓦器片数点が出土している(図7-14～38)。下層の黒色土に弥生土器片の6割弱が集中する。14、15は弥生土器広口壺の口縁部。下方へ肥厚するもの。16～19は弥生土器底部。19は中央がやや凹む。

上層からの出土が特定できるのは、弥生土器(20～22)のほか、サヌカイト剥片、須恵器(23・24)である。20はクシ描き斜格子文をもつ破片。壺か。21は底部。22は二重口縁広口壺。屈曲部に円形浮文を付しており、在地的な特徴をもつ。胎土に角閃石と雲母を含む。23は高杯脚部。細い基部をもつが、透かし孔はなく、二重の沈線のうち上の1本は途中で止まる。おおよそTK43からTK209型式期であろう。24は甕。頸部には上方と斜め上へ向かって描かれたヘラ記号がある。これらの須恵器は方形周溝墓に伴うものではなく、廃絶後の流入と考えられる。

下層黒色土中からは弥生土器(25～38)と、サヌカイト剥片、須恵器甕片、瓦器片数点が出土した。25は受口状を呈する口縁。頸部が外反してのびるため広口壺と考えられる。26～36は底部。33はタタキが、35はハケが外面に施される。底部形態は平らなものが多いが、突出するもの33、中央の凹むもの35、つまみ出しの高台をもつ鉢と考えられるもの36など多様である。37、38は高杯脚部。うち38は杯部内面にミガキが残り、脚台基部は中実化している。同一個体と思われる裾部破片が水平方向に4cm強伸びることから、裾部が発達したものと考えられる。

SX26では二重口縁壺や、裾部が発達した高杯など新しい要素をもつものが目立つ。SX26をやや新しく位置づけることも可能であるが、出土遺物全てが明確に分けられるものでないため、V様式後半からVI-1様式のうちに捉えておきたい。

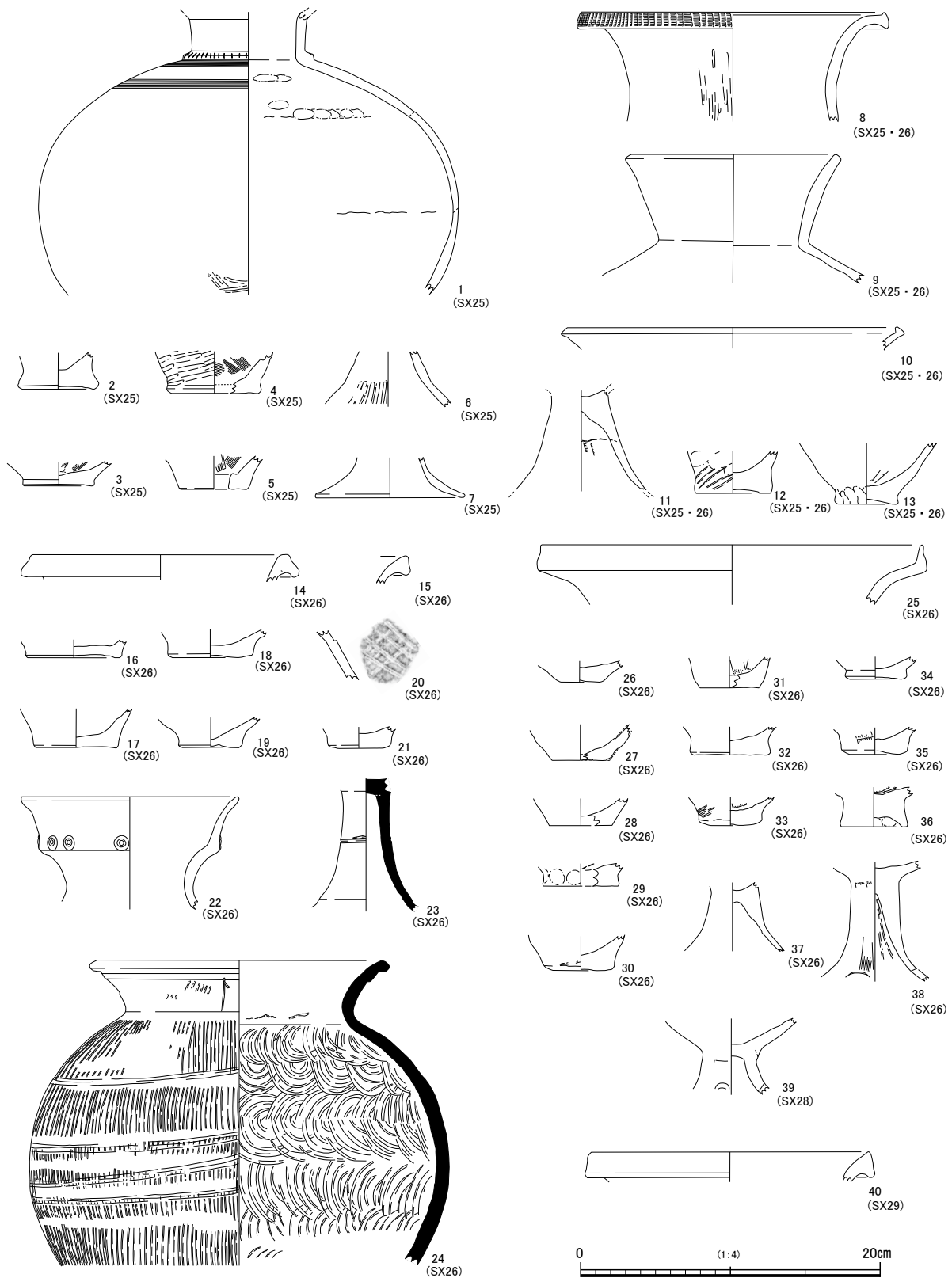


図7 1区 SX25,25・26,26,28,29 出土遺物実測図 (S=1/4)

SX28 SX26 に北端をそろえて東西にのびており、SD10 によって切られているため SX26 の北辺と考える。幅 70cm、深さ 1.6m を測り、溝長軸は西へ約 20° 振る。

出土した弥生土器のうち高杯 39 は、円形の透かし孔が一部残る。杯部が深いものか。

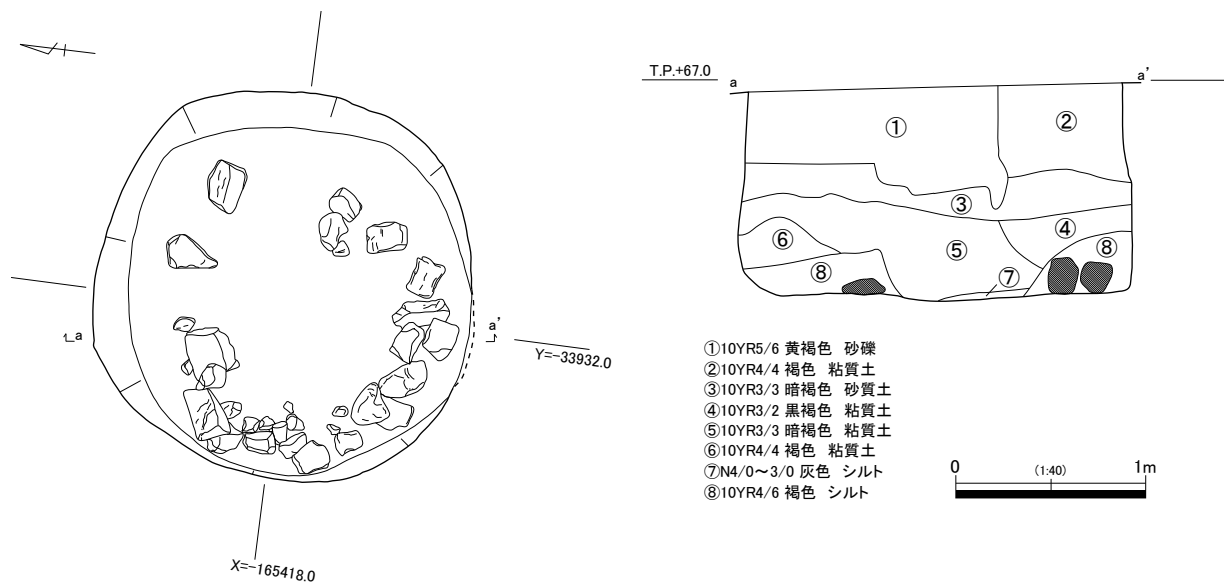


図8 1区SX15平面・土層断面図(S=1/40)

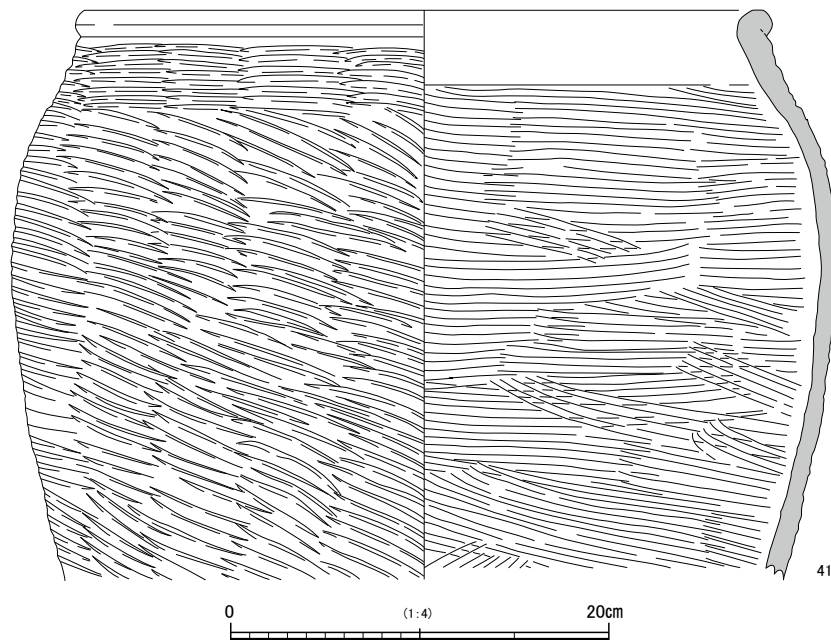


図9 1区SX15出土遺物実測図(S=1/4)

SX29 SX26の北で、軸方向を同じくして短く南北にのびる。幅約2m、深さ20cm。出土遺物が弥生土器に限られており、SX25やSX26に関連する可能性がある。40は下方へ肥厚する広口壺口縁部。ほかタテミガキをもち外傾する長頸壺の頸部片や、受口状の口縁部、タタキのある甕が出土している。

そのほか詳述しないが、調査区西辺、SX28のすぐ西から北へのびるSD162、調査区南西側から東北東にのびるSD166は、黒色の埋土や出土遺物から弥生時代に所属すると考えられる。

(2) 井戸状遺構 (図8・9、図版4・16)

SX15 調査区ほぼ中央に位置するSX15は直径約2.0m、深さ1.1mの円形の土坑(図8)。壁はほぼ垂直で、平坦な底面に10~30cm前後の自然礫が円形に並ぶ。当初井戸かと思われたが、底面のレベルは最も深い所でもT.P.+66.4mで、地下から水が得られるほどではない。

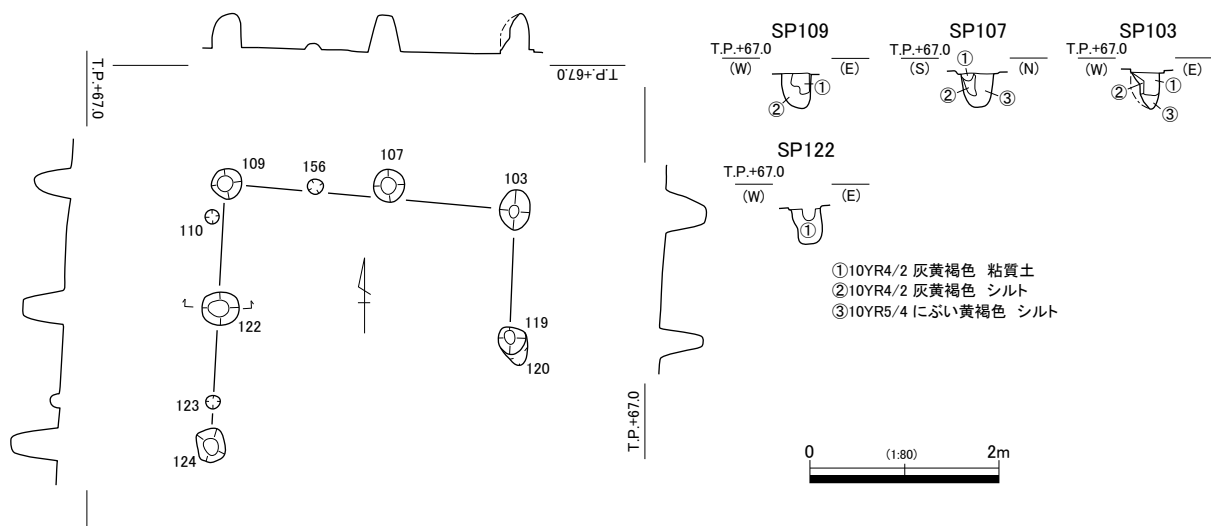


図 10 1区 SB1 平面・断面・土層断面図 (S=1/80)

埋土は③層の砂質土を境に大きく上下層に分かれるが、底面礫周辺の褐色シルト層（⑧層）は④～⑦層に切れ、②層も整地土と考えられる砂礫土①層に切られることから、数度にわたって手が加えられていたものと思われる。

遺物は瓦器片と土師器片が数点出土するのみである。瓦器甕（図 9 - 41）は③層以下から出土した。復元口径 35.8cm の大形甕で、外面タタキ、内面ハケ調整。口縁部は玉縁状で 15 世紀後半から 16 世紀に比定される。SD4 埋土や SX30 付近の包含層からも類似した体部片が出土しており、同様の時期のものかと思われる。

(3) 掘立柱建物（図 10、図版 5）

SB1 調査区北側、溝や落ち込みに囲まれる平坦地で、2 × 2 間以上の掘立柱建物を検出した（図 10）。東辺と南辺を欠くが、残存で南北 2.8m、東西 3.1m を測り、建物方向は N - 4° - E。柱間距離は 1.4m ~ 1.7m。柱穴は直径 30cm 前後、検出面からの深さ 30 ~ 40cm 程度で、黄褐色ベースのシルト ~ 粘質土が堆積する。なお、SP110、123、156 といった直径 20cm 弱の一回り小さいピットが柱穴と並んで検出されており、建物に関連する添え柱の可能性もある。

出土遺物はほとんどないが、時期の分かるものとして SP103 から瓦器羽釜片が出土している。時期を確定し得るものではないが、中世の建物と考えておきたい。

(4) 落ち込み状遺構（図 11 ~ 17、図版 16・17）

調査区北西部で SX30 埋土を除去後、新たに遺構を検出したため下層遺構として図 11 に示した。地山面はゆるやかに西側へ低くなっており、段丘上の落ち際にあたる地形を鑑みると、特に不定形な SX4 などは土や水の流出といった自然的な要因によって形成されたものと考えられる。

SX4 幅 10 ~ 50cm の細い溝から調査区西側へ不定形に広がる落ち込みである。下層を切って黄褐色土が堆積している（図 12）が、落ち込みが埋まった後に流水等によって削られ細い溝が形成されていたものと思われる。

土師質土器、須恵器、瓦器、サヌカイト剥片、鉄塊等が出土している。図 14 - 45 ~ 47 は土師器皿。復元口径で 45 は 8.6cm、46 は 10.6cm、47 は 10.4cm を測る。45、46 は橙褐色で胎土粗く、47 は淡

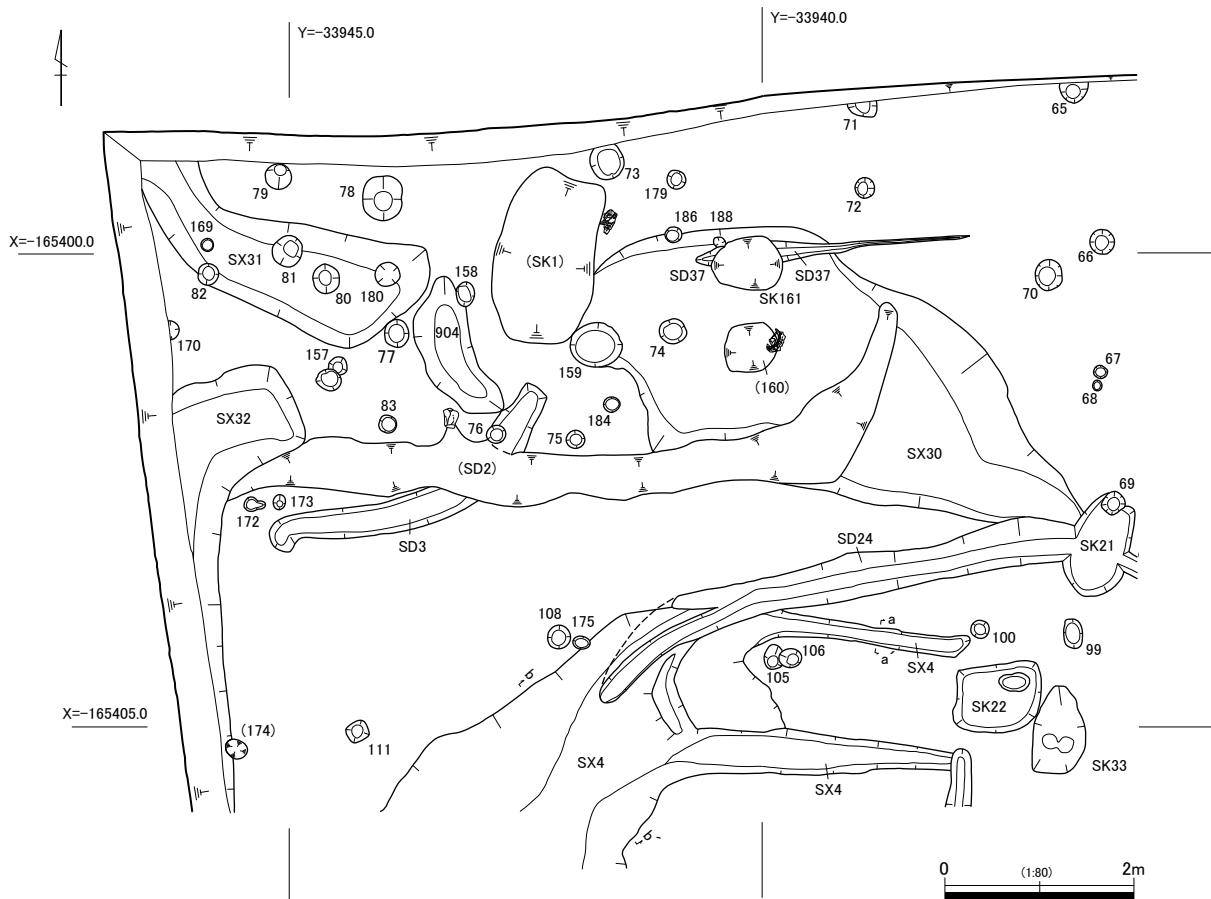


図 11 1区北側下層遺構平面図 (S=1/80)

褐色で胎土も比較的精選されている。ほか、同心円文タタキをもつ須恵器甕体部片、大和型羽釜、東播系捏鉢、瓦器椀、SX15出土品（図9-41）によく似た瓦器甕体部などが確認できる。

SX5 SX4の南に連なり、検出面からT.P.+66.6m（深さ60cm）まで挿鉢状に深く落ち込む（図5西壁）。土層断面から、黄色粘質土が埋積した後に、SX4の浅い落ち込みが形成されている。

土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土している（図14-49～56）。図示したのは最下層から出土したものである。49、50はいわゆる大和型の羽釜。49は口縁端部を内側に突出させる。器面は浅黄橙色をなす。50は口縁端部を外方に折り返しておさえる。罫は短く薄い。器面は淡黄色で、胴部内面には円形圧痕が残る。51は土師器皿。復元口径5.2cm、器高1.0cm。底部は粗い指押さえ。淡褐色。和泉型瓦器椀52は復元口径10.4cm、残存高2.0cm。低平な器形で、高台が退化もしくは消失したものであろう。口縁部をナデ成形するほかは、指押さえの痕が残り、内面は太い暗文がめぐる。瓦器椀53は復元口径9.9cm、残存高1.8cm。皿に近い形態をとり、内面に太い暗文が一条みられる。いずれも小片のため口径復元値に不安は残るが、尾上編年の和泉型IV-4～5期にあたるか。54、55は東播系捏鉢。54は口縁部から体部にかけて外反し、口縁端部は上下に拡張する。14世紀代のものか。55はやや内湾する体部

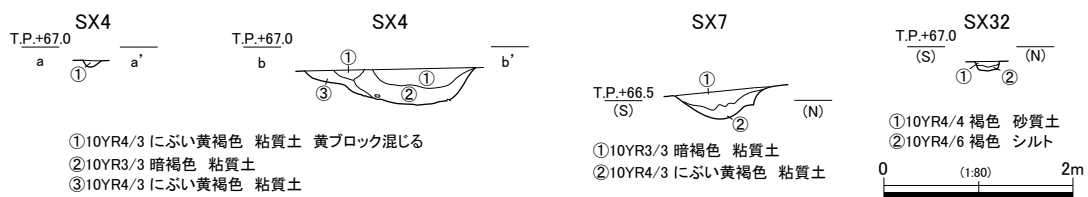


図 12 1区 SX4,7,32 土層断面図 (S=1/80)

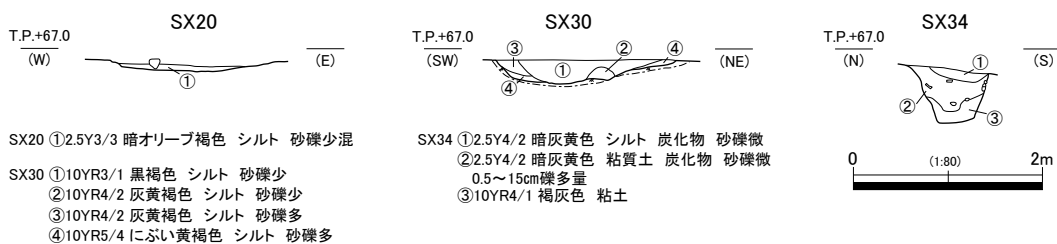


図 13 1 区 SX20,30,34 土層断面図 (S=1/80)

とわずかに肥厚する口縁端部をもつ。56 は丸瓦。内面は一部に布目圧痕が残り、外面は縄目叩きの後、ナデが施されている。胴部には釘穴が認められる。

そのほか遺構検出時や上層から、京都系かと思われる白色で胎土の精選された土師器皿や、二次焼成を受けた捏鉢底部なども出土している。時期幅をもつが 52 や 53 の存在から 14 世紀前半を下限とするものであろう。

SX7, SX126 SX5 から東方向にのびる (図 4)。遺構名を異にしているが、同一のものである。SX4 と同一埋土が堆積しており、同時期に廃絶されたものと考えられる。

SX7 からは、土師器、須恵器、瓦器のほか円筒埴輪片 (図 66 - 347) や焼土塊が出土している。実測には耐えなかったが、高台の消失した和泉型瓦器碗も出土しており、14 世紀頃のものと思われる。

図 14 - 42 は、大和型の羽釜。口縁端部を内側に突出させる。内外面ナデ調整で、器面は浅黄橙色で胎土精選。43・44 は土師器皿。復元口径、器高は 43 が 6.6cm、1.0cm、44 が 5.2cm、1.2cm を測る。43 は摩耗のため不明瞭だが、二段ナデを施すものか。44 は非常に薄手である。

SX20 平面形は方形に近い不定形で、深さ 10cm と非常に浅い (図 13)。切り合い関係から SX4 より新しく位置づけられる (図 4)。出土遺物は土師器と瓦器がある。図 15 - 57 は瓦器羽釜。口縁は内湾気味に直立する。焼成が悪くやや軟質である。

SX30 調査区北部に広がる不定形な落ち込み (図 11)。上層では SX31 や SX32 と一体となり大きく広がる。黒褐色土 (図 13 ①層) が下層を切って堆積しており、SX4 と同じく時期によって形を変えていたものと思われる。SX30 からは弥生土器、須恵器、土師器が出土している。図 16 - 58 は弥生土器壺口縁。口縁は下方へ拡張する。59 ~ 62 は弥生土器底部。風化のため明瞭ではないが、59 は外面ハケ調整。61 は内面に放射状のハケ調整を施す。63 は土師器高杯脚部で、不明瞭ながらも 7 面をもつ。64 は高杯脚部。精選された胎土。65 は高杯裾部であろう。内面は指押さえの痕が残る粗い造り。

66 は須恵器四耳壺もしくは甕とすべきか。肩部に残る把手がおよそ 90° の角度で 2 方向に残る。口縁端部は丸みをおび、内傾する凹面と稜をもつ。体部外面は平行タタキの後、カキ目が施される。器面には自然釉が付着する。67 は断面長方形の口縁をもつ須恵器甕。頸部のタタキはナデ消されている。

図 17 - 68 は復元口径 44.0cm を測る大形の須恵器壺。頸部は太い基部からなだらかに外反してのび、端部で上下に肥厚して稜をなす。外面には、沈線 2 条を巡らせて形成した凸線、沈線 2 条、さらに沈線 2 条で区画して粗雑な波状文を施す。外面はカキ目が見られるが、内面はナデ調整。SX26 出土の破片と接合している。

69 は土師器高杯脚部。8 面の面取りを認める。70 は石臼。側面には斜方向の擦痕が認められ、底面は平滑で、擦り減っている。砂岩か。

出土遺物には弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代のものが混在する。長期にわたって形を変え、平安時代までに廃絶されたものと思われる。

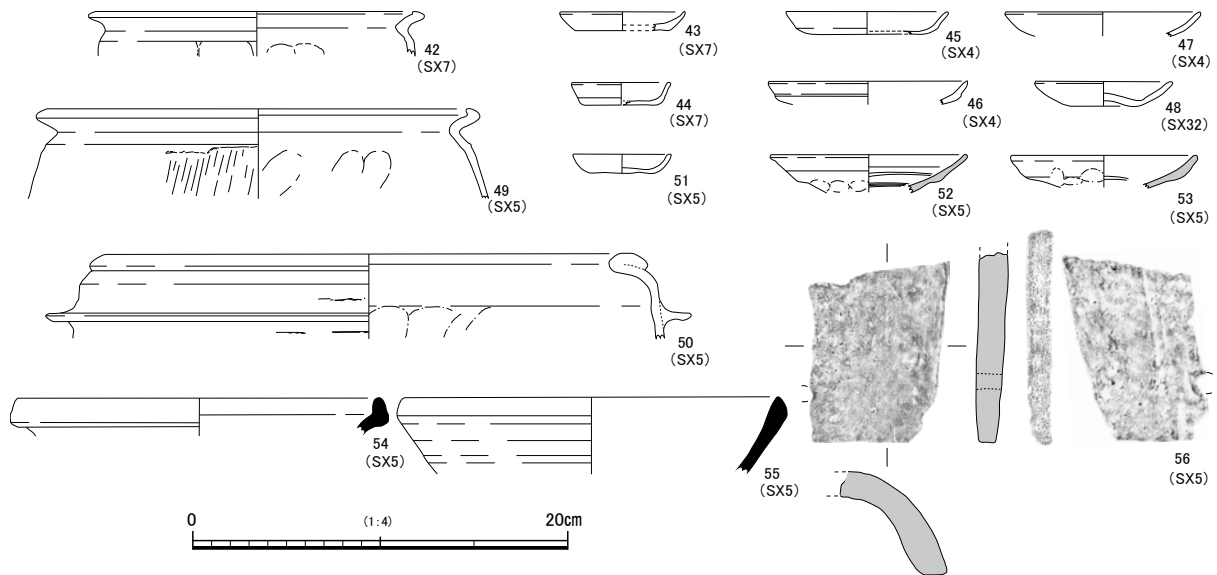


図 14 1区 SX4,5,7,32 出土遺物実測図 (S=1/4)

SX31, 32 調査区北西で、SX31は北西-南東、SX32は東-南にのびるごく浅い落ち込みである(図11)。上層ではSX30と一体化している。SX31, 32を検出中に須恵器片と土師器皿(図14-48)が出土している。底部中央が凹むいわゆるへそ皿で、復元口径7.3cm、器高1.3cmを測る。厚手で端部は丸い。白色系の胎土をもつ。14世紀前半におさまるものであろう。

SX34 SX126の東にあり、長軸方向を同じくする(図4)。楕円形の平面形で、深さ0.6cmを測る(図13)。埋土は3層で、①・②層には炭化物を含む。底面は平らで、落ち込みではなく土坑とすべき遺構かもしれない。

SX34からは土師器、須恵器、瓦器のほか瓦、焼土、二次焼成の痕跡のある石製品が出土している。図18-71~75は大和型の土釜。口縁部を「く」の字形に折り返し、端部を内側に突出させる71~73と、内湾する口縁と外方に折り返す端部をもった74, 75とがある。71と73の外面には口縁上部まで煤が付着する。75は内面にハケ調整がわずかに残る。71, 73, 75は浅黄橙~橙色、72や74はより白みがかかった色調。

76は土師皿。口径8.2cm、器高6.3cm。平底でヨコナデによって形成される口縁は、短く外傾してのびる。端部はまるい。外底面はナデ、内底面には一方向のハケ目の痕跡がわずかに残る。

77~79は瓦器。77は甕口縁。内外面ともに風化が著しい。78, 79は播鉢。79には明瞭なハケ目の後、すり目が施されている。80, 81は東播系須恵器播鉢の口縁部と底部。81は内面良く摩耗し、内底面にはわずかに板状工具の痕跡が残る。82は平瓦で、外面は縄目タタキ、内面は細かな布目圧痕と部分的にナデが残る。

SX34で最も後出する遺物は14~15世紀代に位置付けられるもので、やや時期幅はあるが中世後期までには廃絶されたものと思われる。

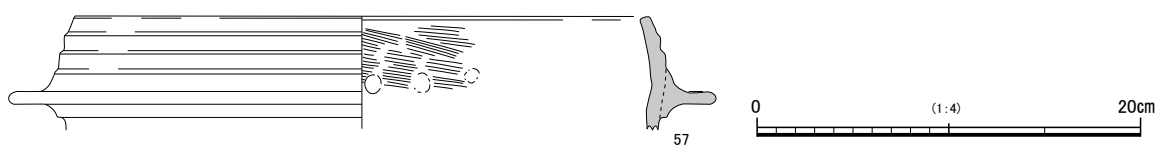


図 15 1区 SX20 出土遺物実測図 (S=1/4)

(5) ピット (図4・11・19・20、図版17)

多数検出されたピットから、遺物が出土しているものや埋土が複層であるものについて記述する。出土遺物数はいずれも数点と寡少である。

SP80 調査区北西部、SX31内に位置する(図11)。直径約30cmの円形ピットで、埋土は黒色ブロックの多寡によって分層した(図19)。周囲に同様のピットが多数存在しているが、明確に建物を構成するものはなかった。出土遺物はわずかに数点で、須恵器甕片と瓦質の播鉢(図20-85)がある。85の口縁端部は丸みを帯び、外面に粘土紐の凹凸が残る。内面は摩耗が著しい。

SP112、114 1区北東部にある(図4)。中央に暗灰黄色土(図19-①層)が柱痕状に堆積しており、柱穴の可能性はある。SP114からは、土師器片と東播系須恵器播鉢(図20-84)が出土した。84は口縁端部を上下に拡張しており、外面に自然釉が付着する。11世紀末から12世紀初頭のものであろう。

SP116 調査区北側、試掘トレンチの西辺に接する(図4)。直径56cm、深さ約30cmを測る円形のピット。土師質の土器片のほか、青磁椀(図20-83)が出土している。龍泉窯系青磁椀で、外面に鎬蓮弁文をもち口縁がわずかに外反する。13世紀初頭から前半に位置付けられる。

SP184 調査区北側、SD2の北側にある(図4)。直径16cm、深さ22.5cmを測る円形のピット。瓦が4片出土しており、そのうち2点を図示する(図20-86、87)。いずれも雁振瓦で同一個体の可能性がある。外面には布目痕の上から長軸方向のナデ、内面にはより明瞭な布目痕と部分的なナデが見られる。87の外面には紐痕かと思われる圧痕も斜方向に見られる。

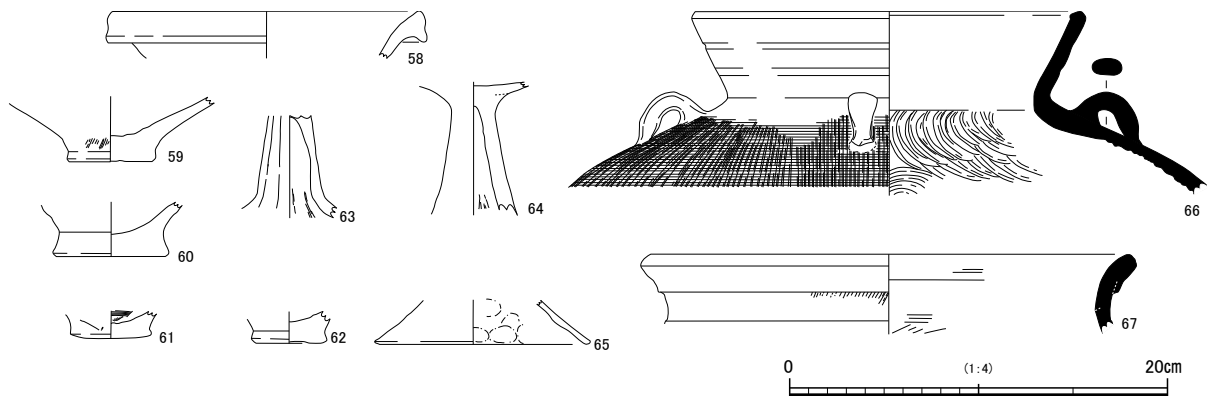


図16 1区SX30出土遺物実測図(1)(S=1/4)

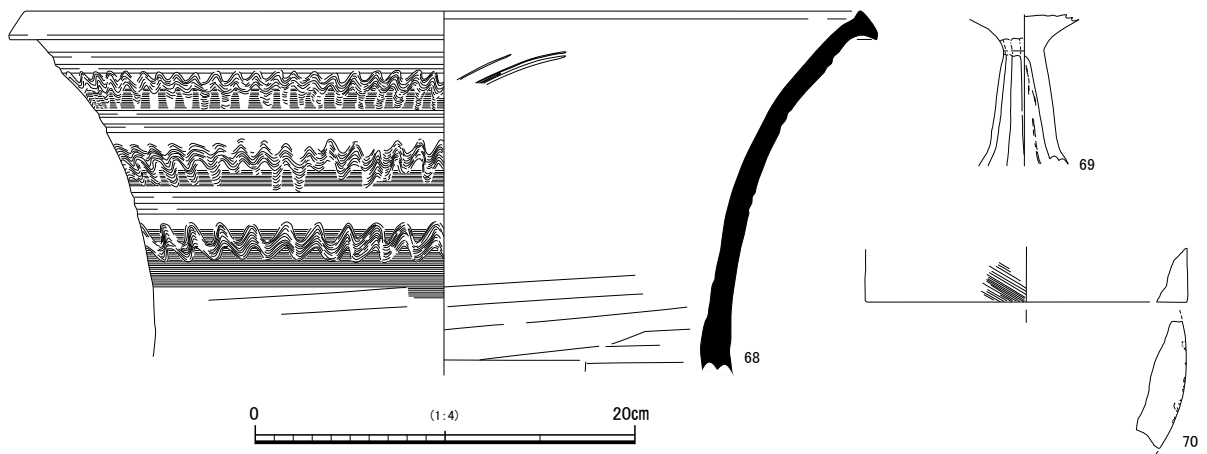


図17 1区SX30出土遺物実測図(2)(S=1/4)

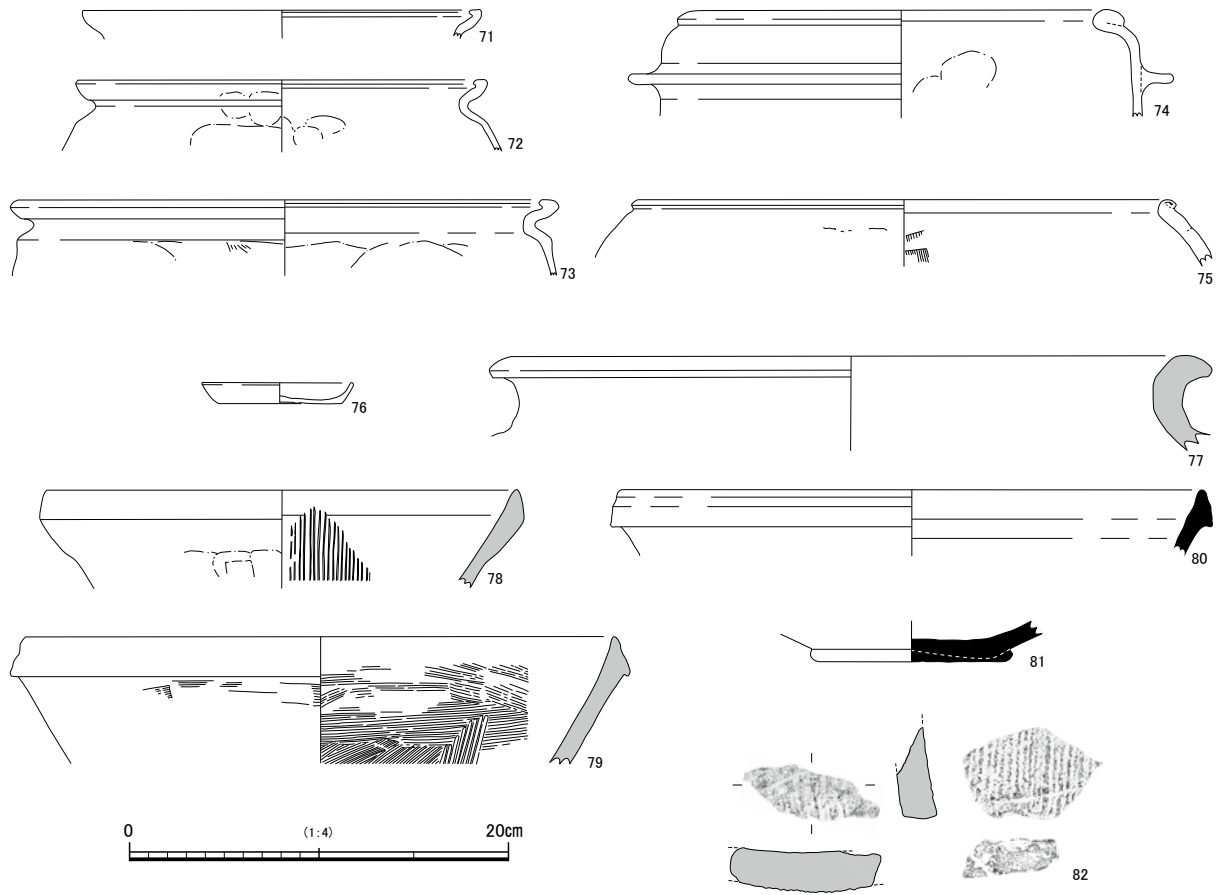


図 18 1 区 SX34 出土遺物実測図 (S=1/4)

(6) 溝 (図 4・21 ~ 23、図版 17)

SD10 調査区中央を横断し、ほぼ直角に曲がる溝である (図 4)。幅 0.9m 前後でほぼ一定、一部広い部分でも 1.3m ほどである。検出面からの深さは 40cm かやや深いくらいである。底面は平らで、断面は台形状を呈する。なお東西方向にのびる部分では、上層に現代の耕作に伴う土製管が同方向にはしる。埋土は 3 層に分かれるが、上層から①にぶい黄褐色、褐色、暗褐色の粘質土が水平堆積する (図 21)。

遺物は比較的多く 200 片近く出土している。土師器、瓦器が主体を占め、弥生土器、須恵器がわずかに、埴輪片、青磁、丸瓦、鉄釘、サヌカイト剥片、磨石が各 1 ~ 2 点出土している。

図 23 - 88 は土師器皿。器面は灰白色をなし胎土精良。厚手で体部外反し、口縁端部は丸みを帯びる。復元口径 7.6cm。器形からいわゆるへそ皿になるものと思われる。89 は瓦器椀底部。内面には疎らな暗文。高台は断面形が半円から三角形で低く退化したものである。和泉型瓦器椀で尾上編年 IV - 1 ~ 2 期であろう。90 は瓦器鉢。火鉢か。外面には四菱文のスタンプが押捺される。復元口径 10.8cm で、平面形は円形となるとと思われる。体部から口縁部へと直立して立ち上がり、口縁端部は平坦に整える。内面

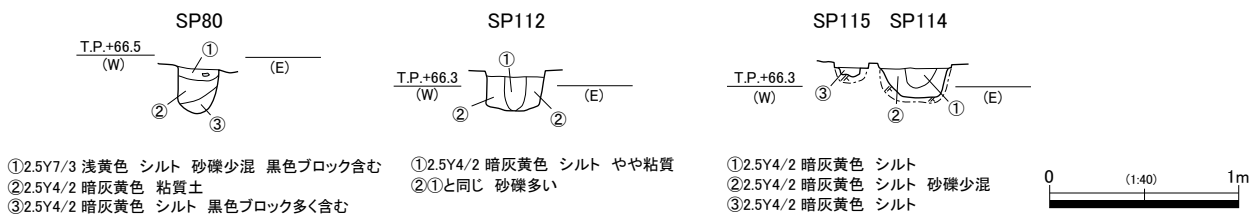


図 19 1 区 SP80,112,114,115 土層断面図 (S=1/40)

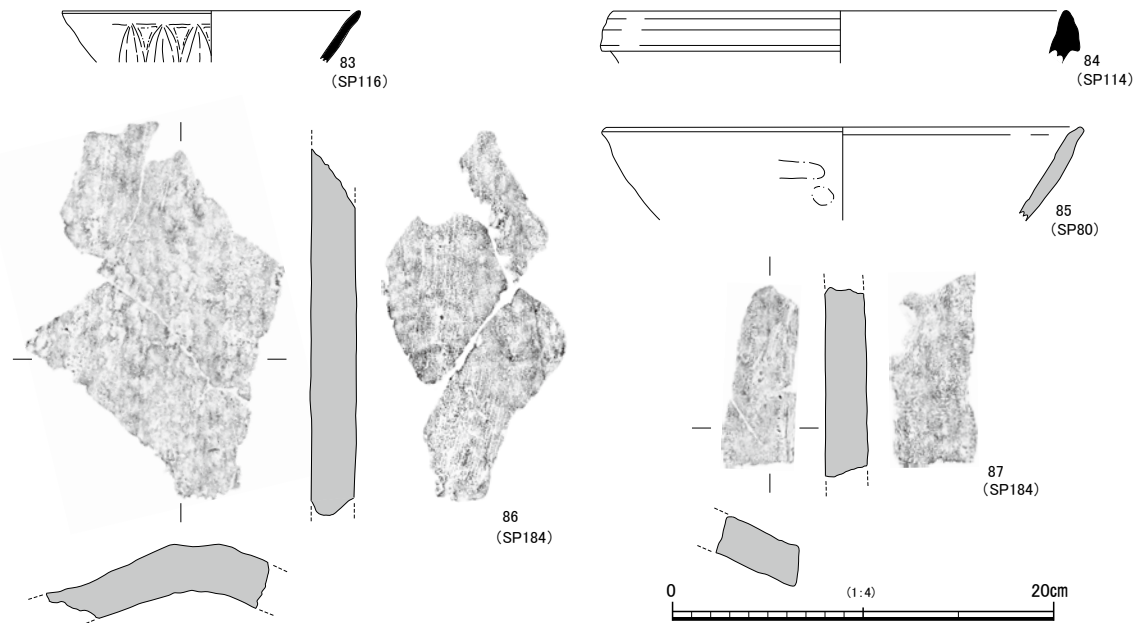


図 20 1区 SP80・114・116・184 出土遺物実測図 (S=1/4)

には横方向のナデ痕が明瞭に残る。

91 は青磁碗底部。釉は畳付を越えて高台内面途中までかかるが、かかりが悪く、高台外面は一部無釉である。外底は無釉だが、トチンの痕が 2 か所残る。また内外面ともに貫入が著しい。外面は蓮弁を構成するであろう細線が入る。

92、93 は弥生土器高杯脚部。92 は外面に縦方向の細いミガキが施され、内面には絞り痕が残る。93 は 4 方向に円形透かし孔が施される。内面には工具痕が残る。

94 は鉄釘。長軸両端を欠損し、残存長 5.9cm を測る。断面方～長方形で、幅 0.5 ～ 0.6cm、厚みは 0.3 ～ 0.6cm。下端で折れ曲がるかのようなカーブをもつが錆のため不明瞭である。

96～99 は瓦器甕。96～98 は復元口径 33.0～35.4cm を測り、ほぼ似た大きさ。96 の外面にはやや細かなタタキ、内面はハケ目と一部ナデ痕が見られる。97 の内面には明瞭なハケ目が残る。98 は粗いハケ目がわずかに見られるが、不明瞭。97 と 98 は炭素の吸着がほとんどみられず、土師器と言っても過言ではないほどである。外面のタタキは非常に粗い。口縁部の形態は外反する 96、折り曲げる 97、玉縁状となる 98 がある。99 は復元口径 29.8cm と 96～97 に比べてやや小ぶりである。外面に整形時の粘土帯の痕を残したままで、やや粗い作り。頸部はほぼ直立し、口縁端部は薄い方形をなす。

100～104 は瓦器羽釜。100 は復元口径 17.6cm と小ぶりのもの。鏝のすぐ上には焼成前穿孔が 2 か所、ほぼ 180° の位置で施される。体部外面は横方向のケズリ調整で、鏝下面までおよぶ。鏝下面から体部にかけて黒変、鏝端部は器面剥落、赤変しており、使用痕跡が著しい。101～104 は復元口径 26.4～27.8cm を測る。101 は口縁やや内湾する。内面には不明瞭だが工具によるナデが認められる。外面の

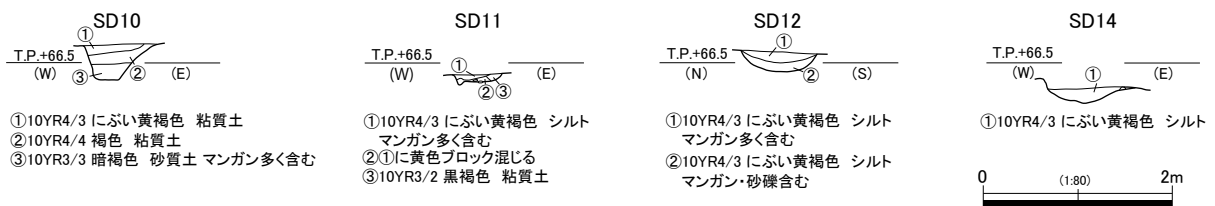


図 21 1区 SD10～12,14 土層断面図 (S=1/80)

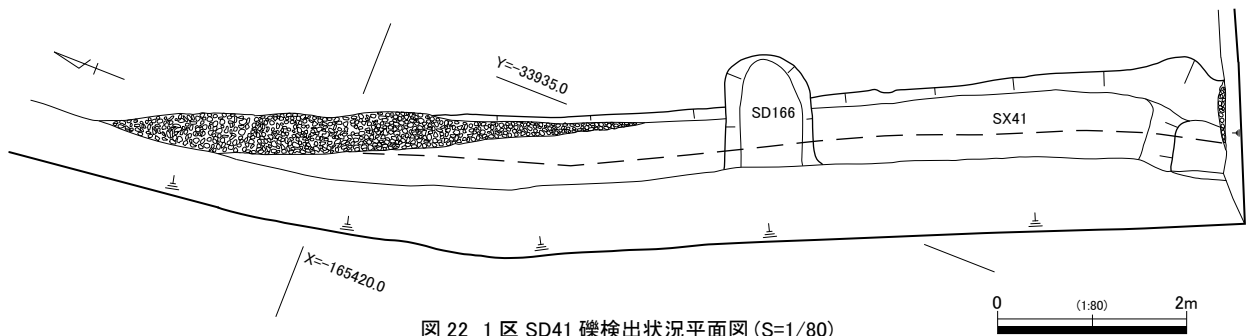


図 22 1 区 SD41 磔検出状況平面図 (S=1/80)

ケズリはヨコ方向で、罫下面におよぶ。102 は著しく風化して内外面とも調整不明。体部外面のケズリは罫直下で終わる。炭素の吸着はほとんど見られず、土師質に近い。103 の口縁部はほぼ直立する。口縁内面はハケ調整、おおよそ罫の高さから下は工具によるナデとなる。104 は頸部外面の段成形が緩やかである。罫部はやや跳ね上がり気味に上方にのびる。体部外面は摩耗のため調整不明だが、ケズリであろう。罫下面におよぶ。内面はハケ調整。

105 ～ 109 は瓦器播鉢。復元口径は 25.0 ～ 29.0cm。105 の口縁部は断面三角形をなす。内面は明瞭なハケ目とすり目が残るが、口縁部はナデがめぐる。106 は底部。密なハケ調整の上からすり目が施される。底部径は復元で 10.4cm。107 は口縁部が肥厚してわずかに「T」字状になる。内面口縁部は粗いハケ調整、体部は細かなハケ調整。すり目は粗い。108 の口縁部は「T」字形に拡張し、端面は凹線状にくぼむ。内面は摩耗が著しいがナデ調整とすり目が認められる。109 の口縁部は下方に拡張する。口縁端面は強いナデによって凹線状に凹む。内面に沈線状の線が一条めぐるが、おそらくナデを施した工具によるものだと考えられる。

出土遺物に時期幅があるが、瓦器椀 89 など古く位置づけられるものはごく一部で、14 ～ 15 世紀代の遺物が多い。13 世紀半ばから形成され、15 世紀ごろには廃絶されたものと思われる。

SD11 幅 50 ～ 70cm で深さは 10cm 前後と浅い溝である (図 21)。次に述べる SD12 と一部並走することから何らかの関連があるものかもしれない。遺物は出土していない。

SD12 調査区南部で東西～北東方向へ曲がる溝。幅 40 ～ 80cm、深さ 10 ～ 20cm。底面は丸く、マンガンを多く含む黄褐色土が堆積する (図 21)。出土遺物は少なく、土師器、須恵器、瓦器が 10 数点である。うち図 23 - 95 は瓦器甕。外面に細かなタタキ調整がほぼ口縁までおよぶ。内面はハケ調整だが、頸部のみハケ調整の後、ナデを施してわずかに面を成している。口縁部断面はほぼ方形に近い。

SD41 調査区南西部で検出した溝である。幅 0.8 ～ 1.0m、深さ 30cm 前後を測り、直径 4 ～ 8cm 程度の礫が溝内ほぼ一面に敷き詰められていた (図 22 破線内)。地山より上層に検出面がある (図 5 南壁)。SD14 や SD38 も同じく礫を敷き詰めた溝であり、同時期の遺構であることが考えられる。

遺物は土師質土器、須恵器、瓦器が出土している。図 23 - 110 は瓦器播鉢。口縁端部はわずかに下方に拡張する。摩耗が著しいが、口縁内面には粗いハケ調整と体部にすり目が認められる。

(7) 遺構に伴わない遺物 (図 24)

図 24 - 111 は遺構精査時、112 ～ 114、116、118、119 は包含層掘削時、115、117 は重機掘削時に出土した。

111 は灰白色を呈す土師皿で、復元口径 8.4cm を測る。風化のため不明瞭だが、口縁には横方向のナデ、体部外面は不調整。112 は青磁。椀か。高台径は復元で 7.4cm。釉は高台外面までかかり、一部は置付

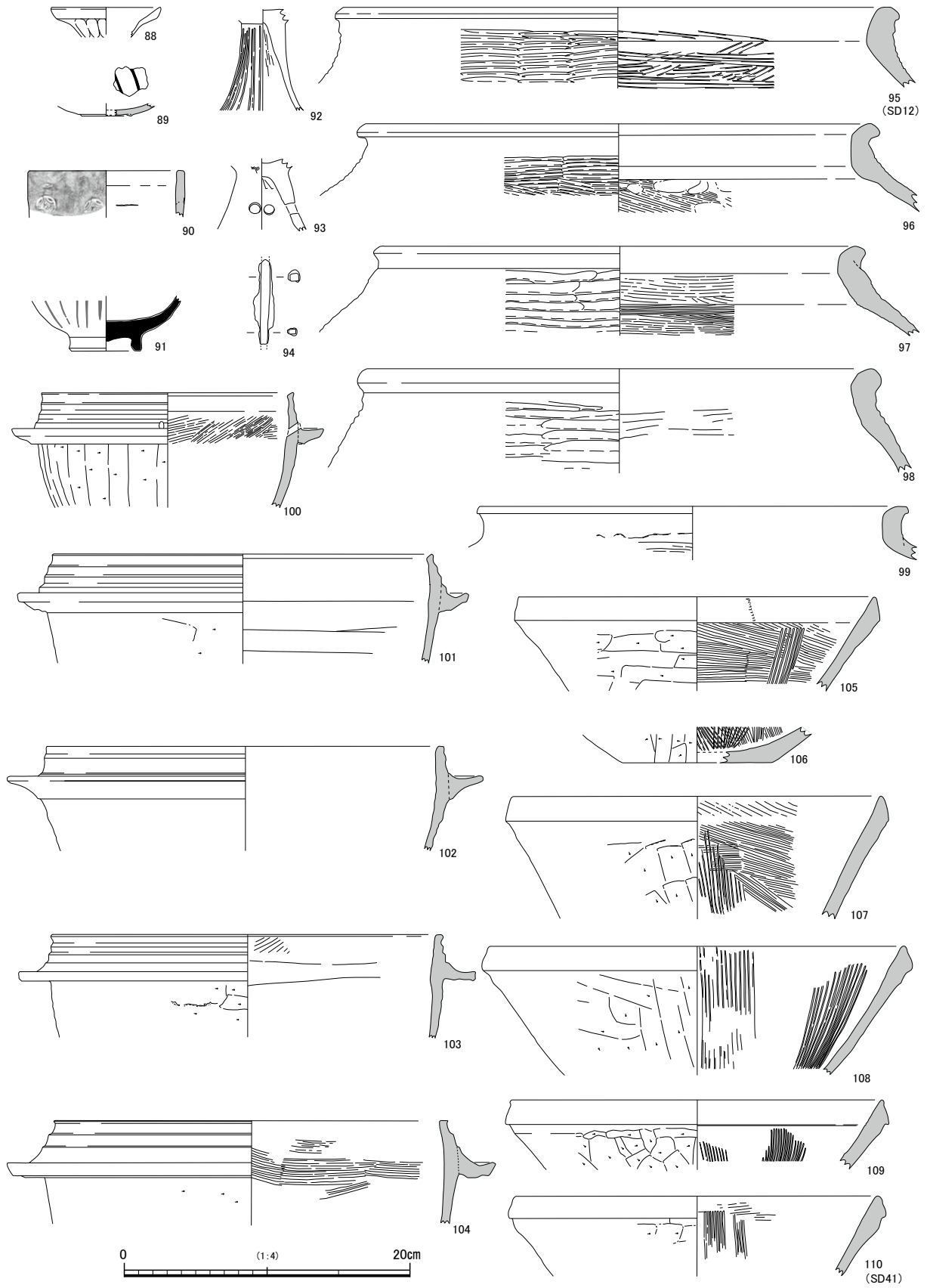


图 23 1 区 SD10,12,41 出土遗物实测图 (S=1/4)

けを超えて外底面におよぶ。見込中央は無釉となる。また見込には、両側を削り出して作られた圈線がめぐる。外底面は回転ケズリの痕を残す。113は瓦器甕。復元口径37.3cm。頸部下内面に、おそらく口縁成形時の指押さへの痕跡がめぐる。玉縁口縁をもつもの。114～115は瓦器羽釜。いずれも口縁の段成形が弱い。114は7mm大の礫を含み、胎土が粗い。復元口径17.3cmと小型のもの。116～117は瓦器播鉢。116の体部はわずかに内湾する。118は瓦器火鉢。平面円形で、体部はやや外傾して立ち上がるもの。脚をもち、底面やや上に突帯1条がめぐる。外底面、脚より内側で砂の痕跡が認められる。離れ砂であろう。119はサヌカイト製石鏃。基部を欠損する。凸基式で片面のみ稜をもつ。長軸3.6cm、短軸1.5cm、厚み0.5cm、重さ2.03gを測る。弥生時代の所産。

(8) 小結

1区では、弥生時代後期の方形周溝墓2基(SX25, 25・26, 26)を検出した。南北に並んで溝を共有するもので、本来は急崖となっている調査区西側へ墓域が広がっていたものと思われる。墳丘盛土や主体部は検出できなかった。

古墳時代に所属する明確な遺構は確認できなかったが、埴輪や、6世紀後半の須恵器といった遺物が出土している。調査区外に由来するものと思われる。

中世に位置づけられるものとして、井戸状遺構(SX15)や掘立柱建物(SB1)、SD10～12といった溝がある。多数存在するピットも大多数が当該期に所属するものと考えられる。落ち込み状遺構SX4、5などは、形を変えながら15世紀まで形を保っていたと思われ、耕作溝と推定されるSD8、35、38、39、200などを考え合わせると、活発な土地利用があったものと推測される。

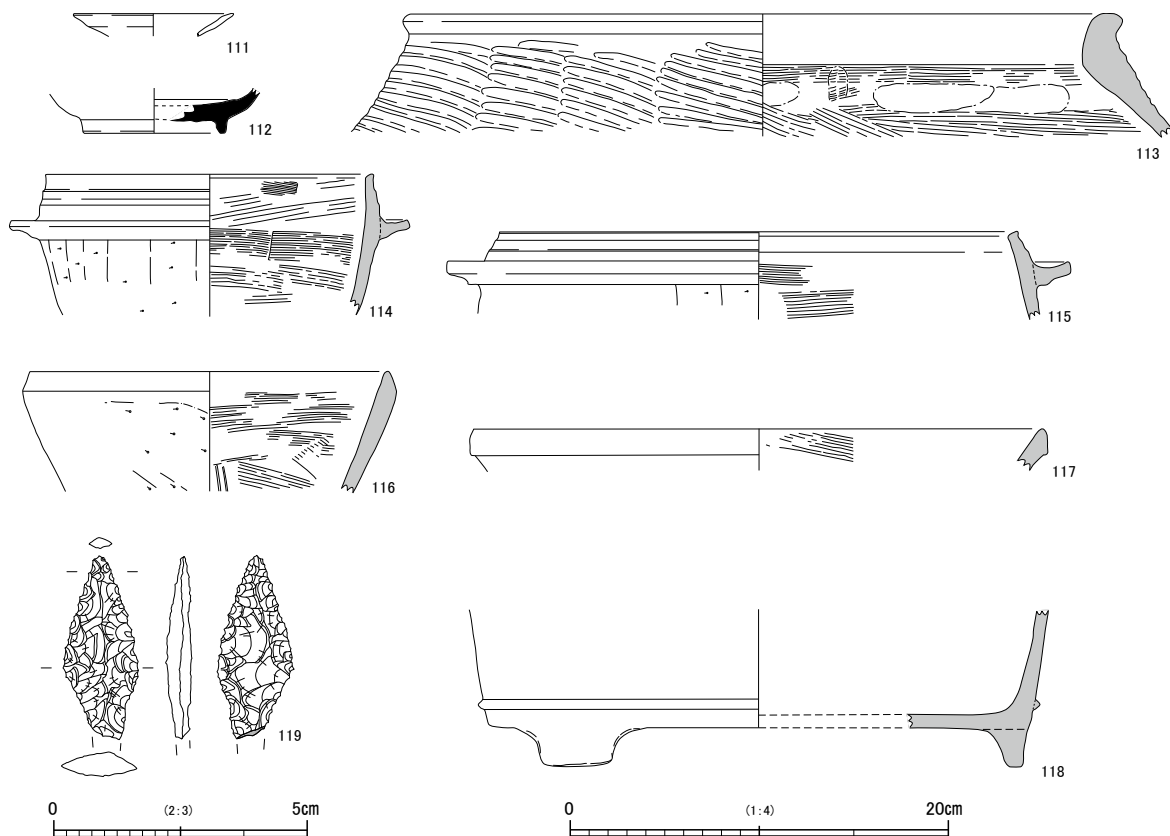


図24 1区包含層出土遺物実測図(S=1/4, 石鏃 S=2/3)

第5章 2区の調査成果

第1節 概要

梅川にそって北西にのびる中位段丘の西斜面に位置する(図1)。1区とは浅い谷で隔てられ、西から北西にかけては緩やかに傾斜する。2区の北西側で試掘を行ったが、遺構は検出されていない(図2)。調査面積は、2-1区で267㎡、2-2区で208㎡、計475㎡である。調査前地盤高はおよそT.P.+68m。現代の耕作土約20cmを重機によって除去した後、10cm～50cm程度の包含層を人力掘削した。

T.P.+67.4～67.5m、北西部ではT.P.+67.0mで地山を遺構検出面として、集石遺構、掘立柱建物、溝、土坑、ピット等を検出した。掘立柱建物の柱穴は方形の掘りかたをもつものである。

遺物は、古墳時代後期から古代の土師器や須恵器、中世の土師器、須恵器、瓦器を主体に、弥生土器も出土する。数量的には3つの調査区のうち最も出土量が少ない。須恵器には杯類や平瓶などが目立つ。

第2節 層序

2-1区では南辺と西辺、2-2区では南西辺で、現代耕作土層を除去したおよそT.P.+67.8mから地山面まで観察・図化を行った(図26)。

層序は灰色耕作土(①層)、明褐色粘質土の床土(②層、南壁⑤層)、黄褐色ベースの遺物包含層(西壁、南西壁⑥層)が水平堆積する。2-2区は北西に向かって徐々に低くなり、ここを埋めるように灰黄褐色土(南西壁⑦層)が大きく堆積する。

第3節 遺構と遺物

(1) 集石遺構(図25～29、図版6・7・18・19)

SX217 2-1区北部に位置する土坑である。長軸を東西にもち、隅丸長方形を呈する。検出面で115cm×140cm、深さは最大で45cmを測る。断面形は逆「凸」字状で、底面から25cm前後で段をもつ(図27)。特徴的なのは、遺構のほぼ全面で検出した礫と焼土、炭化物層である。礫は自然礫で10～20cm大のものが多く、中央で落ち込んだかのような堆積状況を示す。この礫と①層を除去すると焼土混じりの暗褐色シルト(②層)が堆積する。焼土はある程度まとまりをもったものと、ブロック状に攪拌されたものが混じる。さらに下層、土坑底面から壁面にかけて炭化物が1cm内外の層厚をもって薄く堆積する(③層)。壁面は赤変していない。礫や土層の堆積状況からは、もともとは底から2/3ほどの高さに面があり礫が埋置されていたものが、土圧によって落ちくぼんだことが想定される。壁面にかかる③層や焼土の存在によれば、短期間の火の使用と、何らかの有機物の存在を想定できる。

遺物は土師質土器片、須恵器片、瓦器片が少量出土している。うち図28-120は大和型の瓦器椀。②層から出土した。復元口径8.4cm、残存高2.6cm。口縁内端の沈線は不明瞭な部分もある。風化のため調整不明。14世紀前半のものであろう。

SX335 2-2区東辺にあり、ほぼ南北を長軸とする長方形の土坑(図27)。検出面で135cm×100cm、深さ25cmで、断面は逆台形を呈する。底面は平坦である。

10～30cm大の自然礫をやや北東側に偏って①層中に、やや小ぶりの礫をその下層(②層)に検出した。焼土や多量の炭化物を含んだ暗灰黄色土(③)層は、土坑中央で厚く堆積する。

出土遺物は土師器、須恵器、瓦器10片ほどがあるが、いずれも小片で時期の特定にはいたらなかった。

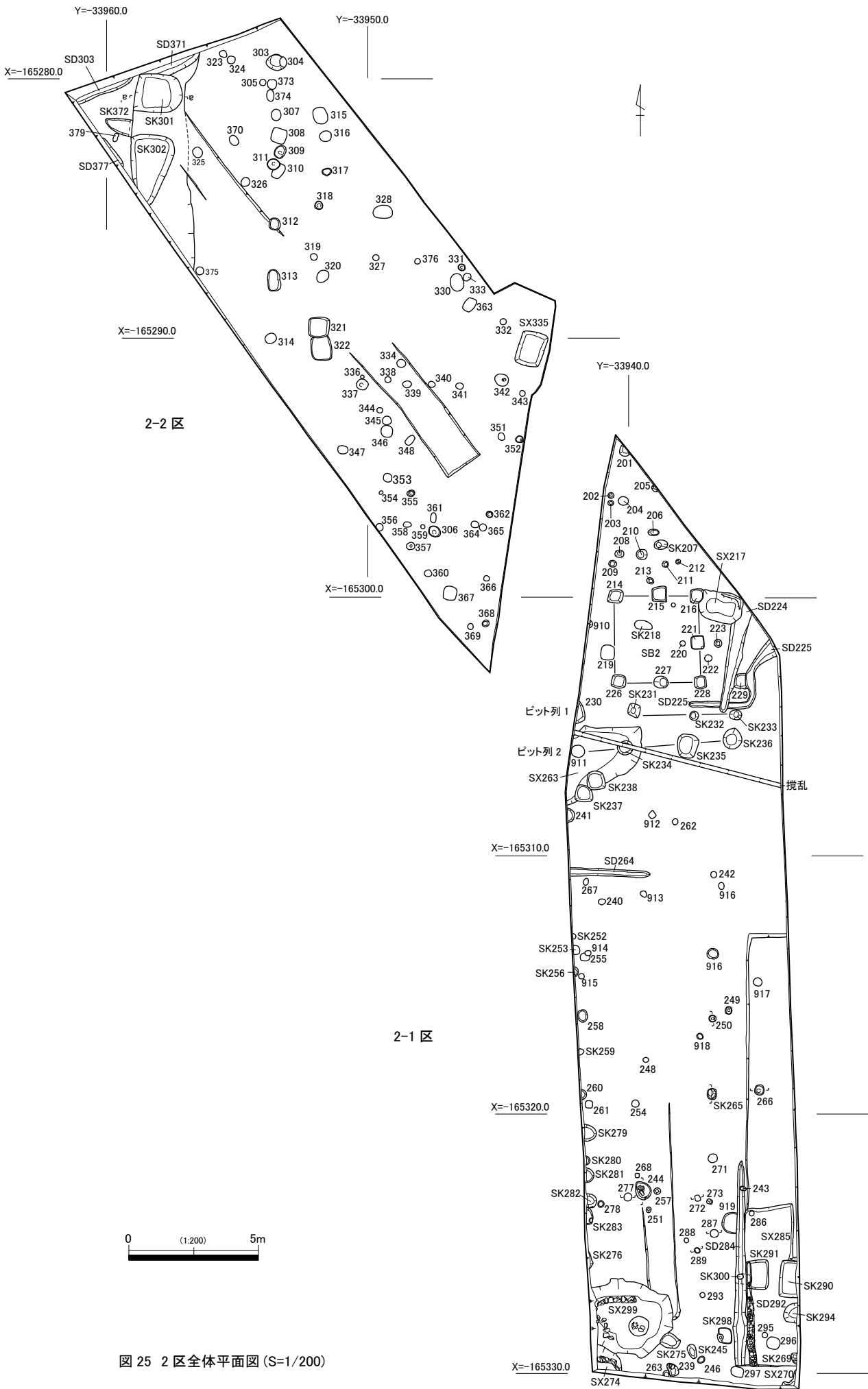
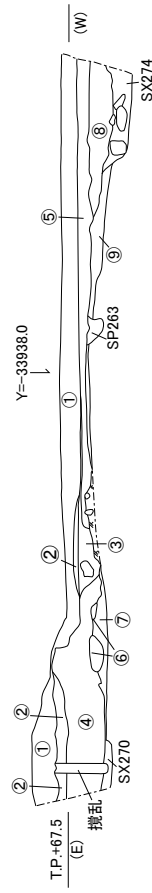
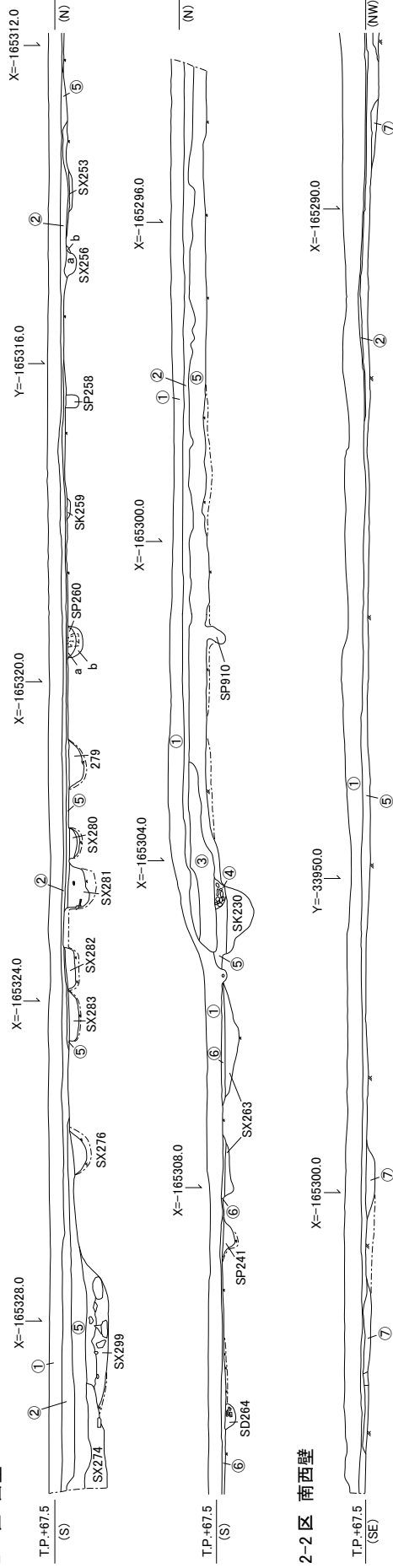


図 25 2区全体平面図 (S=1/200)

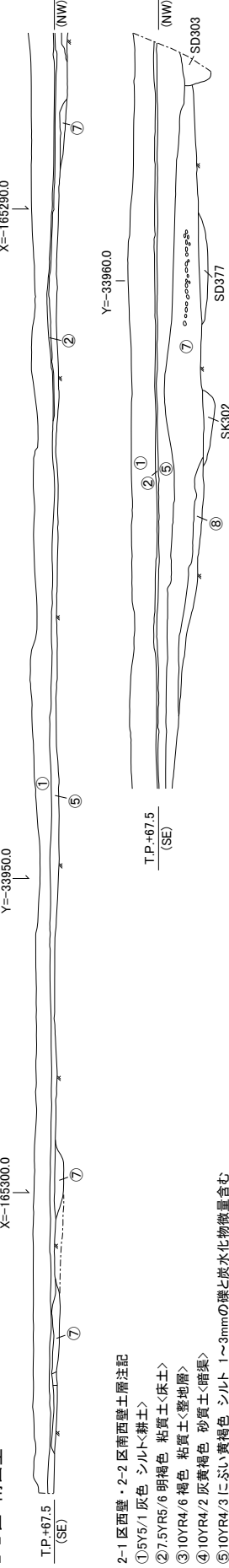
2-1 区 南壁



2-1 区 西壁



2-2 区 南西壁



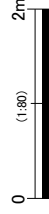
- 2-1 区 南壁・2-2 区 南西壁土層注記
- ① 5Y5/1 灰色 シルト<耕土>(南西壁①)
 - ② 7.5YR5/6 明褐色 粘質土<床土>(南西壁②)
 - ③ ④に 10YR4/3 にぶい黄褐色 プロット土混じる<整地層>
 - ④ 10YR4/6 褐色 粘土 1~5mmの隙や多く含む<整地層>
 - ⑤ ②と同色同質<床土>
 - ⑥ 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土 <暗渠>
 - ⑦ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト

- 2-1 区 南壁土層注記
- ① 5Y5/1 灰色 シルト<耕土>(南西壁①)
 - ② 7.5YR5/6 明褐色 粘質土<床土>(南西壁②)
 - ③ ④に 10YR4/3 にぶい黄褐色 プロット土混じる<整地層>
 - ④ 10YR4/6 褐色 粘土 1~5mmの隙や多く含む<整地層>
 - ⑤ ②と同色同質<床土>
 - ⑥ 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土 <暗渠>
 - ⑦ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト

- 2-2 区 南西壁土層注記
- ① 5Y5/1 灰色 シルト<耕土>
 - ② 7.5YR5/6 明褐色 粘質土<床土>
 - ③ 10YR4/6 褐色 粘質土<整地層>
 - ④ 10YR4/2 灰黄褐色 砂質土<暗渠>
 - ⑤ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 1~3mmの隙と放水化物微量含む
 - ⑥ 10YR3/2 黒褐色 シルトに(10YR5/6 黄褐色 シルトをブロック状に含む
 - ⑦ 10YR5/2 灰黄褐色 シルト
 - ⑧ 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
 - SK230 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
 - SP241 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
 - SP263 10YR3/2 黒褐色 シルトに(10YR5/6 黄褐色 シルトをブロック状に含む
 - (10YR5/6 黄褐色 シルトをブロック状に少量含む
 - SX256a 10YR2/3 黒褐色 粘質土
 - b 10YR4/4 褐色
 - SP258 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト

- 2-2 区 南西壁土層注記
- SP259 10YR3/2 黒褐色 シルト
 - SP260a 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 放水化物多く含む
 - b 10YR4/2 灰黄褐色 シルトに(10YR4/6 褐色 粘質土をブロック状に少量含む
 - SP263 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
 - SD264 10YR3/2 黒褐色 粘質土
 - SP276 10YR2/3 黒褐色 シルト
 - SP279 10R3/3 暗褐色 シルト
 - SP280 10R3/3 暗褐色 シルト
 - SP281 10YR2/3 黒褐色 シルト
 - SP282 10YR2/3 暗褐色 シルト
 - SP283 10YR3/3 暗褐色 シルト
 - SX299a 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
 - b 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 隙を多く含む
 - SK302 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
 - SD377 10YR4/2 灰黄褐色 シルト

図 26 2 区 南壁・西壁土層断面図 (S=1/80)



SX274 2-1区南端に位置し、SX299を切る(図27)。遺構のほとんどが調査区外となるが、20～30cm大の礫が底面のわずかな段差に沿うように並ぶ。灰黄褐色の粘質土が堆積する。出土遺物はない。

SX299 2-1区南端でSX274に切られる不定形の土坑(図27)。南北で約2.8m、調査区外に続くことを考えても東西に長く3.1mを測る。上層の灰黄褐色土(②層)は全面に堆積しており、多量の土器が出土した。これを除去した土坑北辺に30cm大の礫が列状に並んでおり、据え置かれたものとする。土坑西側には、20～30cm大の礫を多量に含む粘質土(③層)が堆積している。

その下層、土坑中央やや南東よりで直径75cmの円形土坑を検出した。当初、井戸を想定したが、20cm弱で地山面となり予想を裏切る結果となった。壁面はほぼ垂直で、10～20cm弱の礫が底面にある。

出土遺物は約280片とかなり多いが破片ばかりである。遺構廃絶後、ゴミ捨て場としての利用があったものと思われる。瓦器が7割程度を占め、なかでも羽釜が目立つ。ほか土師質土器、須恵器、瓦なども出土している(図28・29)。

図28-121～123は、SX274とSX299の上層に一連で堆積する黄褐色土(図26南壁⑧層、西壁⑤層)から出土した。121は瓦器椀もしくは皿。復元口径10.0cm、器高1.8cmと低平で、高台をもたない。内面にはわずかにミガキ。122は青磁椀。高台径は復元で6.2cm。釉はオリーブ色で、畳付は無釉。123は瓦器羽釜。内面はナデで平滑に整えられるが、鏝の裏側のみ粗いハケ調整が一部残る。口縁は内傾し、体部のケズリは鏝底面の半ばまでいたる。復元口径23.0cm。

124～127は②層から出土した。124は須恵器壺底部。外底面には糸切痕。内底面は無調整。125は瓦器甕。玉縁口縁のもので、外面はタタキによって一部円形に凹む。126～127は瓦器羽釜。復元口径は126の口縁部外面の段成形は断面が丸みを帯び、やや凹線に近いものとなっている。

128～138、図29-144～146は③層出土。128～133は瓦器羽釜。復元口径18.6cmと小型のもの128もあるが、23～25cmを測るものが大半を占める。130、131は段が浅い。131は内面、口縁内端部と体部内面鏝から下に1.5cmほどに焦げがめぐる。132の体部外面は、非常に細かく手を止めてケズリが施される。また鏝下面には、紐孔をあけようとして止めたかのような、2孔のくぼみがある。口径の約1/5しか残存しておらず、ほかの部分に紐孔があるかどうかは不明である。133も内面に焦げが付着する。

図29-144は丸瓦。凸面はタタキ後工具ナデが施され、内面には粗い布目圧痕が残る。側面には一部段差があり、切り離し時のものと思われる。145は平瓦。凸面に一部縄目タタキの痕跡が残り、凹面には不明瞭ながらも布目が観察でき、煤が付着している。146は磨皿か。図下面から側面にかけて煤が付着し、一部破損部にも煤や赤変が見られ、炉石等に転用されたものと思われる。石材は砂岩と推定される。

図28-134～138は瓦器播鉢。いずれも縁帯部を作りだしており、下方に拡張するもの(134)、上下に拡張し端面が凹むもの(135・136)、平坦なもの(137・138)がある。復元口径は小形のもので25cm前後、大形のもの28.6～32.2cmを測る。

139～142は④・⑤層の出土。139は土師器の把手。甌もしくは甕。140は瓦器播鉢。口縁には片口が付けられる。141は瓦器甕。口縁上面に煤が付着する。142は陶器で甕。「L」字口縁をもつもので、縁帯は2cmと狭い。復元口径44.0cmを測る。無釉で器面は灰色を呈し、ほぼ須恵質。胎土には長石が目立ちやや粗い。常滑焼か。

これら出土遺物には一部平安時代のものが混じるが、多く出土する瓦質羽釜は15世紀前半までのも

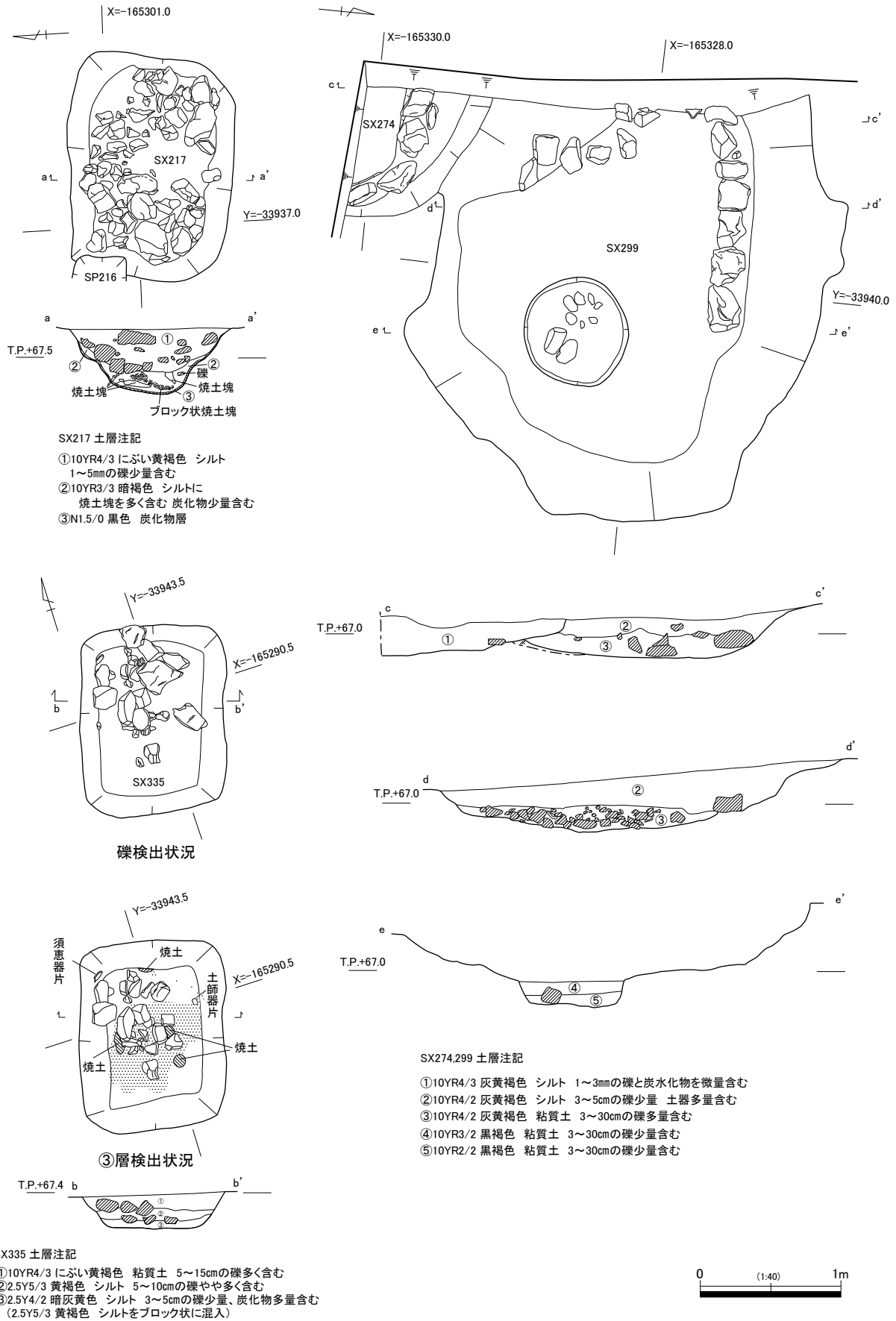


図 27 2 区 SX217,274,299,335 平面・土層断面図 (S=1/40)

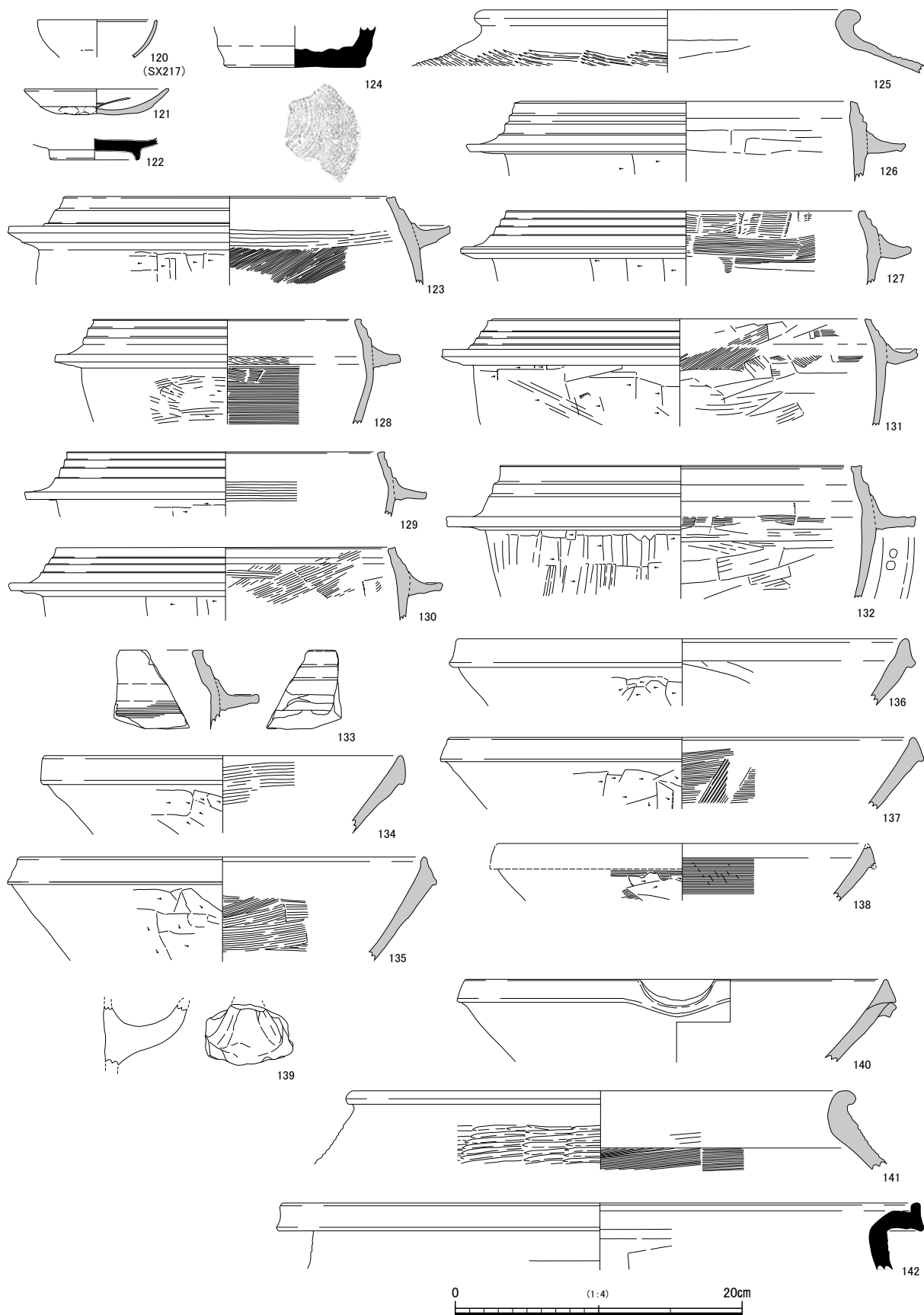


图 28 2 区 SX217,299(1) 出土遺物実測図 (S=1/4)

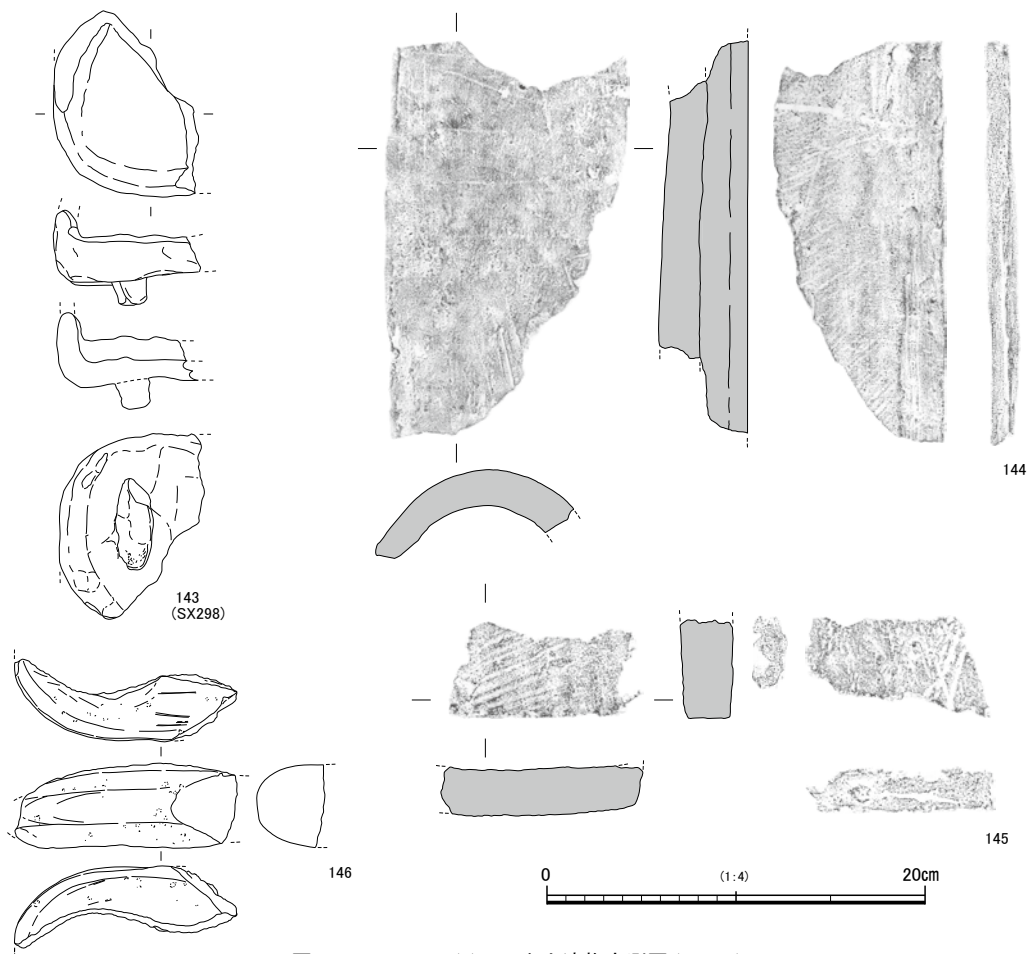


図 29 2区 SX299(2),298 出土遺物実測図 (S=1/4)

のであり、当該期に廃絶されたものと思われる。底面で検出された円形土坑からは、141 や、142 が常滑焼であれば 13 世紀中頃と古い様相を呈する遺物が出土しており、やや時期差をもって形成された別遺構と考える。

(2) 掘立柱建物・ピット列 (図 30～32、図版 5)

SB2 2-1 区北部に位置する。建物方向 N-0°、2×2 間、一辺約 3.3m、面積約 10.9㎡の掘立柱建物である(図 30、図版 5)。西辺中央 SP219 は位置がずれるが、方位と形態から関連するものと考えた。掘りかたは SP214～216、219、221、226～227 で一辺 50～55cm の方～隅丸方形、底面のレベルは T.P.+67.2～67.4m で検出面からの深さは 30～40cm。SP221 があるため、東側 SP229 へは延びないものと思われる。

掘りかたからは、土師器や須恵器の小片が数点ずつ出土している。鉄釘、サヌカイト剥片も各 1 点出土する。うち SP216 から須恵器杯身(図 32-147)が出土している。復元口径 11.6cm、残存高 2.6cm を測る。立ち上がりは外湾気味に上方にのび、端部は鋭く丸い。6 世紀後葉から 7 世紀前葉。柱痕を検出することができず、時期の確定は難しいが、瓦器椀の出土した SX217 に切られており、須恵器の年代に所属するものとしておきたい。

SB2 北辺ラインの延長上に 2-2 区 SP367 が位置する。やや軸はずれるがピットの大きさ・形態ともよく類似する。その南、2-1 区西辺でやや密に並ぶピットも、調査区内では建物には復元できなかったが、調査区西側で建物を構成している可能性はあろう。そのほか 2-1 区 SK237、238、296、

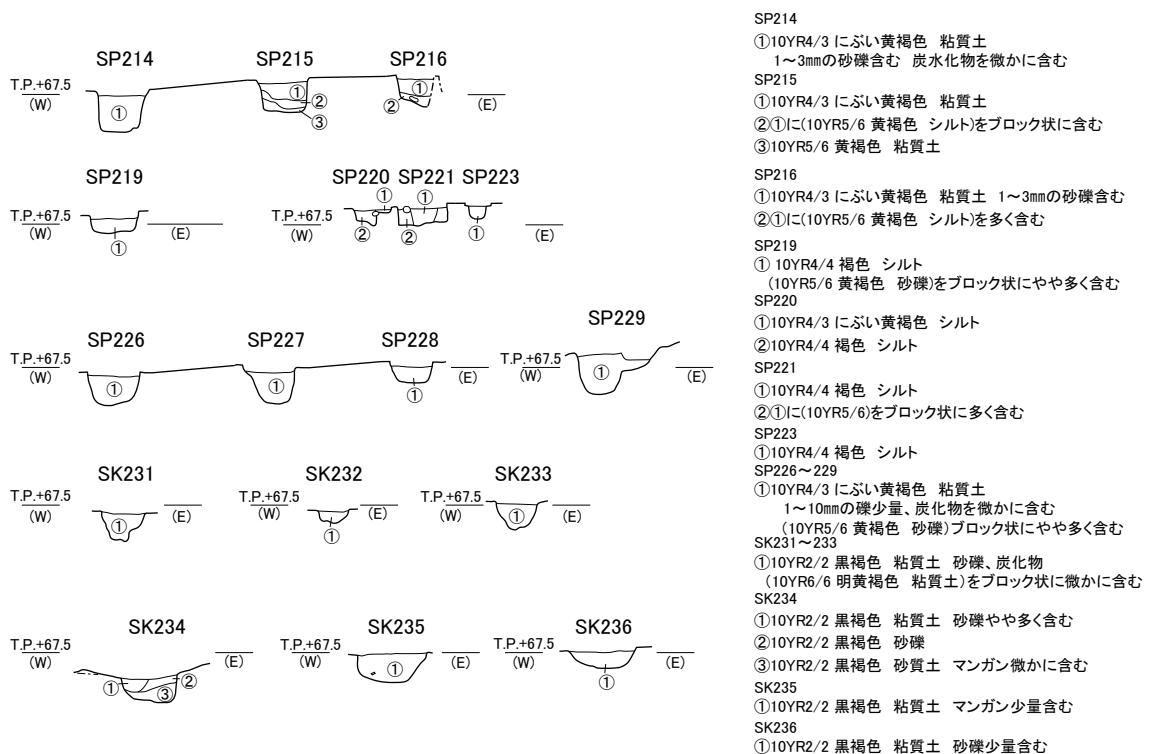
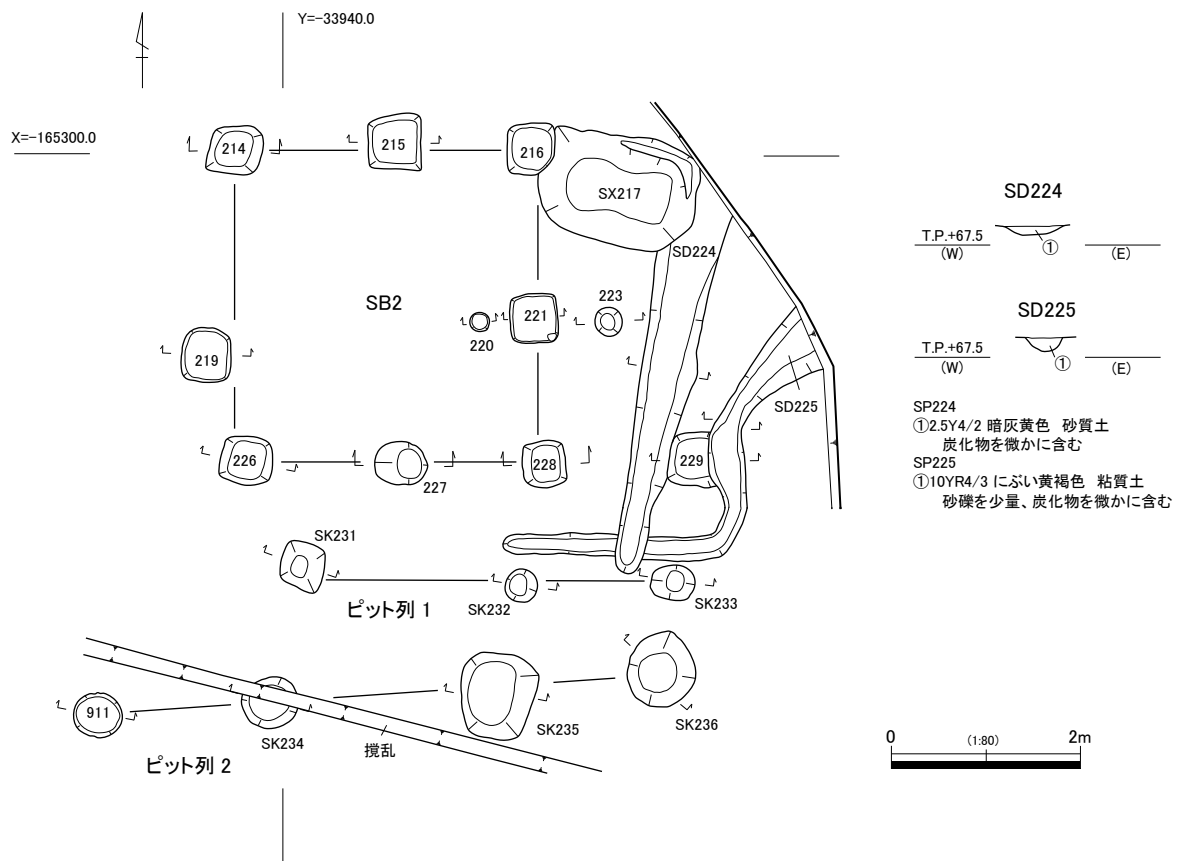


図 30 2-1 区 SB2, 周辺遺構平面・土層断面図 (S=1/80)

298、2-2 区 SP321、322 など、柱穴掘りかたと思われる方形ピットはあるが、いずれも建物としては認識できなかった。

なお、SK298から土師器火鉢が出土している(図29-143)。底部には脚を、前面には窓を設けており、風炉に似た構造をとる。全て手づくねで作られており、器面には指押さえの凹凸が著しい。外底面から体部にかけて煤が付着するため、火にかけられたことは確実である。

ピット列1(SK231・232・233) SB2の南で東西の軸方向を同じくする(図30)。調査区外へ延びる可能性はあるが、検出した部分では東西2間、約4.0mを測る。ピットは30～50cmの方～円形で、深さ30cm前後。底面は凹凸があり、黒褐色の埋土を共通してもつ。柱間距離は推定で1.6～2.3m。出土遺物はない。

ピット列2(SK911・234～236) ピット列1の南に列方向N-85°-Eで、50×80cm前後のピット・土坑が並ぶ(図30)。SK235のみ90×80cm程度の隅丸方形でやや大形。大きさから杭列とは考え難いが、列状に並ぶためピット列とした。東西3間で6.0m、深さ20～30cm、埋土は黒褐色の粘質～砂質土でピット列1と共通する。

出土遺物は土師器片と須恵器の杯片があるが、小片のため図示していない。

ピット列3(SK307～311・373・374) 2-2区北部で円～方形のピットが東西にずれながらも、南北に並ぶ(図31)。切り合いもあるため一つの遺構として捉えられるものではないが、列状に集中して検出されたためまとめて記す。

SK308は60cm弱の方形の土坑。軸をやや東に振る。そのほかのピットは円～長楕円を呈し、長軸方向で40～50cmを測る。底面はT.P.+67.3～67.4mにあり、検出面からの深さは、SK308とSK309が約20cmであるほかはごく浅い。なおSK309、311はやや土質の異なる柱痕を確認した。

出土遺物はほとんどなく、SP308からは奈良～平安時代と考えられる土師器把手(図32-151)が出土している。そのほか土師器杯の破片も出土している。SP309からは土師器、須恵器の小片が出土している。

以上の掘立柱建物、ピット列は、古墳時代末から平安時代までの遺物が少量ではあるが出土している。何時期かにわたって形成され、平安時代までに廃絶したものであろう。SB2とピット列1は軸を同じくしており、関連するものと考えておきたい。

(3) ピット・土坑(図32・33、図版19)

上述した掘立柱建物やピット列を形成するもののほか、まばらではあるが2区全体にわたって土坑やピットを検出している。そのうち礫が検出されたものや、出土遺物があるものについて記述する。

SP201 2-1区北端にあるピット。調査区外にのびるが円形を呈すると考えられる。深さ24cm。古代の土師器高杯(図32-150)が出土している。およそ8面の面取り調整が残る。

SP230 2-1区北部で、西壁にかかる。須恵器杯身(図32-148)が出土している。立ち上がりは外湾気味に内上方にのび端部は鋭く丸い。受部は短く水平にのびる。MT85～TK43型式前後か。

SP244 2-1区南部、70cm前後の不定円形を呈するピット。深さ10cmほどで浅い。やや底面から浮くが、20cmほどの礫が西側に集積していた。出土遺物はない。

SP250 2-1区中央よりやや南にある60cm弱の円形ピット。中央に土質の異なる柱痕を検出。出土遺物なし。

SP265 2-1区中央やや南。36×44cmの長楕円形ピット。10～20cmの礫が底面にある。出土遺物なし。

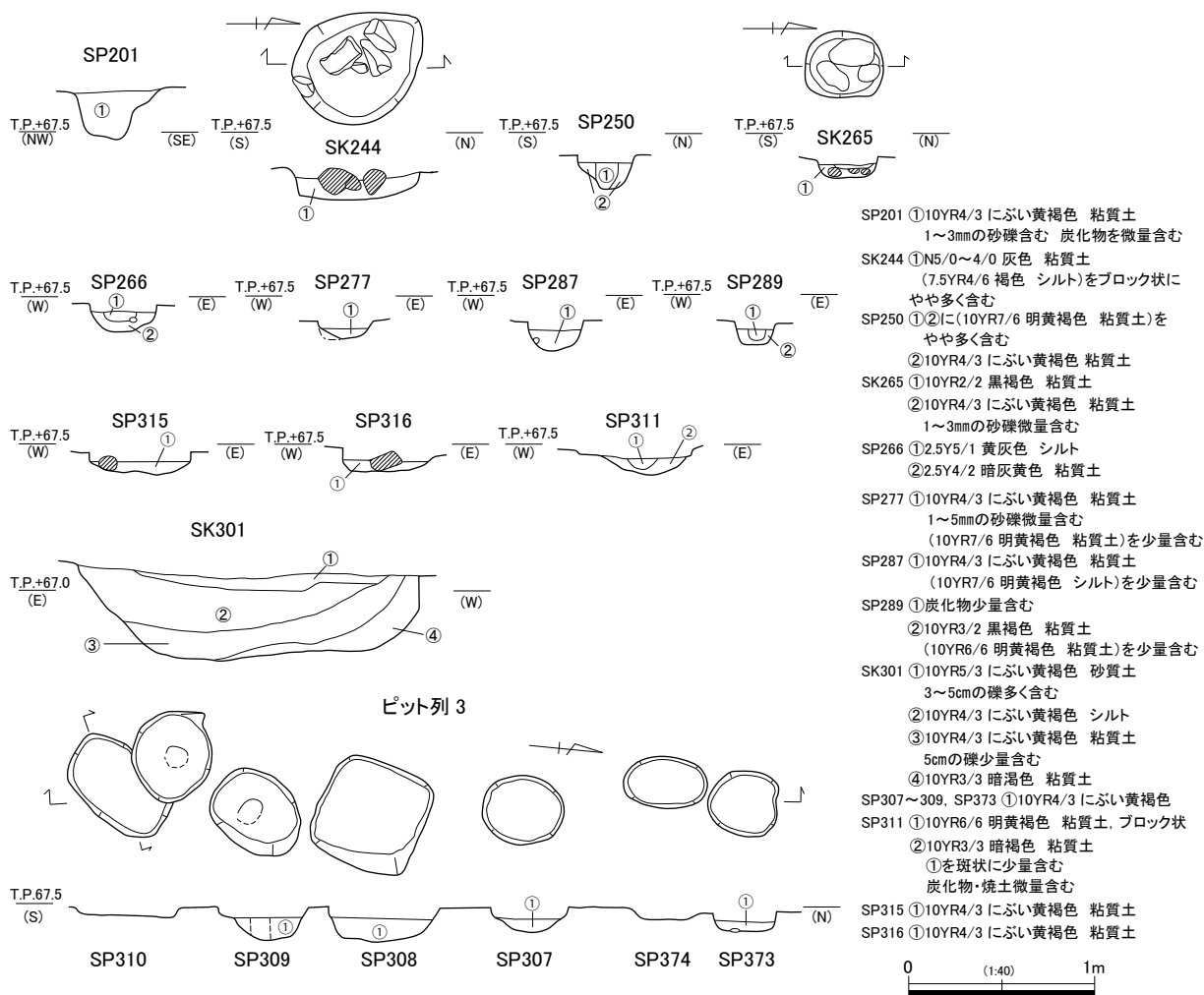


図 31 2 区土坑、ピット平面・土層断面図 (S=1/40)

SP266 2-1区中央やや南東にある。約40cmの円形ピット。中央に黄灰色シルトが堆積する。柱痕か。出土遺物なし。

SP277 SP244のすぐ西にある。径30cm前後で、深さ10cmの円形ピット。図示した瓦器(図33-165~168)のほか土師器小片が出土している。

165、166は瓦器羽釜。いずれも体部のケズリは罫下面におよび、口縁の段成形は浅い。甕(167)は、体部の内傾するもの。体部のタタキによって内面は段をもって薄くなる。168は播鉢。縁帯はわずかに下方に拡張する。全体としては15世紀後半頃に位置付けられよう。

SK279 調査区南部、西壁にかかる。南北で約70cmを測る。土師器片、須恵器片、サヌカイト剥片が出土している。

図33-159は土師器羽釜。罫は薄く水平にのび、端部はまるい。胎土には角閃石と雲母が多く含まれ、生駒山西麓産と考えられる。7~9世紀のものであろう。160・161は須恵器杯G蓋。いずれも復元口径11.0cmを測る。天井部は丸みをおび、かえりは短く、天井端部を結んだラインより内側となる。飛鳥Ⅲ段階に位置付けられる。162は土師器杯身。風化のため調整不明。ほかへら切りの痕跡が残る須恵器杯も出土している。以上から、SK279には7世紀後葉の時期が考えられる。

SK281 調査区南部に位置する。西壁にかかって南北60cm弱、深さ29cmを測る。底面は南側でややく

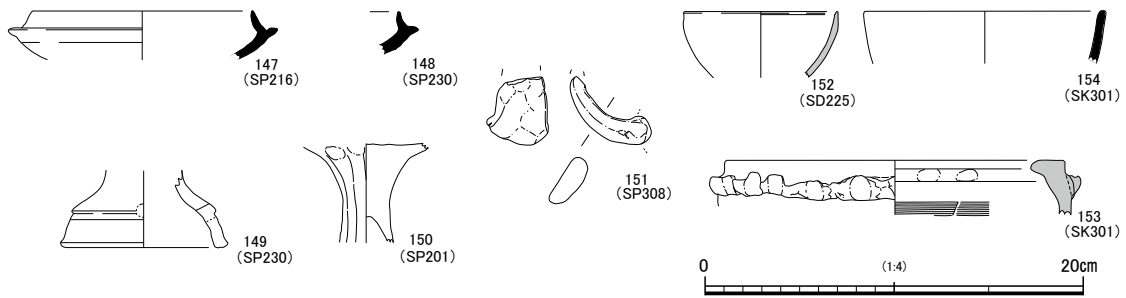


図 32 2 区 SP201,216,230,308,SK301,SD225 出土遺物実測図 (S=1/4)

ぼむ。出土遺物には、土師器、須恵器がある。

図 33 - 163 は土師器杯身。口縁端部はわずかに外反する。164 は土師器皿。復元口径 17.8cm を測る。そのほか実測には耐えなかったが、黒色土器 A 類と思われる小片など、おおよそ 9 世紀代と考えられる土器が出土している。

SP287 径 30cm 前後、深さ 10cm の円形ピット。遺構の大きさに比して遺物は多く、土師器、須恵器、弥生土器が出土している (図 33 - 155 ~ 158)。

155 は弥生土器甕の底部。ドーナツ状に中央は凹み、外面にはタタキが施される。ほかに弥生土器の出土はなく、混入と考える。156 は土師器甕体部。把手は欠損するが、斜め上方へと伸びるものであろう。

157 は平瓶。平底で体部は外傾して立ち上がり、稜をもって肩部へつづく。頸部は内湾しつつ上方へのびる。体部内外面はヨコナデが施されるが、外底面は時計回りのケズリ、内底面は指押さえの痕がのこる。体部上面、頸部内面、内底面には口縁の形を丸く残して自然釉が付着する。

158 は須恵器杯 B。体部は上外方にのび端部は丸い。底部の両端からわずかに中央よりの部分に低い高台を貼付する。高台は内端部で接地する。ほか円形タタキをもつ須恵器の甕片も出土している。

須恵器類は平城 II ~ III 段階に位置付けられるもので、SP287 は 8 世紀前半、遅くとも 8 世紀半ばまでの時期に所属するものと思われる。

SP289 2 - 1 区南部に位置する径約 20cm の円形ピット。埋土中央に炭化物を少量含む。出土遺物なし。

SK301 2 - 2 区北端にある。長軸 1.9m × 短軸 1.5m の長楕円形の土坑。最下層に暗褐色の粘質土、その上ににぶい黄褐色埋土が土質を変えて自然堆積する。出土遺物は瓦器、須恵器、陶磁器、丸瓦がある。

図 32 - 153 は瓦器火鉢か。体部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁は水平に折れ曲がる。外面には口縁やや下に押圧をめぐらした突帯がつく。154 は青磁碗。明緑灰色の釉がかかる。端部はわずかに外反する。

そのほか器種のはかるものとしては、中世陶器壺片、須恵器杯片などが混在しており、中世にいたって廃絶されたものと思われる。

SP315 2 - 2 区北東部に位置し、66 × 34cm を測る長楕円のピット。出土遺物は土師器片が 2 点のみ。

SP316 2 - 2 区北東部にある 48 × 40cm の楕円形のピット。土師器小片が出土。

SP351 2 - 2 区南東片ほぼ中央に位置する、20cm 前後の不正円形ピット。土師質土器片、須恵器片が出土している。図 32 - 149 は須恵器脚台部。台付壺か。脚屈曲部に沈線を巡らせて稜をなし、円形と思われる透かし孔を施す。裾部は内湾して下外方にのび、端部はやや肥厚して稜をもつ。TK217 型式前後か。

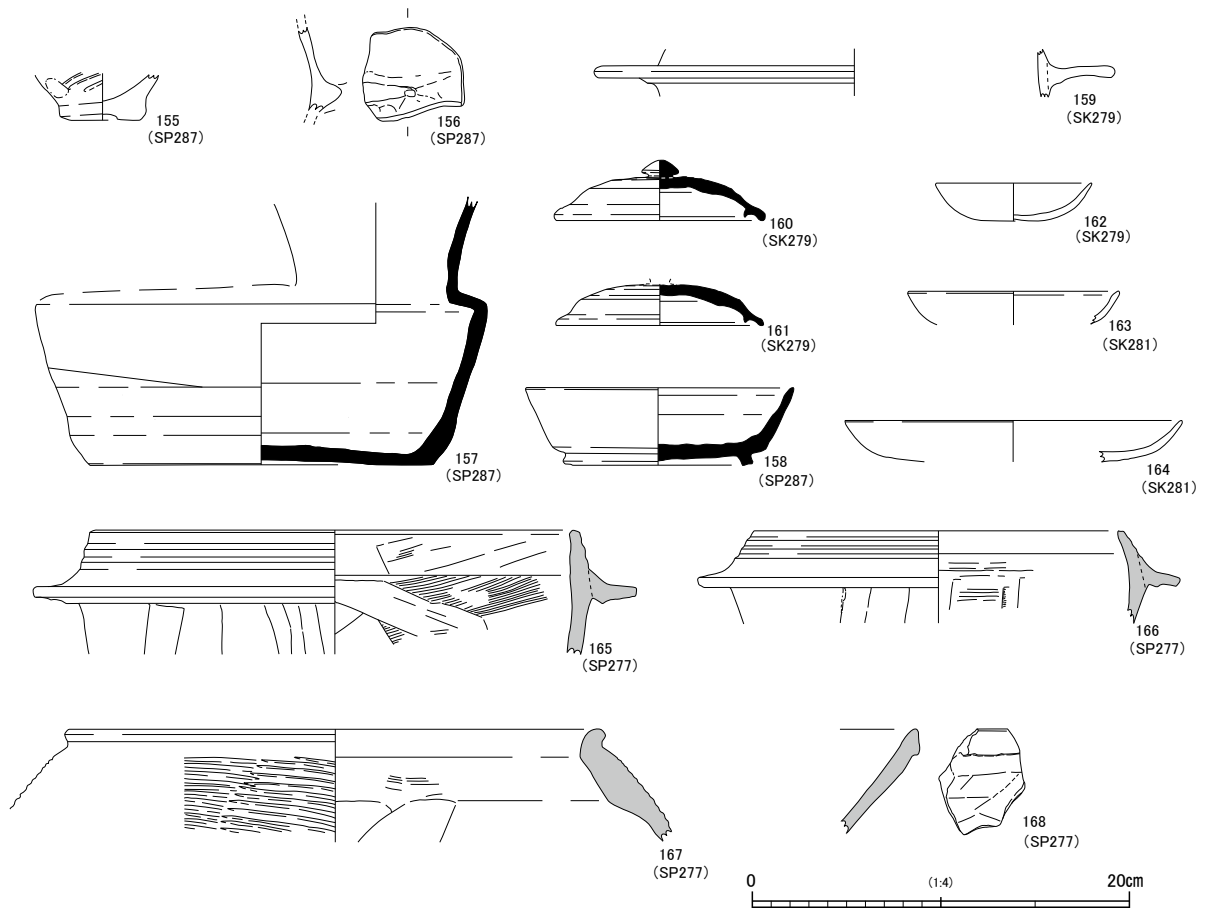


図 33 2 区 SP277,287,SK279,281出土遺物実測図(S=1/4)

(4) 溝 (図 30・32、図版 19)

SD224 SB2 の東で、やや長軸を東に振るがほぼ南北に走る溝(図 30)。60cmを最大幅にして南へ向かって細くなる。深さは検出面から 10cm前後と浅い。

出土遺物は少なく、土師器片、須恵器杯の破片があるのみである。

SD225 2-1 区東辺から南西、南、東西方向へと屈曲する溝(図 30)。東壁で最大幅 70cmを測るが、東西方向では 25cm前後で一定である。深さは検出面から 10～15cm。

出土遺物は土師器片、須恵器片、瓦器片がある。図 32-152 は瓦器碗。口縁端部内面に沈線をもつ大和型のもの。風化が著しく調整不明。ほか土師器片と、須恵器杯 2 点、須恵器甕片が出土している。瓦器碗は 14 世紀前半頃に位置付けられるが、須恵器なども混在しており、所属時期の断定は難しい。

SD264、SD284 幅 25cm前後の浅い溝。耕作に伴うものか。

SD292 ごく浅い溝で、10～20cmの礫が多数敷き詰められていた。瓦器羽釜片が礫の隙間から出土しており、中世に所属する溝と考えられる。

(5) 遺構に伴わない遺物 (図 34)

包含層掘削中に、土師器、須恵器、瓦器、陶器、鉄釘、石製品、瓦片が出土している。

図 34-169 は須恵器甕。頸部のタタキはナデ消している。170 は土師杯。口縁はわずかに内湾して巻き込む。ナデ仕上げで、内面の暗文や外面のミガキは認められない。平城Ⅳ～Ⅴ段階に位置付けられる。

171 は山茶碗の底部。高台削り出して底面はロクロナデ。内面にはごく薄い釉がかかる。胎土精良。

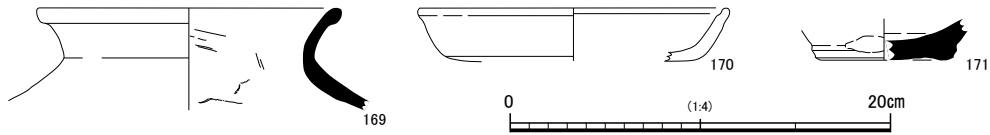


図 34 2区包含層出土遺物実測図 (S=1/4)

(6) 小結

2区では弥生時代の遺物が少量出土するのみで、当該期の利用は低調であったと思われる。顕著な遺構が形成されるのは古墳時代も終わりになってからである。柱穴掘りかたや方形のピット、土坑から6世紀終わりごろから9世紀にかけての須恵器や土師器、黒色土器が出土しており、古代前半から中頃を中心に集落が形成されていたと思われる。大型の掘りかたをもつ掘立柱建物（SB2）や須恵器平瓶や青磁など一般的な集落とは若干違った様相が認められる。

古代末から中世初めの空白期間をもって13世紀半ばから再び遺構が形成される。特徴的なのは集石遺構で、被熱痕跡のあるSX217やSX335は規模・平面形態が似通っており関連するものと考えられる。ただし機能を推測させるような遺物は出土しておらず、性格は不明とせざるを得ない。SX217は埋土に落ち窪んだ様相が認められ、形成過程は異なっている。SX299も性格不明ながら、15世紀代の瓦器羽釜が多く出土しており、廃絶後ゴミ捨て場として利用されていたと推定される。遺跡全体でもこの時期以降の遺物はごく少量であり、集落の廃絶に伴うものであろう。そのほか粗密はあるものの2区全体にわたって、小型のピットや溝が検出されており、中世期の集落域として利用されていたものと思われる。

第6章 3区の調査成果

第1節 概要

3区は現在の耕作地と住宅域との境にあたる(図2)。北西にのびる尾根筋上に位置し、北から東にかけて谷が入り込む地形となる(図1)。調査区面積742m²。調査前地盤高はT.P.+67～68m。写真撮影用の足場を確保するため、3-1・3・4区から先行して調査した。現代の耕作土を重機で10～20cm除去し、堆積のある部分では2～20cmの包含層を人力掘削した。

遺構検出面は地山面1面である。3-1・2区でT.P.+67.8m前後、3-3区で約T.P.+67.1m、3-4区では約T.P.+66.5mと東側へ低くなる。特に3-3区では耕作土直下で地盤層にいたるなど、削平が著しい。竪穴建物4棟以上(建替え含む)、掘立柱建物4棟、ピット列3列のほか、溝、土坑、ピットを検出した。3-4区はピット3基のみの検出で遺構はほとんどない。出土遺物は、弥生土器が8割程度を占め、次いで須恵器、土師器がある。瓦器は少量混じる程度である。そのほか、陶器、瓦、石製品などが出土している。

第2節 層序

調査区の北辺、3-1区は南辺も合せて、3-4区は北辺から西辺にかけて、耕作土を除去したT.P.+66.8～67.9mから地山面まで観察・図化を行った(図39～41)。

層序は、黄褐色の現代耕作土(①層)、黄褐色粘質土の床土(南壁②・北壁③層)、黄褐色ベースの遺物包含層(南壁③～⑨・北壁④～⑩層)が水平堆積する。土層の単位が大きく整地に伴うものであろう。3-2・3区では、遺構検出面上面に、灰黄褐色の砂混じり粘質土(北壁⑩層)がごく薄く堆積する。この層がない部分でも、北壁⑥層下位の層境に砂質土が混じっており、3区中央では一面で砂質土の堆積があったものと考えられる。3-4区はX=-165140.4m以北で地山が急激に落ち、砂～礫が自然堆積する。旧地形では北側の谷地がさらに南東側へ入り込んでいたものと考えられる。

第3節 遺構と遺物

(1) 竪穴建物(図42～46、図版10～12)

SH625 3-3区の現代耕作土を除去した時点で、方形のプランを確認したものである(図42、図版10)。平面で壁溝を検出後、土層観察用のベルトを残して建物内を掘り下げた。ベルトは各辺の中軸を一連で観察できるように、「L」字を組み合わせた形で設定した。検出面から床面までは深いところでも10cm程度しかなく残存状況は悪かったが、壁溝(SD656、686、694)と周囲をめぐる溝(SD614、626)、柱穴と思われるピット等を検出した。竪穴建物はほぼ同じ位置、方向(N-30°-W)で3棟以上が重複する。規模は建替えを重ねるごとに拡大しており、プランは長軸を東北-南西にもつ長方形から正方形へと変遷する。以下、切り合いによって推定される建替え順に詳述する。

SD656 最も内側で北東から北西、南西、一部南東をめぐる断面「U」字形の溝。この溝によって囲まれる竪穴建物は南西-北東4.9m、北西-南東4.3mを測り、長方形プランをとる。壁溝は深いところでも検出面から15cm程度しかない。

SD686 北西から南西をめぐる。図42で(SD686)とした北東辺、南西辺は同一の溝である確証はなく、特に南西辺は切り合いや位置から考えて別遺構と考えるべきであろう。ただしこれ以上拡張する壁

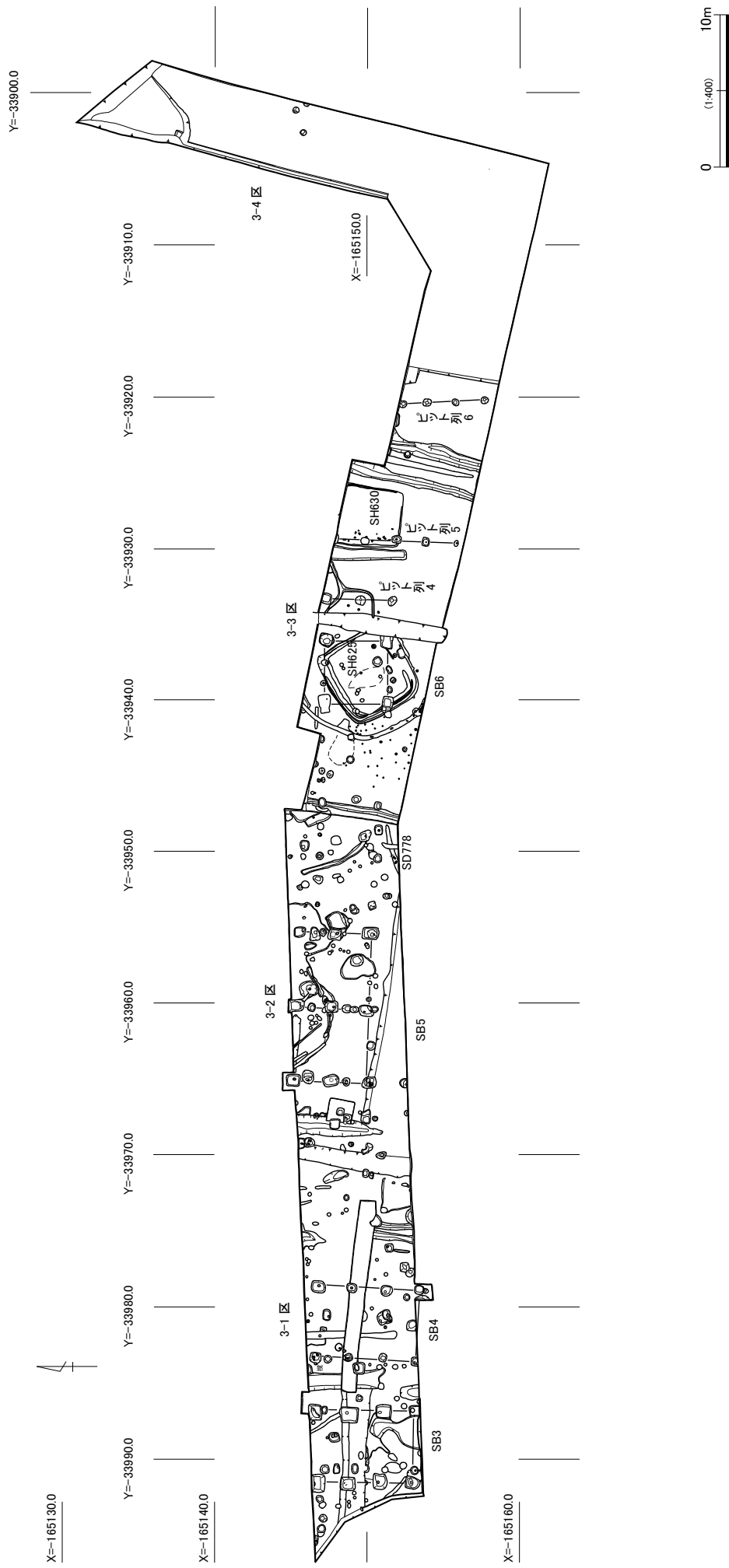


图 35 3区全体平面图 (S=1/400)

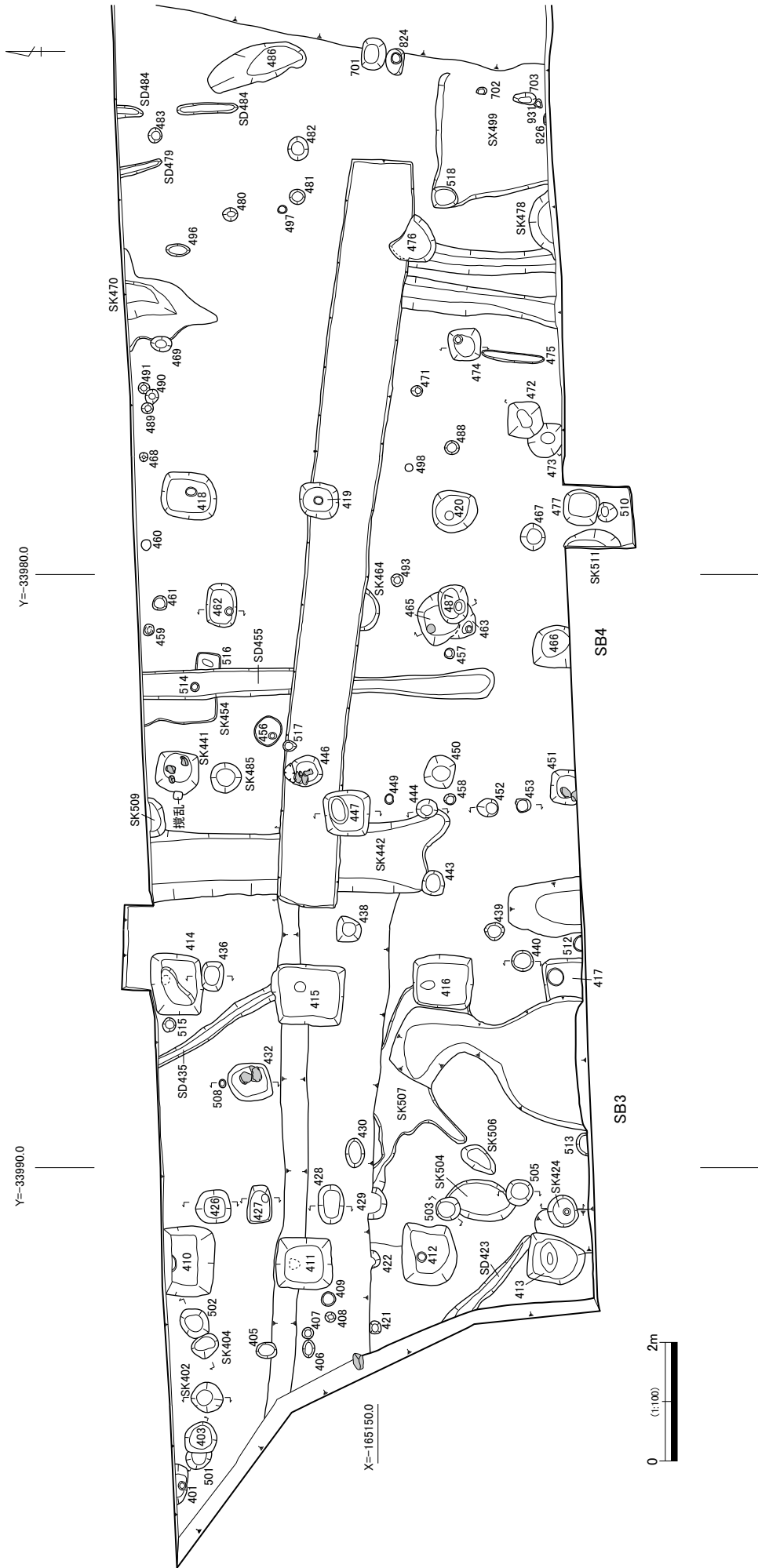


图 36 3-1 区平面图 (S=1/100)

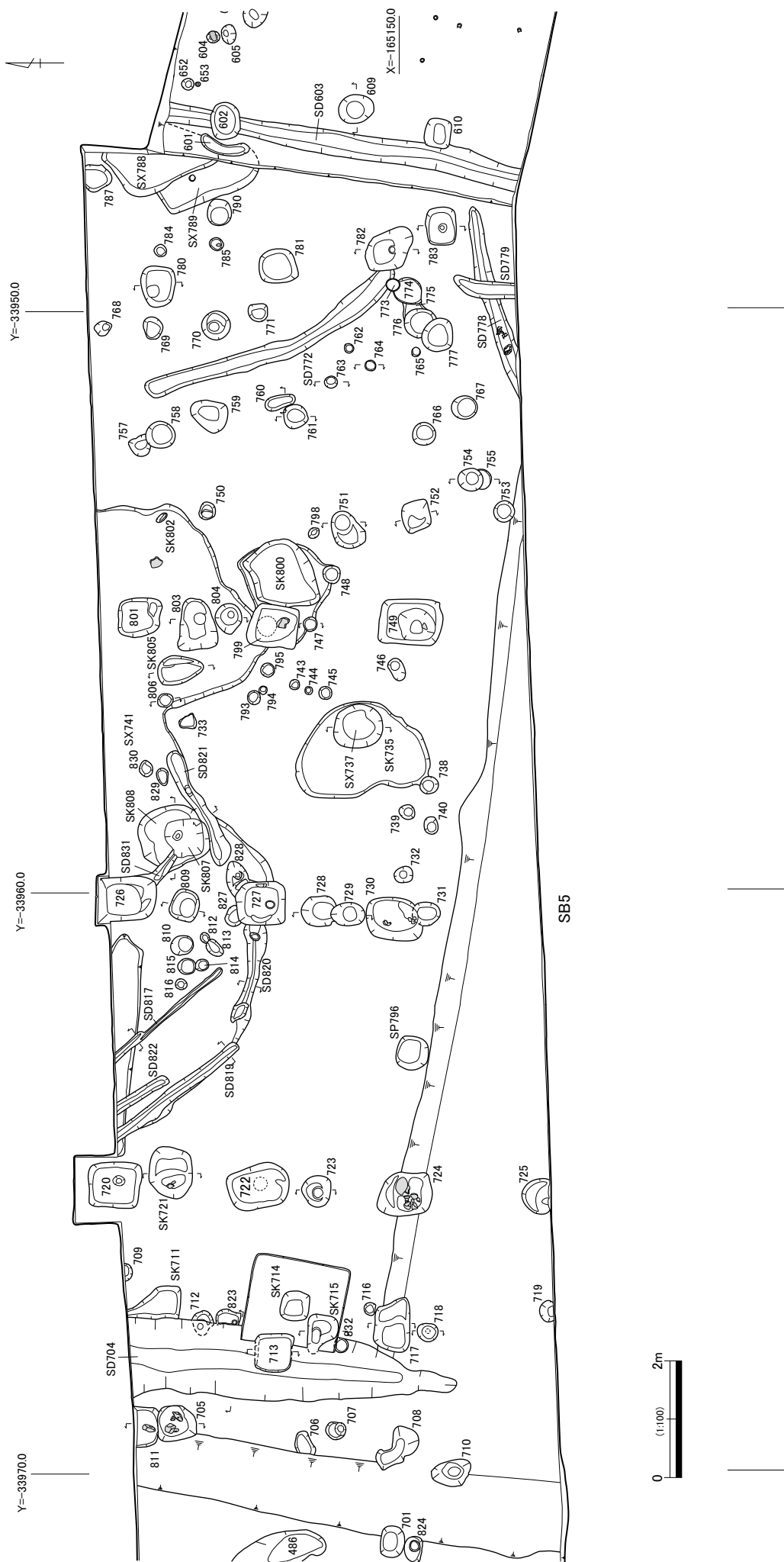


图 37 3-2 区平面图 (S=1/100)

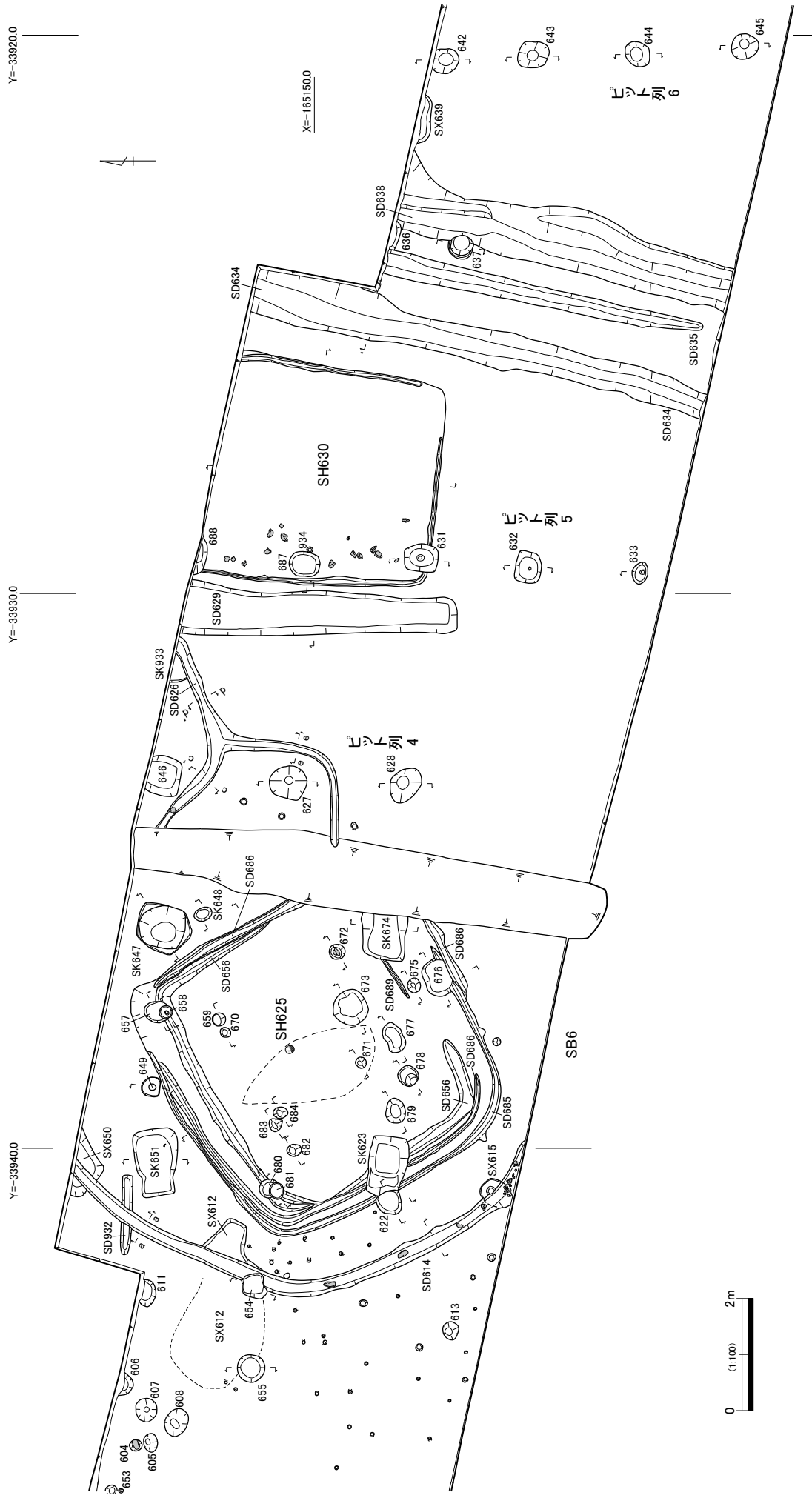
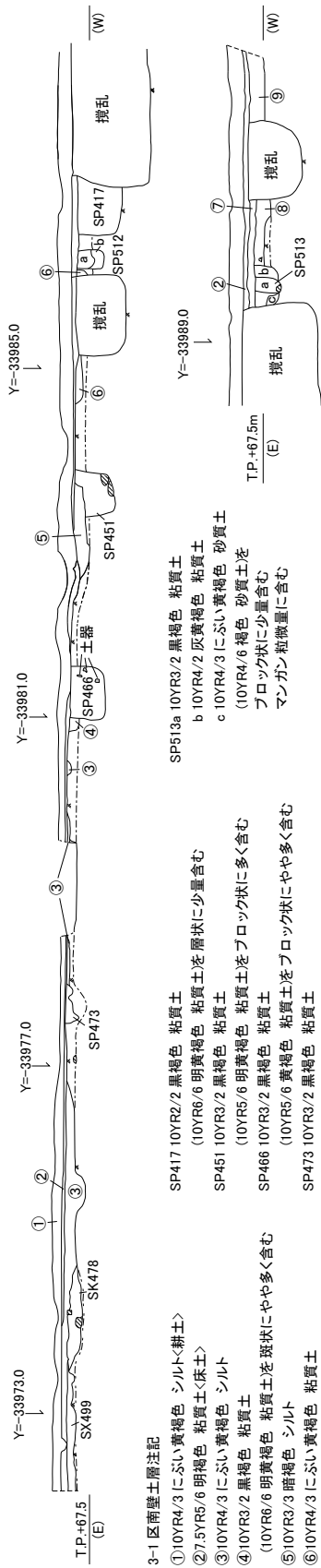


図 38 3-3 区平面図 (S=1/100)

3-1 区南壁

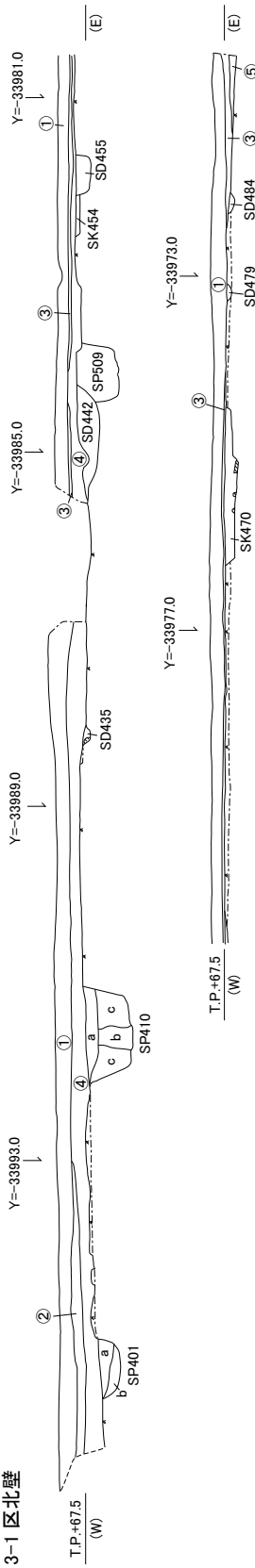


- ① 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト<耕土>
- ② 7.5YR5/6 明褐色粘質土<床土>
- ③ 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
- ④ 10YR3/2 黒褐色粘質土
(10YR6/6 明黄褐色粘質土を斑状にやや多く含む)
- ⑤ 10YR3/3 暗褐色シルト
- ⑥ 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- ⑦ 10YR4/3 黄褐色粘質土をブロック状に含む
- ⑧ 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- ⑨ 10YR4/3 黄褐色粘質土を斑状に少量含む
- ⑩ 10YR4/3 黄褐色粘質土をブロック状に少量含む

- SP417 10YR2/2 黒褐色粘質土
(10YR6/6 明黄褐色粘質土を層状に少量含む)
- SP451 10YR3/2 黒褐色粘質土
(10YR5/6 明黄褐色粘質土をブロック状に多く含む)
- SP466 10YR3/2 黒褐色粘質土
(10YR5/6 黄褐色粘質土をブロック状にやや多く含む)
- SP473 10YR3/2 黒褐色粘質土
(10YR5/6 黄褐色粘質土をブロック状に少量含む)
- SP478 10YR3/2 黒褐色粘質土
- SX499 10YR3/2 黒褐色粘質土
(10YR5/6 黄褐色粘質土をブロック状に少量含む)

- SP513a 10YR3/2 黒褐色粘質土
- b 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- c 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
(10YR4/6 褐色砂質土をブロック状に少量含む)
- マンガン粒微量に含む

3-1 区北壁



- ① 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト<耕土>
- ② 7.5YR5/6 明褐色粘質土<整地層>
- ③ 7.5YR4/3 にぶい黄褐色粘質土<床土>
- ④ 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に地山ブロックを含むマンガン粒をやや多く含む
- ⑤ 10YR5/2 灰黄褐色粘質土マンガン粒を多く含む

- SP401 a 10YR3/3 暗褐色粘質土
- b aに(10YR6/6 明黄褐色粘質土をブロック状に少量含む)
- SP410 a 10YR3/2 黒褐色粘質土に(10YR6/6 明黄褐色粘質土を斑状に含む)
- b 10YR3/3 暗褐色粘質土
- c 10YR2/2 黒褐色粘質土に(10YR6/6 明黄褐色粘質土を層状にやや多く含む)
- SD435 10YR3/3 暗褐色粘質土
- SD442 10YR3/2 黒褐色シルト
- SK454 10YR3/2 黒褐色シルト

- SD455 10YR3/2 黒褐色シルト
- 底部に(10YR6/6 明黄褐色粘質土をブロック状に少量含む)
- SD470 10YR3/3 暗褐色粘質土
- SD479 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- SD484 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- SP509 10YR2/2 黒褐色粘質土
(10YR6/6 明黄褐色粘質土をブロック状に微量含む)

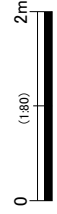
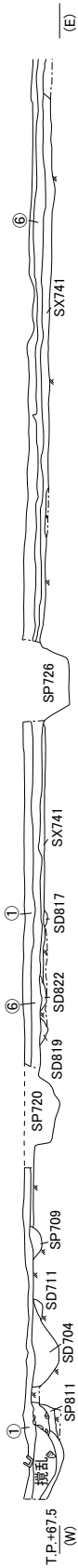
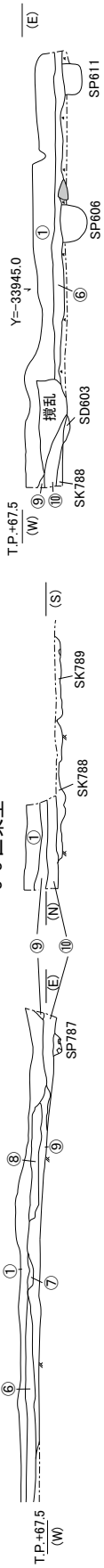


図 39 3-1 区南壁・北壁土層断面図 (S=1/80)

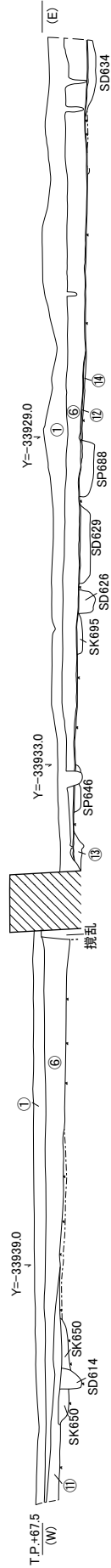
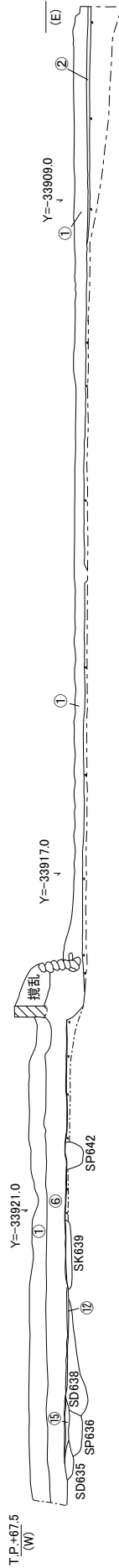
3-2 区北壁



3-3 区東壁



3-3 区北壁



3-1 ~ 3-3 区北壁土層注記

- ⑥ 2.5Y6/2 にぶい黄色 シルト 下層との層積は砂混じりとなる
- ⑦ 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂礫土
- ⑧ 10YR6/6 明黄褐色 粘質土
- ⑨ 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト
- ⑩ 10YR6/3 にぶい黄褐色 シルト
- ⑪ 10YR5/6 黄褐色 粘質土に
- ⑫ 10YR3/2 黒褐色 粘質土をブロック状に含む
- ⑬ 10YR4/2 ~ 5/2 灰黄褐色 砂質土<バルト>
- ⑭ 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土
- ⑮ 10YR3/3 暗褐色 粘質土
- ⑯ 10YR4/4 褐色 粘質土
- SP704 2.5Y5/4 黄褐色 シルト
- SP709 10YR6/4 にぶい黄褐色 シルト
- SP711 10YR4/4 褐色 シルト
- SX741 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂礫混じりシルト(遺物多い)
- SP787 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂礫混じりシルト(炭化物混じり)
- SK788 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
- SK789 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘質土
- SP811 10YR3/3 暗褐色 シルト
- SD819 10YR5/6 黄褐色 砂礫混じり土
- SD822 10YR6/4 にぶい黄褐色 シルト
- SD603 10YR3/2 黒褐色 粘質土
- SP606 10YR4/2 暗灰黄色 粘質土
- SP611 10YR3/2 黒褐色 粘質土
- SD614 10YR3/3 暗褐色 粘質土をブロック状に多く含む
- SD626 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質土
- SD629 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘質土
- SP634 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘質土
- SP635 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘質土
- SP636 10YR3/2 黒褐色 粘質土
- ⑩YR6/6 明黄褐色 粘質土をブロック状に含む
- SD638 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘質土
- SK639 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘質土
- SP642 10YR3/2 黒褐色 粘質土
- (10YR6/6 明黄褐色 粘質土をブロック状に少量含む
- SP646 10YR3/2 黒褐色 粘質土 炭水化物少量含む
- (10YR6/6 明黄褐色 粘質土をブロック状に少量含む
- SK650 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
- (10YR6/6 明黄褐色 シルトをブロック状に多く含む
- SP688 10YR3/2 黒褐色 粘質土
- SK695 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト

図 40 3-2 区北壁・東壁、3-3 区北壁土層断面図 (S-1/80)

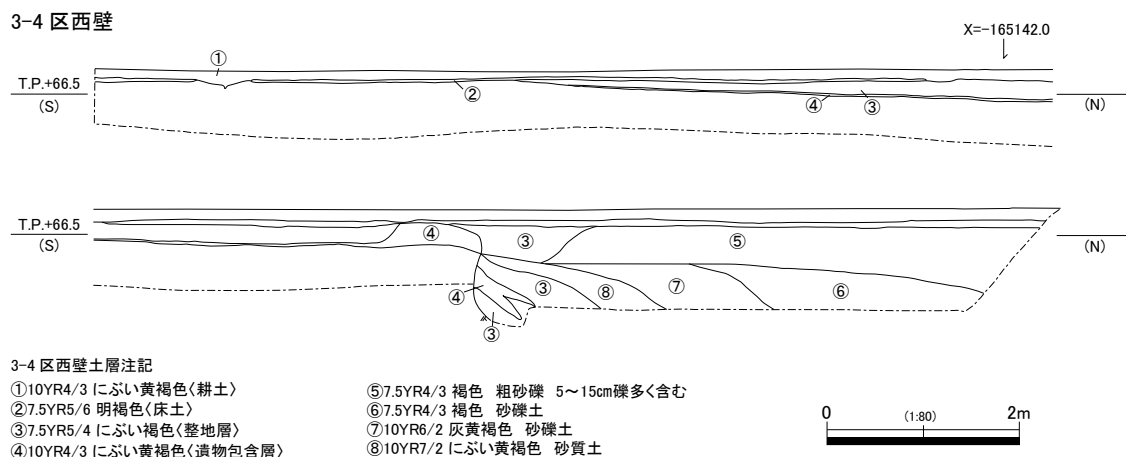


図 41 3-4 区西壁土層断面図 (S=1/80)

溝を検出していないため、規模は北東辺と南西辺の (SD686) を延長した推定値とし、南西-北東 5.2m、北西-南東 4.8m を測る。長方形のプランである。

SD694 最も外側で、北西、南西、南東辺までめぐり、北東辺を欠くが、北西辺からの落ちが (SD686) のラインに続くため、それ以东には拡張しないと思われる。規模は一辺 5.5m で、ほぼ正方形のプランになる。

また南東辺で最も内側にある SD689 や、前述した SD694 を切る南東辺 (SD686) を壁溝の一部と考えるならば、さらに 2 棟が重複していたと捉えることもできるが、削平のため明らかではない。

柱穴 SP659、672、678、682 を支柱穴に想定できる (図 42、43)。検出面からの深さは 40 ~ 50cm で、T.P.+66.8m 前後に柱穴の底面がある。SP672 は敷石によって底面のレベルをそろえる。やや北西に偏った位置にあるため、SD656 か SD686 のいずれかに伴うものと思われる。

そのほか建物内にある SP670、671、683、684 や、SD656 上のやや浅く大きい SP657、658、680、681 等も柱穴と考えられるが、南東側で構造的に組み合うピットを検出できない。最大でも 15cm ほどしか深さのない SP673、676、677、679 といった浅い円形のピット (図 43) があるのみである。

炉跡 竪穴建物内やや北西に偏って、炭化物を多く含む黒色シルト (図 42 - ②層) が約 2.6m × 1.2m の範囲で紡錘形状に広がるのを確認した。遺構というよりも皿状の浅いくぼみで、最も深い中央でも層厚 10cm ほどしかない。一部焼土も確認でき、床面は焼けていないが SH625 に伴う炉跡として考えたい。

②層は、その下に水平堆積する攪拌された黒褐色粘質土 (④層) を切って堆積する。この炉跡を最も新しい SD694 に伴うものとするれば、④層は前時代の埋土、もしくは建替え時の整地によるものと考えられる。なお、②層堆積部分の東寄りでは 10cm 大の礫と弥生土器底部片を検出している (図 44、図版 11)。礫は自然礫で、煤等も付着していない。この礫等が炉に関連するものかどうかは不明である。

SD614 SH625 の西側を囲むように弧状にめぐり、断面逆台形の溝である。幅約 30cm、深さ 20 ~ 30cm。底面のレベルは T.P.+67.0m 強でほぼ一定。壁溝との接続はないが、排水溝もしくは区画溝として捉えたい。溝南端ではやや溝幅が広くなり、10 ~ 20cm 大の礫が固まって検出された (図 44、図版 11)。そこからやや北へ離れて、弥生土器の壺頸部 (図 46 - 176) と高杯脚部 (195) が出土している。据え置かれたような状況ではない。

SD626 SH625 の東側で「Y」字状になる溝。幅 15 ~ 30cm 程度で、深さ約 20cm、底面のレベルは T.P.+66.8m 前後。攪乱によって推測となるが、SH625 の東隅で壁溝に接続し排水溝として機能したと

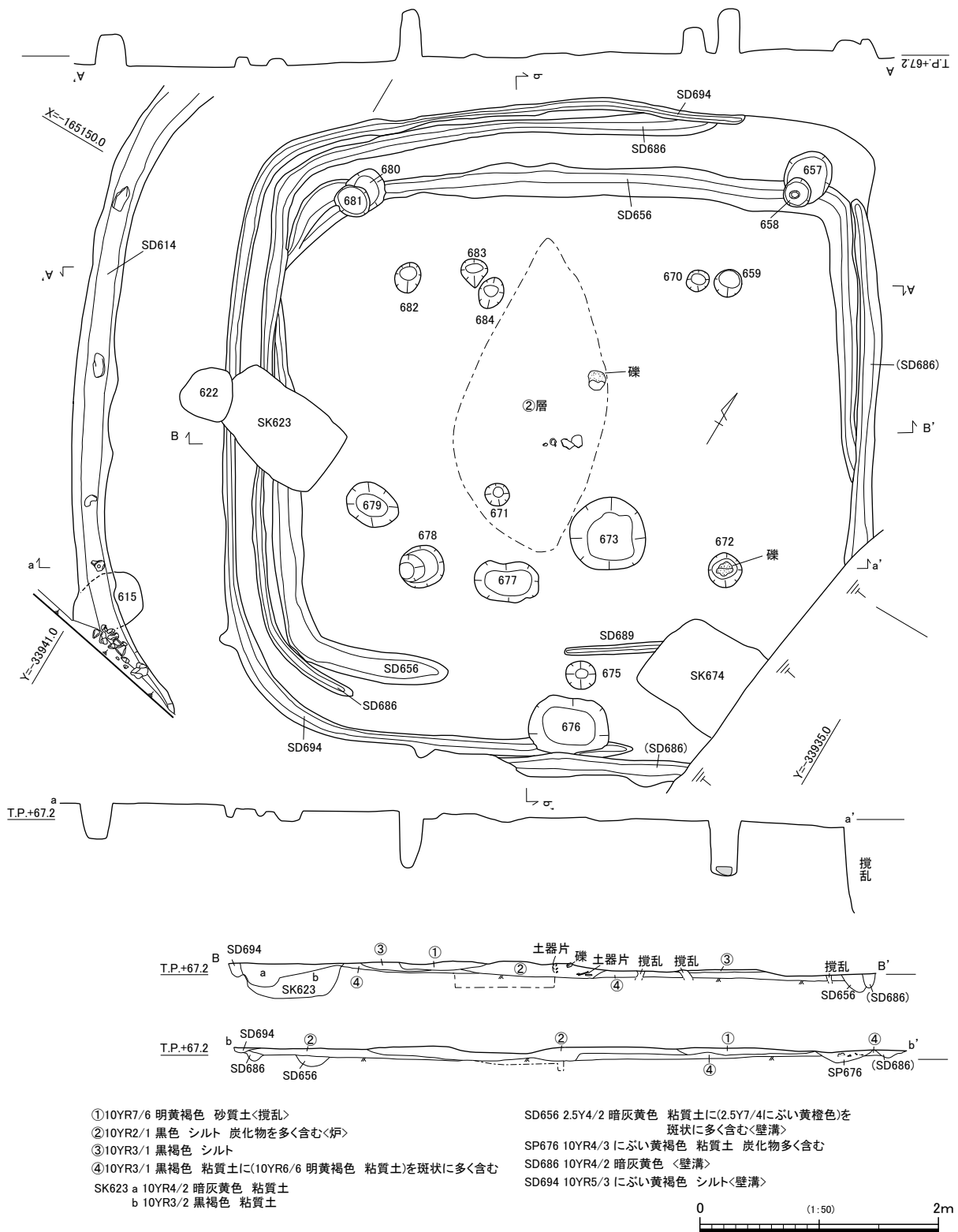
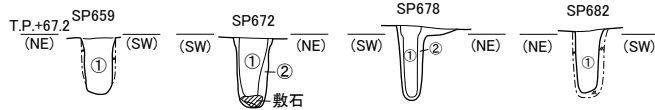


図 42 3-3 区 SH625 平面・断面・土層断面図 (S=1/50)

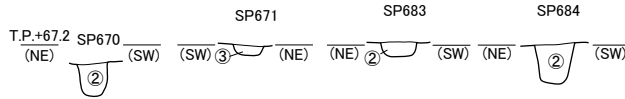
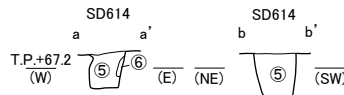
思われる。

溝の分岐部分では、20cm大の礫と弥生土器底部（図 46 - 190）、高杯脚部（197）を検出している（図 44、図版 11）。SD614 と同じく据え置いたような状況ではなく、廃絶時に流入したものと思われる。

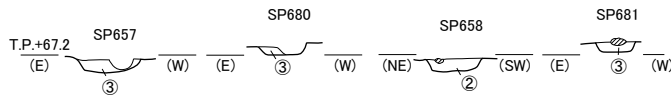
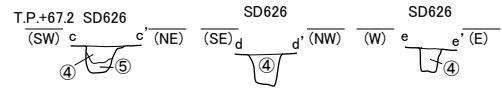
SH625 内柱穴



周溝



排水溝



- ①10YR2/3 黒褐色 粘質土
- ②10YR3/2 黒褐色 粘質土
- (10YR6/6 明黄褐色)をブロック状に多く含む
- ③10YR3/2 黒褐色 粘質土
- ④10YR4/2 灰黄褐色 粘質土
- ⑤10YR3/3 暗褐色 粘質土 炭化物微量含む
- ⑥10YR7/6 明黄褐色 粘質土

SH625 内ピット

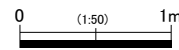
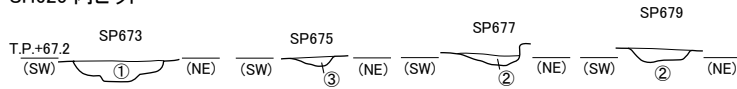


図 43 3-3 区 SH625 柱穴・ピット・SD614,626 土層断面図 (S=1/50)

遺物 SH625 埋土からは弥生土器片のほか、サヌカイト片 2 片、磨石 1 点、須恵器片 7 片が出土した。

図 46 - 172 ~ 174、182 は平面検出時に、178 ~ 180、183 ~ 185、198 はベルト設定後、埋土から出土したものである。172、173 は広口壺口縁。172 は端部を上下に肥厚させた後、下端部に刻み目を施す。173 は粘土帯の継ぎ目で上端を欠くが、端面には凹線 3 条と竹管文が残る。174 は大形の広口長頸壺。上下に肥厚した口縁端面を擬凹線と円形浮文で、上面をクシ描き波状文で飾る。一部ミガキも見られる。胎土には角閃石と雲母を含む。178 ~ 180 は甕口縁部。178 は外反して端部を丸くおさめる。生駒山西麓産か。179 はやや内湾気味にのび、端部を上方へつまみあげる。内面は黒変する。180 は体部から口縁部半ばにかけて黒変するため甕とした。頸部は内面に粘土帯の段を残して接合され、口縁外湾して受口状に上方につまみ出される。上端には細かな刻み目が施される。外面は浅黄色を呈し、胎土にはチャートやごく細かな長石が含まれる。183 ~ 185 は壺・甕の底部。182 外面はナデ、内面はクモの巣状の簾状ハケ調整。胎土は精良。底部に指跡がめぐる。ドーナツ状の底をもつ 183 は外面に粗いハケ痕跡を残す。184 は風化のため不明瞭だが、おそらくドーナツ状の底を呈する。185 は台付鉢もしくは甕。高台をつまみ出し、内面には簾状ハケ調整。全体が赤変する。

壁溝である SD656 からは、甕口縁部 177 が出土している。端部はわずかに下方に肥厚する。ほか焼土塊とサヌカイト剥片も出土している。

同じく壁溝 SD685 で出土したのは 181。椀もしくは高杯で、内湾しながら上方へのび、端部は丸い。

竪穴建物の西をめぐる SD614 からは 175、176、188、189、193 ~ 196 が出土している。175 は広口壺口縁。端部はわずかに肥厚して面をなす。短頸壺 176 の口縁部は、小さく外傾して内湾気味。内外面はミガキ調整と思われるが不明瞭である。193 は高杯。杯部が屈曲する形式のものと思われる。

円形竹管浮文と、不明瞭ながらも凹線も認められる。杯の屈曲部にも円形竹管浮文がみられる。蓋に転用したのか内面に煤が付着し、内外面とも風化が著しい。胎土に角閃石と雲母を含む生駒山西麓産。194 も高杯。杯部は浅く、屈曲部にわずかながら突帯状の貼り出しをもつ。口縁は長く外反してのび、端部は丸くおさめる。195 は脚部。低平で裾部はわずかに広がり、端部で肥厚して面をなす。ほぼ全周が残るため透かし孔はないものと確認できる。高杯もしくは台付壺か。196 は高杯脚部。裾部へなだら

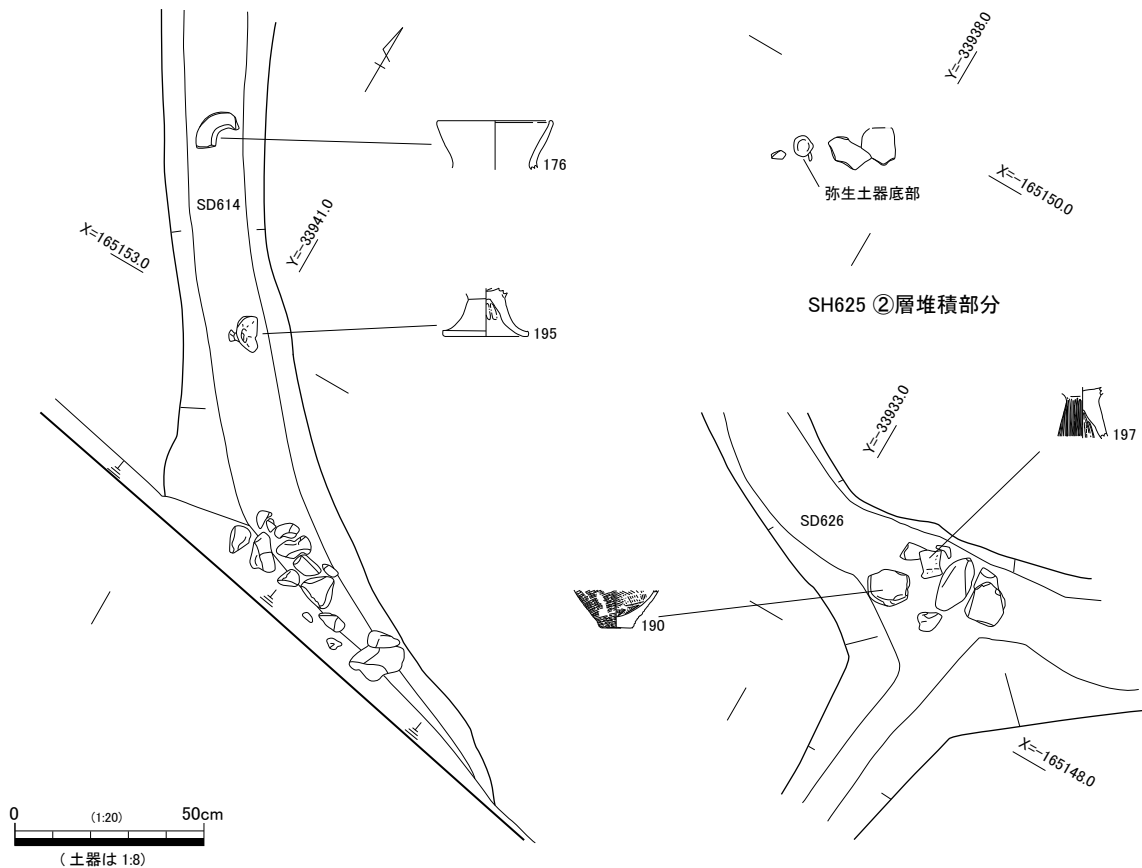


図 44 3-3 区 SH625,SD614,626 遺物・礫検出状況平面図 (S=1/20)

かにのびるものであろう。

排水溝 SD626 出土の 197 は高杯脚部。外面に細かいミガキ調整。基部は中実化しはじめている。

186 は SP676、187 は SP673、188、189 は SD614、190～192 は SD626 から出土したものである。186 は外面赤変。角閃石と雲母を含む。生駒山西麓産。187 は外面赤変し、底部内面は黒変する。内面に粗いハケを垂直方向に施す。189 の底部は SD614 礫周辺から出土した。外面と底面はミガキ調整で、内面は簾状ハケ調整。壺か。190 も内面簾状ハケ。191 は外面赤変。192 は焼成後、底部に穿孔している。

出土した弥生土器はほとんどが小片で、個別の壁溝ごとに時期差は抽出できない。加飾広口壺 173・174 や、受口状の口縁をもつ甕 180、口縁部が長く外反する高杯 193・194 といった様相を特徴的なものとして捉えると、V 様式後葉から VI 様式をその中心に据えるものであり、その期間にわたって数度の建替えが行われたものと考えられる。

ほか SH625 埋土から土師器高杯 (198) と須恵器杯 (199～202) が出土している。数点の出土で後述する掘立柱建物等に関連する遺物と考えられる。198 は土師器、高杯脚部。SH625 埋土出土。基部は中実化している。199 は杯蓋の端部である。201、202 は杯身。立ち上がりは短く内傾し端部はまるい。いずれも MT85～TK209 型式期のものであろう。200 は杯蓋。端部を下方に折り曲げるもので、平城 I～II 段階に位置付けられる。

SH630 SH625 の東で、現代耕作土を除去した状況で方形プランを検出した (図 45、図版 12)。幅 10cm 弱、深いところでも深さ 10cm 弱の壁溝が残る程度で、残存状況は悪い。埋土はほぼないと言ってよく、地盤層に痕跡が残る程度である。規模は東西 4.0m、南北 4.0m 以上を測り、建物の軸は、南北からやや東に振って N-5°-E。柱穴、炉跡は確認できない。SP687 や SP934 は建物内にあるが、建

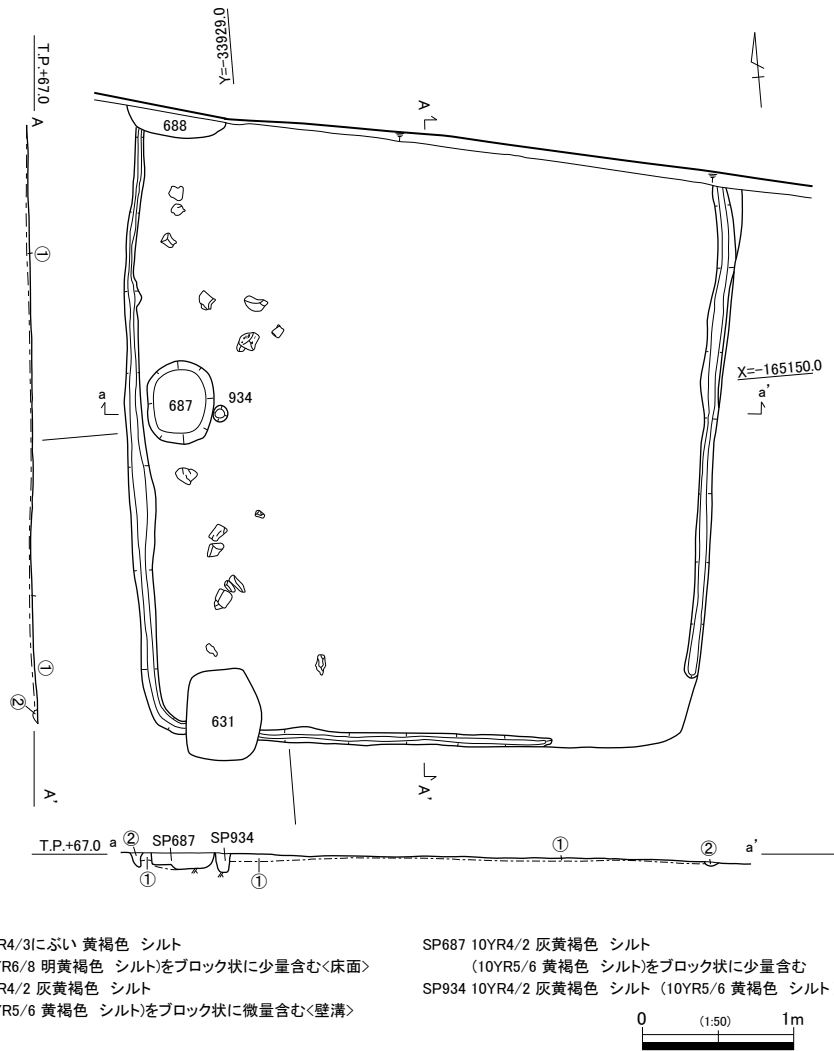


図 45 3-3 区 SH630 平面・土層断面図 (S=1/50)

物の残存状況から SH630 に伴うものではないと考えられる。西側壁溝沿いに拳大の礫が集中するものの、地盤層に含まれる礫が表出したものと考えられる。

出土遺物はわずかで小片である。遺構検出中と、壁溝埋土中から弥生土器片のほか、サヌカイト剥片と須恵器片数点が出土している。検出中の出土遺物には薄手で受口状口縁をもつ甕や、タタキもしくは粗いハケ調整のある破片などがある。小片のため実測はしていない。時期を確定する資料には恵まれないが、遺跡全体での竪穴建物の時期を考慮すれば、あえて SH625 と離れた時期を想定する必要はなからう。SH625 と同時併存するかどうかは不明だが、3 区全体で出土した弥生土器に大きく時期差のあるものはなく、V 様式後葉から VI 様式のうちにおさまるものとする。

図 46 - 203 は、SH630 の南西部から出土した須恵器杯身である。SH625 と同じく、後述する掘立柱建物等に伴うものと考えておきたい。

(2) 溝状遺構 (図 47、48、図版 13)

SD778 3-2 区南東隅で最大で幅 32cm、深さ約 11cm を測る溝をほぼ耕土直下で検出した (図 47、図版 13)。東北東へやや弧を描いて延びる溝で、底面がやや平らな「U」字形の断面をもち、明確な底面をもつ SH625 の壁溝などとは異なる。埋土は 1 層で、暗褐色粘質土に地山由来と思われる黄褐色土

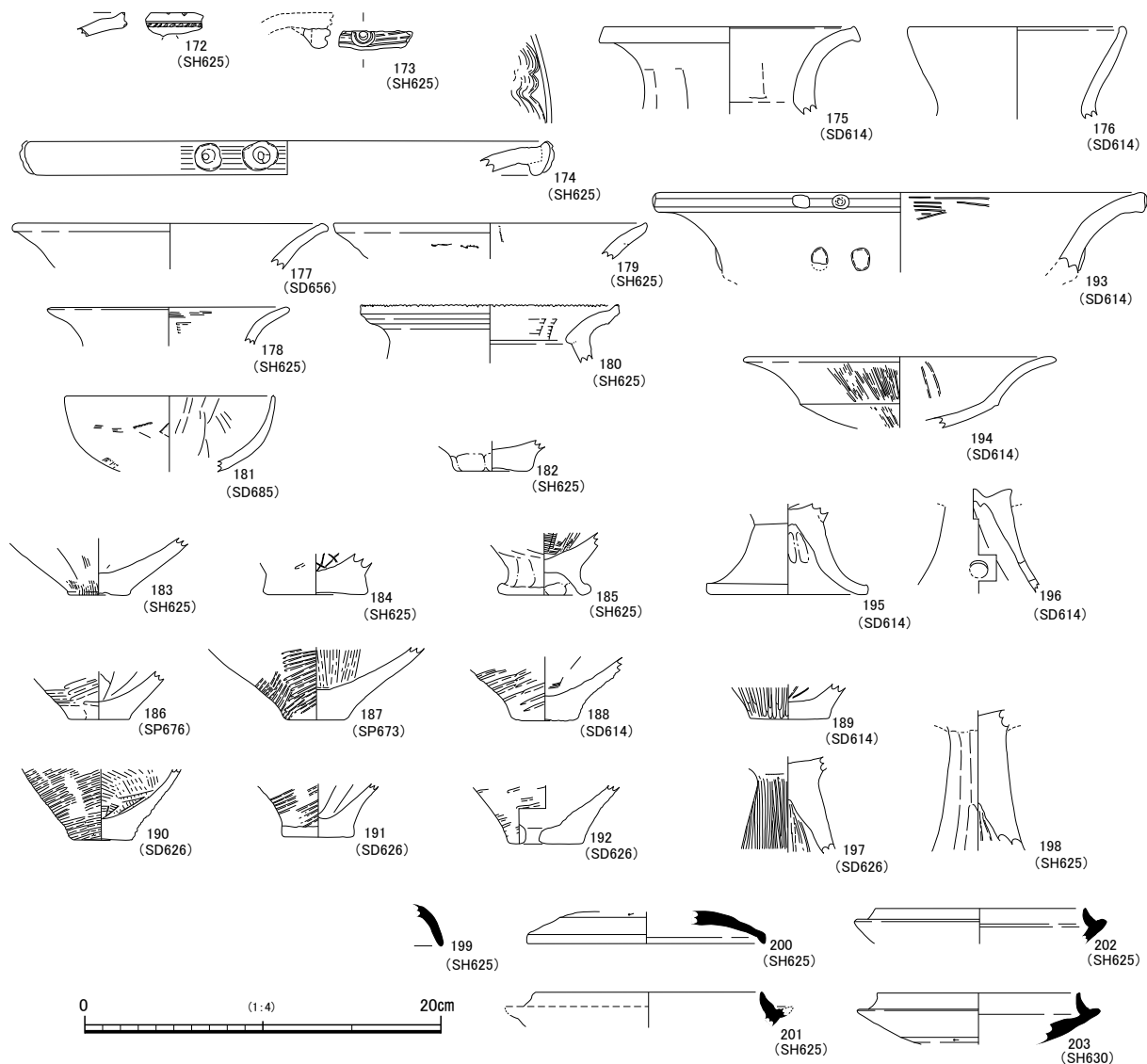


図 46 3-3 区 SH625,SD614,626,656,685,SP673,676,SH630 出土遺物実測図 (S=1/4)

が混じる。溝は南の調査区外へと延びて全体形は不明だが、集落域の広がり方を考慮すると SH625 と同様な竪穴建物に関連するものか。

溝埋土、ほぼ遺構検出面直下で、弥生土器壺（204）と甕（206）が形を保って出土した（図 47、図版 13）。204 はほぼ正位、206 は横位で出土している。上層の削平に伴って土器も破損している。また手焙形土器（205）は、南壁断面にかかって集中して出土している。これらの遺物は埋土上位で比較的形を保ったまま出土しており、埋土堆積後流入したものと思われる。廃絶の時期を示すものとして重要である。そのほか弥生土器片と、須恵器杯蓋 1 点が出土している。

図 48 - 204 は壺の体部で、頸部との境は明確な屈曲をもつ。胎土は白色が強く、長石が目立つ。内面は黒変する。205 は手焙形土器の鉢部。刻目突帯は最大径より下がった位置に付き、大きめの底部をもつ。内外面ともハケ調整。外面には煤付着。68・69 年度調査でも 2 個体出土している。206 は受口状口縁をもった甕。口縁端部に面をもち、口縁部と体部の屈曲部は明確な稜をもつ。肩部で張らず中半近くで最大径をもつものと思われる。外面のタタキは細く、一部にケズリ状のハケ調整が施される。207 は器台の体部。透かし孔が 1 孔のみ残る。外面ミガキ調整。208 は須恵器杯蓋。TK43 ~ TK209

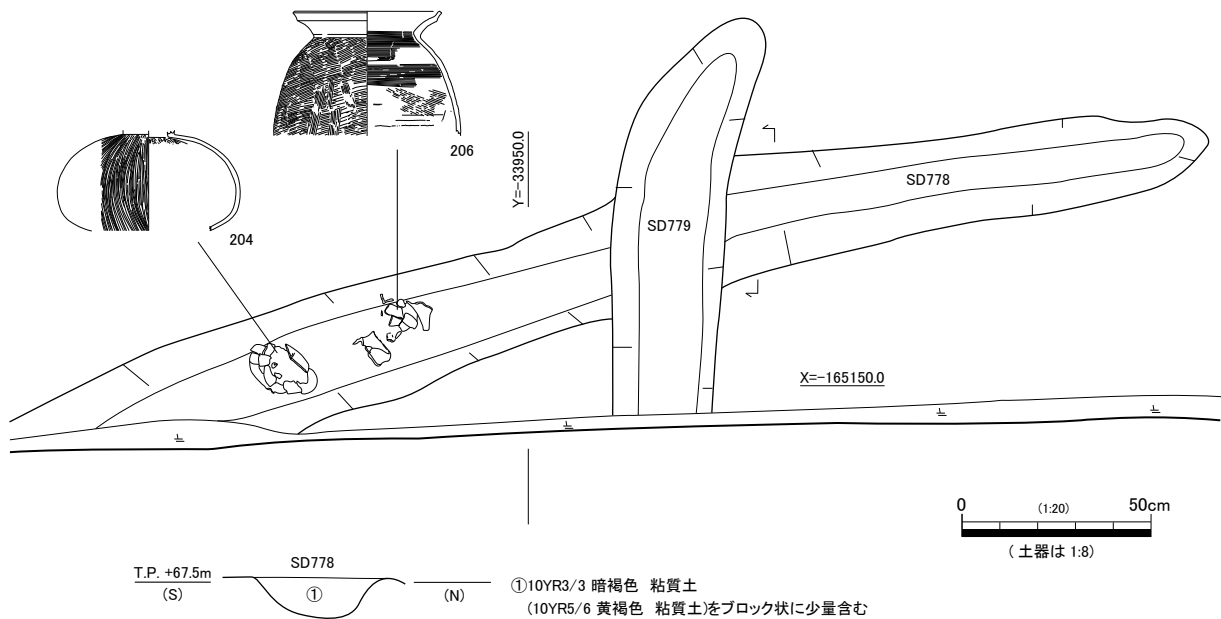


図 47 3-2 区 SD778 遺物出土状況図 (S=1/20)

型式期か。ごく小片であり、流入したものであろう。以上、SD778 出土の弥生土器は手焙形土器 205 を特徴としてVI様式に位置づけられ、この時期に廃絶されたものと思われる。

SD779 3-2 区南東隅、SD778 を切って南北に走る溝 (図 47)。幅、深さとも SD788 とほぼ同じ。出土遺物は弥生土器のみで、SD788 廃絶後、さほど時を置かずに掘削されたものであろう。

図 48 - 209 は内湾する形態から、屈曲した口縁をもつ鉢と考える。ただし、外面は黒変、器面は剥離するなど被熱の痕跡があり、甕の可能性もある。

SD772 前述した SD778、779 の北で北西から南東に走る溝 (図 37)。幅 3.4m 前後、深さ 10cm 弱で、前述の溝よりやや浅い。弥生土器片が出土した。図 48 - 210 は甕。口縁端部に刻み目が施される。211 は甕の底部。焼成後に穿孔されている。212 は高杯の裾部か。内外面ハケ調整で、端部はわずかに面をもつ。裾にそって内外面とも黒変しており、蓋として転用された可能性がある。V 様式後半から VI 様式に位置付けられ、SD778 や SD779 に近い時期のものであろう。

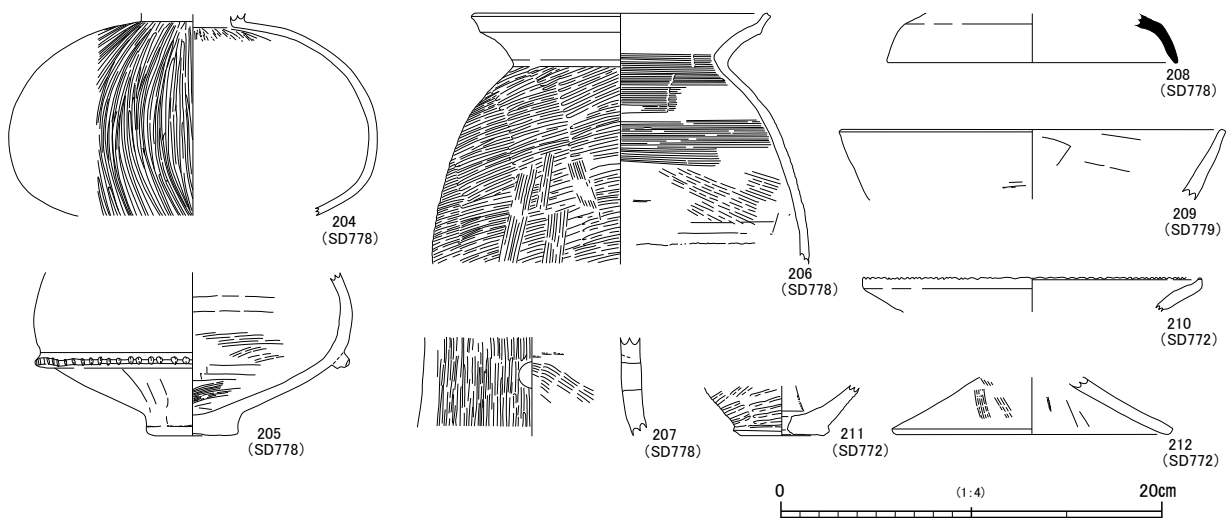


図 48 3-2 区 SD778,779,772 出土遺物実測図 (S=1/4)

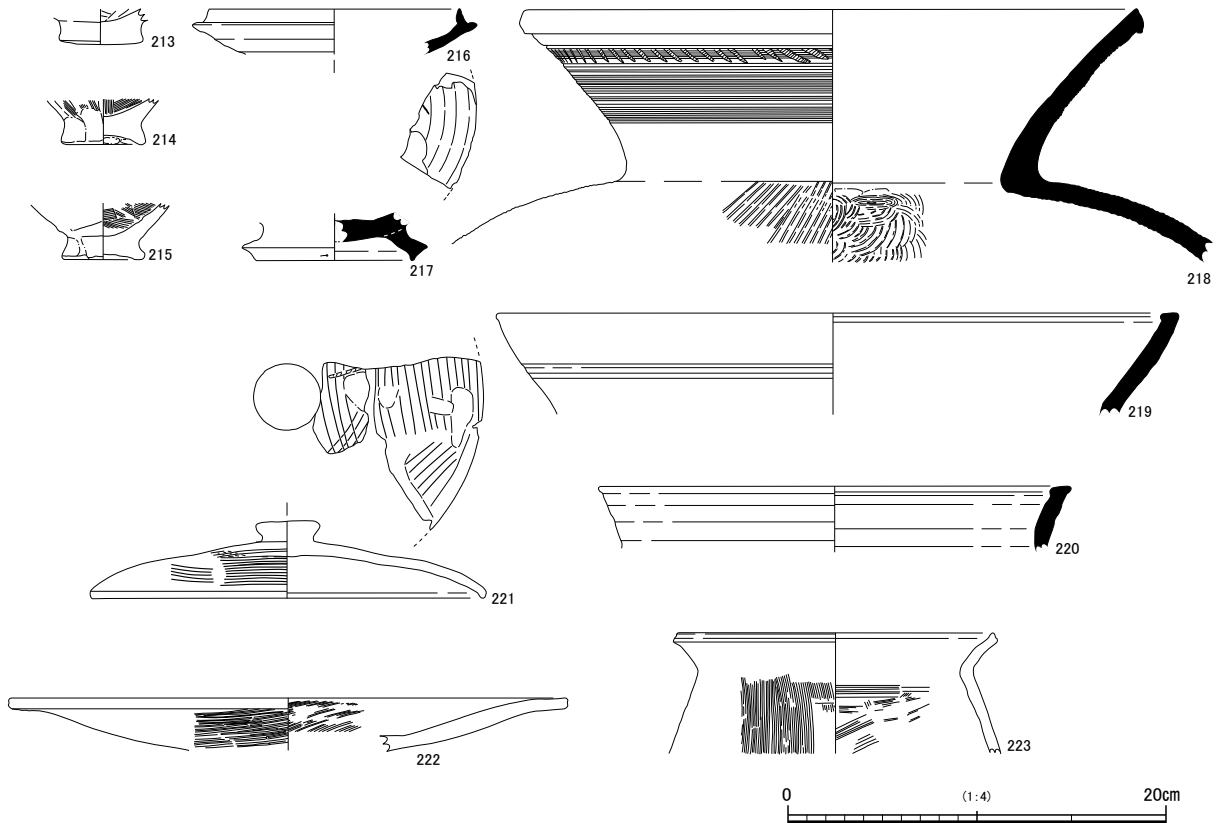


図 49 3-2 区 SX741 出土遺物実測図 (S=1/4)

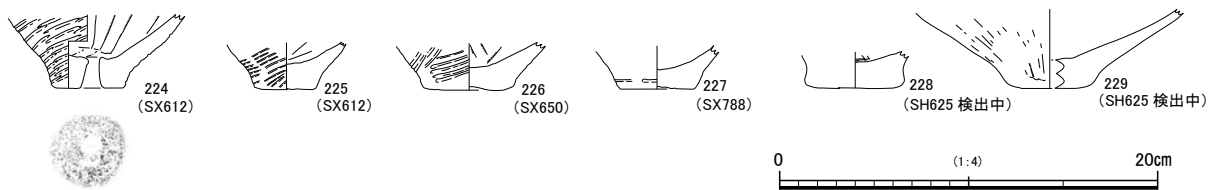


図 50 3-2・3 区 SX612,650,788 出土遺物実測図 (S=1/4)

(3) 落ち込み状遺構 (図 37・40・49・50、図版 13)

SX741 3-2 区北辺中央で検出したごく浅い皿状の落ち込み (図 37、40)。深さ 10cm 未満で浅く不定形に広がり、砂礫混じりの黄褐色シルトが堆積する。遺構屈曲部での切り合い関係を平面や土層断面で検討したが、明確にできなかった。細い溝が、西側では北西-南東方向に並行して (SD817、819、822、831)、南側では遺構を区切るように弧状にはしる (SD820、821)。このうち SD820、821 内には深いピットも認められる。これらの溝を壁溝とする竪穴建物の可能性も考えたが、一連に続くものではなく東側へも延びないことから竪穴建物とはしていない。

遺物は比較的多く出土している。図 49 には遺物の残りが良かったため須恵器、土師器を中心に図示しているが、弥生土器片が約 8 割と大半を占め、須恵器片、土師器片はそれぞれ 1 割弱、ほかサヌカイト剥片 4 片が出土している。213～215 は弥生土器底部。いずれも内面は簾状ハケ調整。214、215 は台状にひねり出している。216～220 は須恵器。216 は杯。端部は短く内傾し丸くおさめる。外面には一部ヘラ描きの線が見られる。217 は壺の脚台部であろう。「ハ」の字状にやや長めに開き、内端部で接地する。218 は須恵器壺。頸部上半にはカキ目がめぐり、その上に一列の列点文。端部は断面三角形を呈する。219 も須恵器壺。口縁は内湾し端部は面をなす。外面には凹線がめぐり。220 は短頸壺か。

頸部は成形時の段をもちながら外傾して内傾する面をもつ。須恵器壺類はTK43～TK217型式期におさまるものであろう。

221～223は土師器。221は蓋。暗文は分割して施され、口縁端部はわずかに内湾して外面に稜をもつ。平城Ⅲ～Ⅴ段階。222は土師器高杯の杯部。口縁は水平にのびる。223は甕。口縁端部は上方にわずかにつまみ出される。内外面ともにハケ調整。飛鳥Ⅴ段階か。これら古代の遺物はSX741を切つて存在する掘立柱建物やピットに伴う可能性が高い。

そのほか弥生時代と考えられる遺構として、SD614に切られるSX612、615、650、SD932、出土遺物と埋土から想定されるSX788、789がある。

SX612 3-3区で竪穴建物排水溝SD614に切られる(図38)。ごく浅い落ち込みで、明確な遺構のラインを形成しないが、弥生土器が出土している。図50-224、225は弥生土器底部。いずれも外面はタタキ調整、内面は簾状ハケ調整。224は焼成前に底部穿孔が施される。

SX615 SD614の南端に切られる土坑(図38)。土坑内に直径約10cmの小穴がある。出土遺物なし。

SX650 3-3区でSD614に切られる土坑(図38)。図50-226の弥生土器底部のほか小片が出土。

SX788、799 3-2、3区にまたがる不定形の土坑で、SX789をSX788が切る(図37)。遺構底面は凹凸があり、土層断面で観察できる壁の立ち上がりは明確である(図40 3-2区北・東壁)。埋土がSH625を構成する壁溝や柱穴と類似しており(灰黄褐～にぶい黄褐色)、弥生土器小片とタタキ調整のある底部(図50-227)が出土していることから、弥生時代後期に所属するものと考えられる。

SD932 3-3区でSD614に切られ、東西方向に短く伸びる幅18cm、深さ5cm未満の浅く細い溝(図38)。出土遺物なし。

また3-3区SH625の上層で、明確な遺構ラインを追えなかった落ち込みがあり、その検出中に弥生土器が出土している。包含層出土とすべきかもしれない。図50-228、229は弥生土器底部。外面ハケ調整でいずれもV様式に位置づけられる。

(4) 掘立柱建物(図51～57、図版8・9・14)

SB3 3-1区で検出したSP410～417からなる掘立柱建物(図51)。建物方向は南北、調査区内では桁梁3×1間、6.5×4.7m、面積約30.6㎡以上を測る。柱間距離は桁行で2.1～2.2m、梁間で4.7m。梁間柱間距離が長く、南辺中央の柱穴は、攪乱や後世の整地によって削平された可能性がある。柱穴掘りかたはややいびつなものもあるが長方形で、100×80cm前後、深さは約40cm。柱穴は北側に偏る。

掘りかたからは、それぞれ弥生土器片と須恵器片、サヌカイト剥片が出土している。図52-230は弥生土器甕の口縁部。外反する口縁は端部に面をもつ。231は土師器高杯の口縁部。内外面風化のため調整不明。232は須恵器杯蓋。復元口径12.6cm、残存高3.9cm。天井部は低く丸みをもち、回転ヘラケズリ調整が施される。口縁部端は丸い。焼成あまく、器面は灰白色を呈する。233は須恵器杯身。立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く鋭い。小片で口径は推定10cm前後。234は須恵器の脚台部。丸みを帯びた段を形成し、接地面で面をなし端部は丸い。径は8cm前後と小さいものだろう。有蓋高杯か。特に須恵器杯から、下限をTK43～TK209型式期に求めることができる。

そのほかSB3周辺のピットから出土したものを図示する。235はSP401から出土した弥生土器底部。内面ハケ調整。236はSP403出土。弥生土器甕の底部で、内外面とも風化が著しい。ドーナツ状の底をもつ。外面はタタキ調整、内面ハケ調整。237はSP456出土。製塩土器の口縁部であろう。内外面

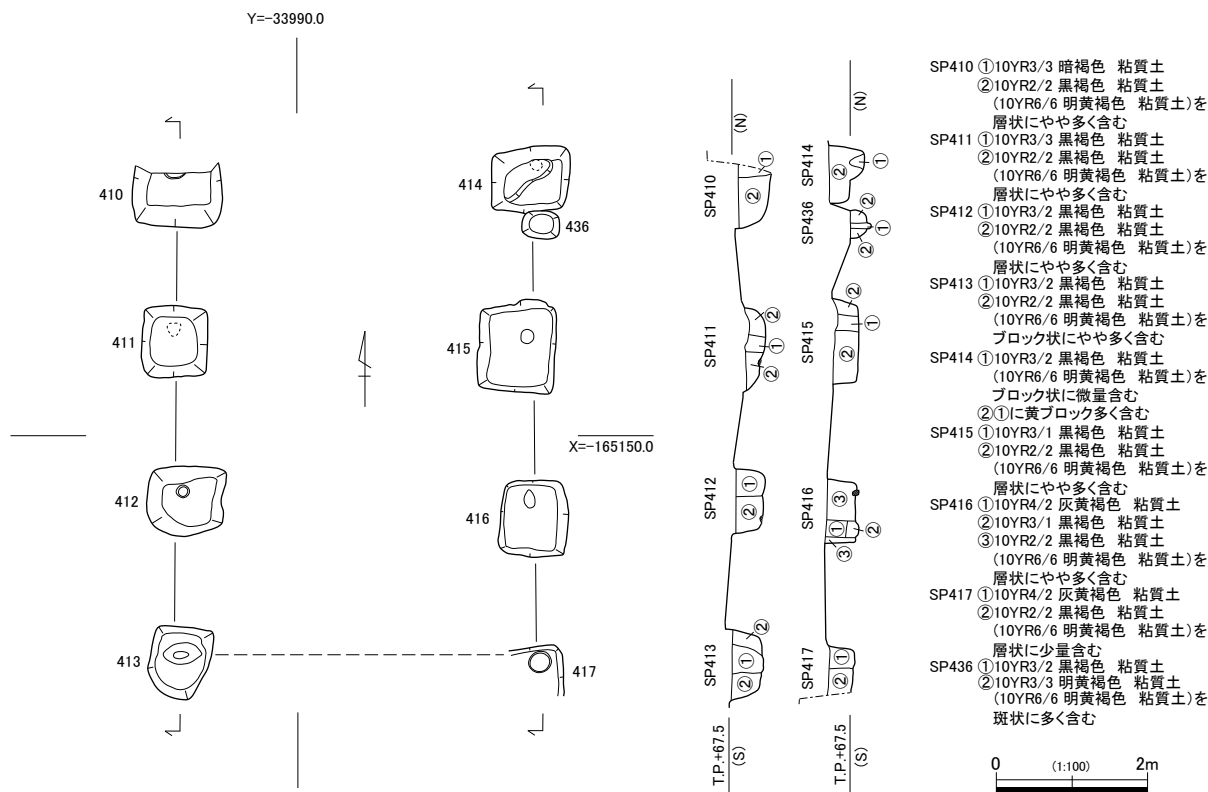


図 51 3-1 区 SB3 平面・土層断面図 (S=1/100)

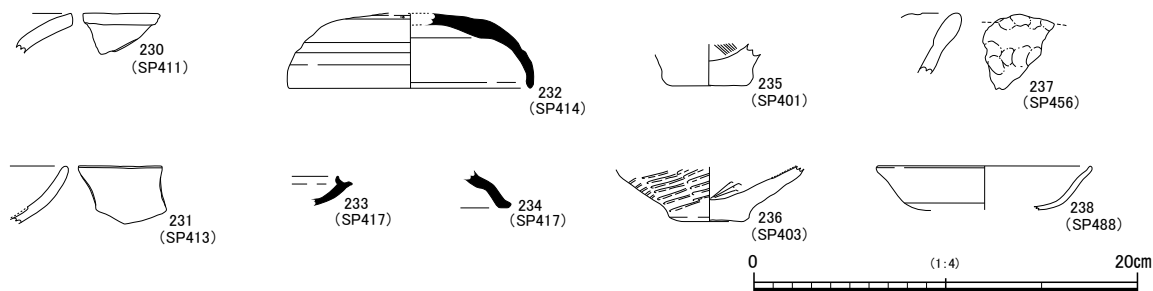


図 52 3-1 区 SB3 掘りかた・周辺ピット出土遺物実測図 (S=1/4)

ともに指押さえによる調整。胎土に2mm前後の礫を多く含み、器面は浅黄橙色を呈する。238はSP488から出土した。土師器杯もしくは皿。内外面ともに風化が著しい。体部下半は内湾し、上半で外湾して口縁端部はわずかに丸みを帯びる。復元口径11.1cm、残存高2.3cm。8世紀代か。

SB4 3-1区、SB3の東に隣接する掘立柱建物(図53)。SP418～420、441、446、450、451、466、477から成る。SB3と規模や方向をほぼ同じくするが掘りかたは小型。建物方向はN-2°-E。調査区内での規模は桁梁3×2間、6.6×4.6m、面積30.4㎡以上。掘りかたは隅丸方形～円形で、小さいものでは65×50cm前後、SP418が最大で約95×70cm。深さは40cm前後だが、浅いものでは20cm弱。柱穴痕跡は掘りかたのほぼ中央にある。柱間距離は桁行で2.1～2.3m、梁間2.3mを測る。

出土遺物は弥生土器片、須恵器片のほかサヌカイト剥片数点。SP441、451からは内面に暗文をもつ黒色土器A類が出土しているが、小片のため図示していない。図54-239～241はSP419、242はSP441、243、245はSP418、244はSP441、246はSP420から出土している。

239は土師器甕。口縁内面はハケ調整。胎土に雲母と角閃石を含み生駒山西麓産かと思われる。240～243は弥生土器底部。240は底部復元径3.3cmと小型。241はドーナツ状の外底面。外面はわずか

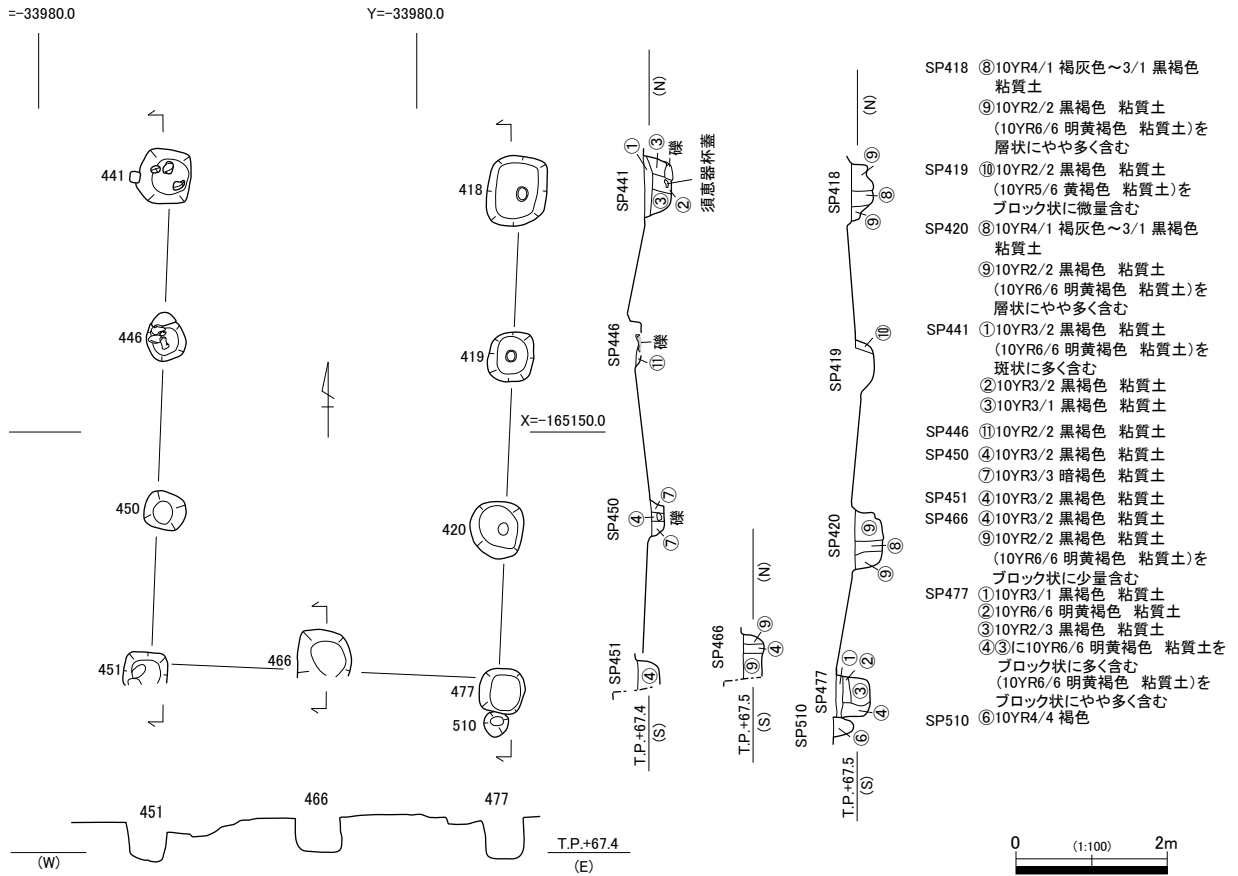


図 53 3-1 区 SB4 平面・土層断面図 (S=1/100)

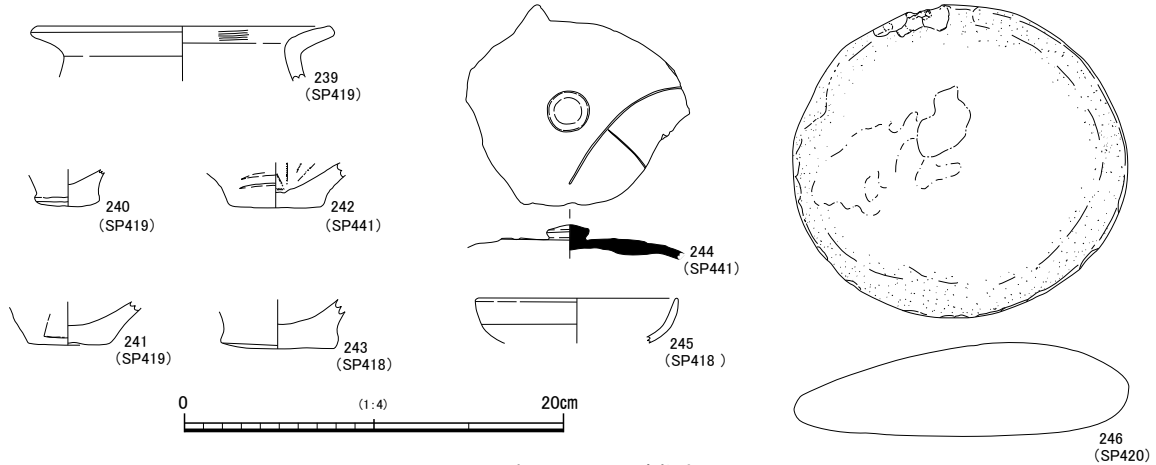
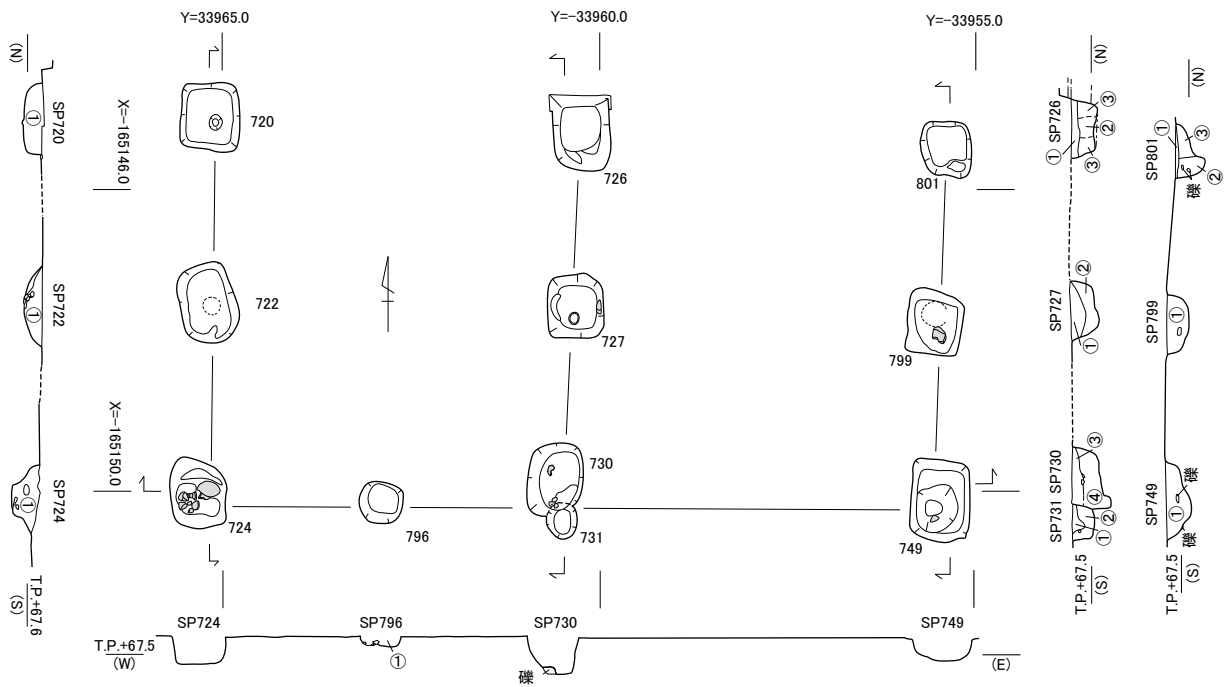


図 54 3-1 区 SB4 掘りかた出土遺物実測図 (S=1/4)

に工具の痕跡が残る。内面はナデ調整。242 は外面タタキ調整、内面は簾状ハケ調整。243 は外面にタタキ調整のような痕跡が見られるが風化のため不明瞭。244 は須恵器杯蓋。つまみは中央にやや高く扁平な山形となる。天井部に幅 1mm 前後のヘラ記号をもつ。天井部内面は直線ナデ。245 は土師器杯。内外面風化して調整不明。

246 は円形の礫で、縁辺部には敲打痕が認められる。直径 16.5 ~ 17.7cm。扁平な円形だが、上下面ともに不安定で据え置けない。石材は砂岩か。

SB5 3-2 区で検出した SP720、722、724、726、727、730、749、796、799、801 を柱掘りかたとする掘立柱建物 (図 55)。軸角は SB3、4 とほぼ平行するが、建物が調査区外へ広がらないので



- SP720 ①10YR3/2 黒褐色 粘質土
(10YR3/3 暗褐色 粘質土)が
小ピット(柱穴?)に堆積
- SP722 ①10YR3/2 黒褐色 粘質土
(10YR5/6 黄褐色 粘質土)をブロック状に少量含む
炭化物微量含む
- SP724 ①10YR3/2 黒褐色 粘質土
(10YR5/6 黄褐色 粘質土)ブロック状に多く含む
- SP796 ①10YR3/3 暗褐色 粘質土
炭化物とマンガン粒少量含む
- SP731 ①10YR3/3 暗褐色 粘質土
(10YR5/6 黄褐色 粘質土)ブロック状に少量含む
炭化物微量含む
②①に(10YR5/6 黄褐色 砂質土)を
ブロック状にやや多く含む
- SP726 ③10YR4/3 にぶい黄褐色
10cmのレギを多く含む
④10YR2/3 黒褐色 粘質土
- SP727 ①10YR3/3 暗褐色 粘質土
②①に(10YR5/6 黄褐色 砂質土)を
ブロック状にやや多く含む
3mm前後の炭化物状の粒を含む
砂粒多
- SP730 ①10YR3/3 暗褐色 粘質土
②①に(10YR5/6 黄褐色 砂質土 粘質土混じり)
③①に(10YR5/6 黄褐色 粘質土)を
ブロック状に少量含む
炭水化物微量含む
- SP801 ①10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土
②10YR3/2 黒褐色 粘質土
(10YR5/6 黄褐色 粘質土)を層状に多く含む
③10YR5/6 黄褐色 砂質土
(10YR3/3 暗褐色 粘質土)をブロック状に
やや多く含む
- SP799 ① 10Y2/3 暗褐色 粘質土
(10YR5/6 黄褐色 粘質土)をブロック状に多く含む
- SP749 ①10YR3/2 黒褐色 粘質土 礫多く含む

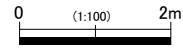


図 55 3-2 区 SB5 平面・土層断面図 (S=1/100)

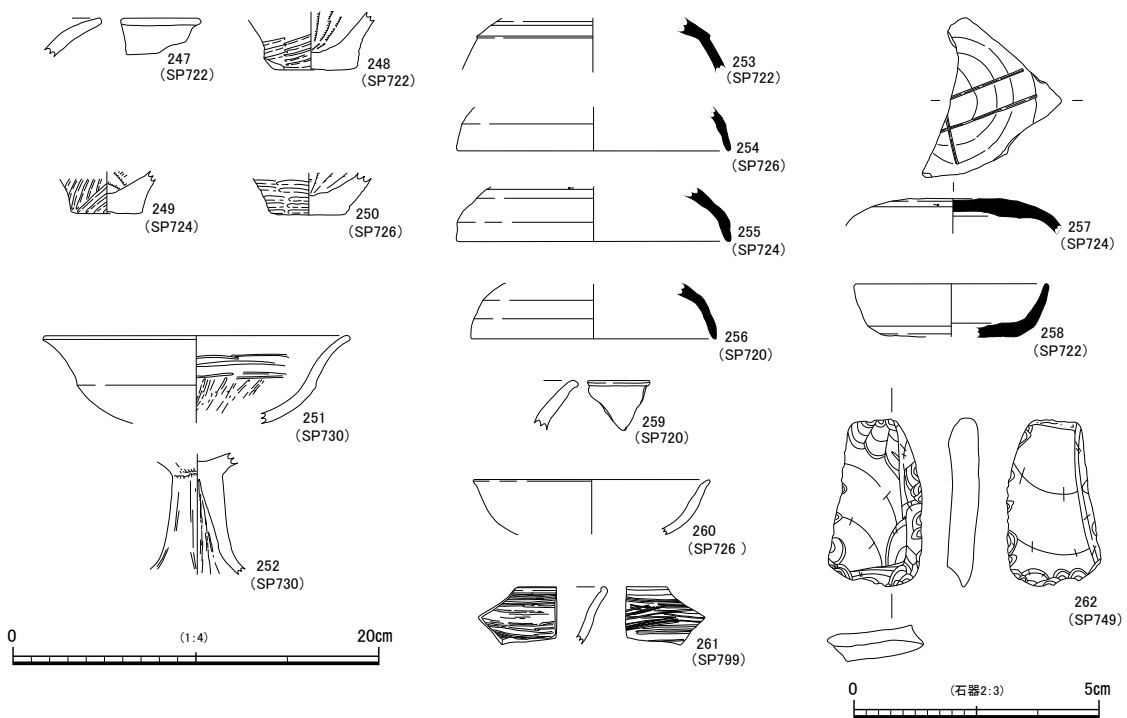


図 56 3-2 区 SB5 掘りかた出土遺物実測図 (S=1/4, 石器 S=2/3)

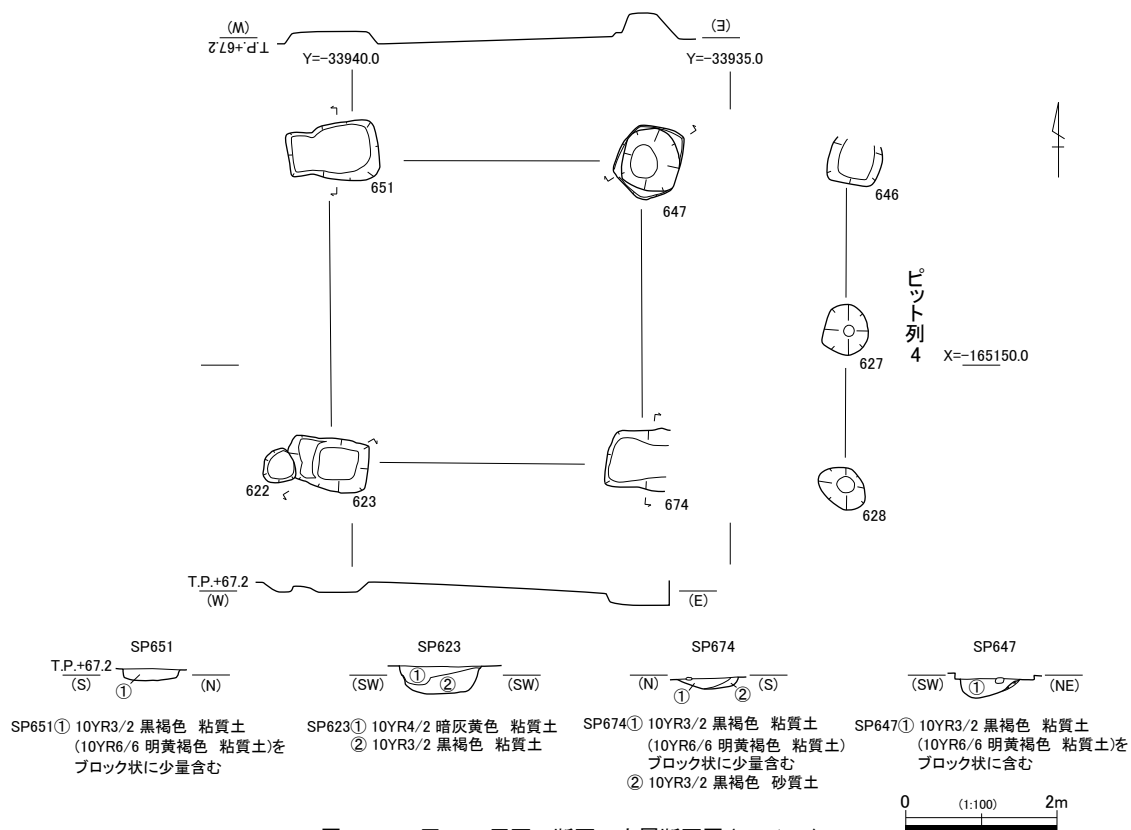


図 57 3-3 区 SB6 平面・断面・土層断面図 (S=1/100)

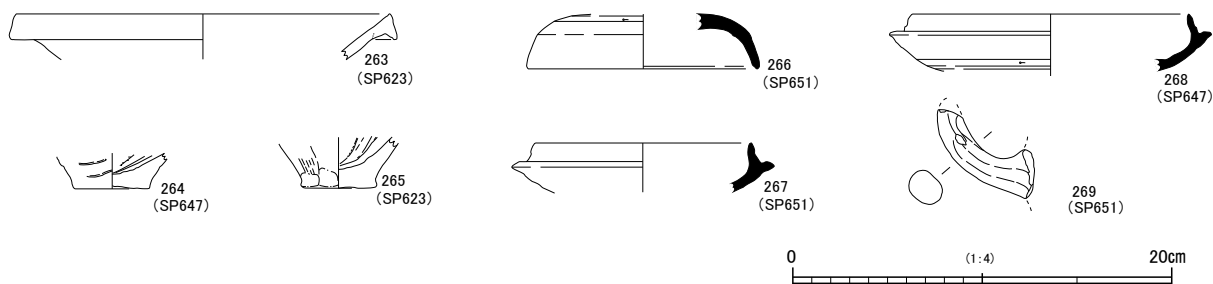


図 58 3-3 区 SB6 掘りかた出土遺物実測図 (S=1/4)

あれば、建物方向は N - 92° - E で、唯一東西を向く。南辺 SP796 は浅く、SP730 - 749 間に柱穴は確認できなかった。SB3 も東西間の柱間距離が長く、東西方向の掘りかたが一つおきに浅いものであったと想定すれば、削平によって検出できなかった可能性はある。

規模は桁梁 4 × 2 間、9.5 × 5.1m、面積 39.0m²以上を測る。掘りかたはやや不定形なものだが、長方形を基本とし、100 × 70cm 前後、深さ 30cm 前後、浅いものでは 15cm 程度。西辺 SP722 の断面形態は半円状となり、掘りかたとしては心許ないが位置を重視した。柱穴痕跡は平面では検出できず、土層断面や底面形態からの推測である。柱間距離は桁梁とも 2.4m 前後に復元できる。

また建物西側部分で SP705 ~ 710、811 や SP712 ~ 718 が東西にぶれつつも列を成している (図 37、61)。前者は SB5 の桁行方向の柱間距離にほぼ等しい距離をもって位置する。SP720、722、724 と別の建物となることも考えたが、SP705 と SP811 以外は 10cm 弱とごく浅く、明確な掘りかたとして認識できない。検出した掘立柱建物が明確な柱掘りかたを有していることを重視するなら、否定できるものとする。

なお南北方向では、掘りかたの間にもやや小規模なピットが並ぶ (図 37、61)。建物として捉えるこ

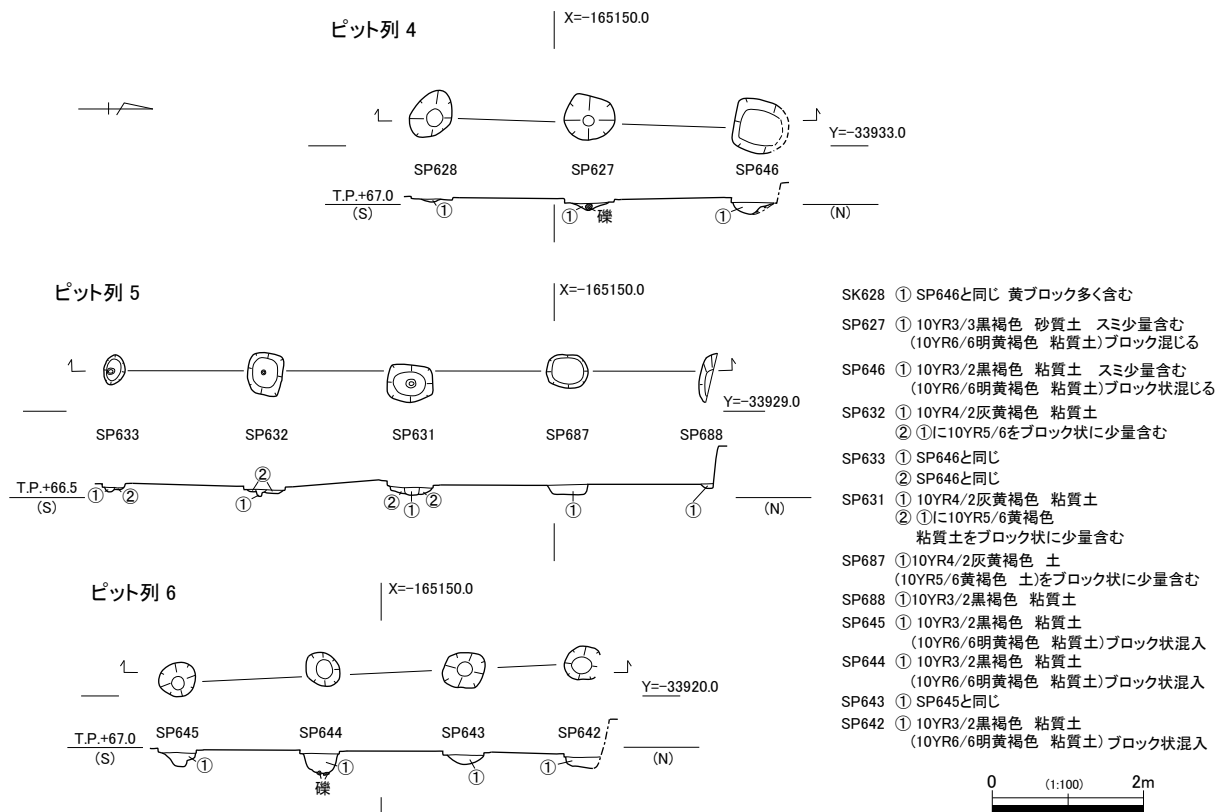


図 59 3-3 区ピット列平面・土層断面図 (S=1/100)

とはできなかったが、SP731はSB5を構成するSP730に切られており、SB5以前の建物があったと考えられることもできよう。

SB5の柱掘りかたからは弥生土器、須恵器、土師器、サヌカイト剥片が出土している。図56-247は甕の口縁部か。内面は黒変する。248～250は弥生土器底部。いずれも外面はタタキ調整、内面は簾状ハケ調整。248のタタキ調整は8～9分割で底部をめぐる。249は角閃石と雲母を含む生駒山西麓産の胎土をもつ。250は外底面もナデで平滑に整えられる。251・252は高杯。接合はしないが同一個体であろう。251はSP730底面で出土した。復元口径16.5cmを測る。稜をもって大きく外反する口縁をもち、脚部は中空。裾部はゆるやかに屈曲して広がるものと思われる。内外面とも風化が著しいがミガキ調整が施される。内外面は赤橙色。胎土精選。

253～257は須恵器杯蓋。253の稜は短くにぶい。254は復元口径14.7cm、残存高2.4cmを測る。天井部と口縁部との境はやや強めに屈曲する。255は復元口径14.7cm、残存高2.9cm。口縁部はわずかに外反する。256は復元口径13.3cm、残存高3.0cm。器面は灰白色を呈する。257は天井部外面に1mm強の幅の沈線で描かれたヘラ記号、内面には直線ナデ。258は須恵器杯身。外底面には回転ヘラ切痕。復元口径10.4cm、器高2.9cmを測る。底部は平らに近く、口縁部へ外傾してのびる。

259は土師器甕の口縁部。端部でわずかに外反する。260は土師器杯C。風化のため調整不明。261土師器杯A。内外面ともに暗文が施されるが、内面の放射状暗文は確認できない。平城Ⅲ段階までで捉えられると考えられ、SB5の時期の下限を示すものであろう。

262はサヌカイト製の楔形石器。長軸両極に敲打痕があり頂部には原礫面が残る。重さ5.78gを測る。

SB6 3-3区、竪穴住居SH625に重複する桁梁1×1間の建物(図57)。東に平行するピット列4を底部分と考えることもできる。建物方向はN-1°-Eで、ほぼ南北(東西)である。柱穴痕跡を検

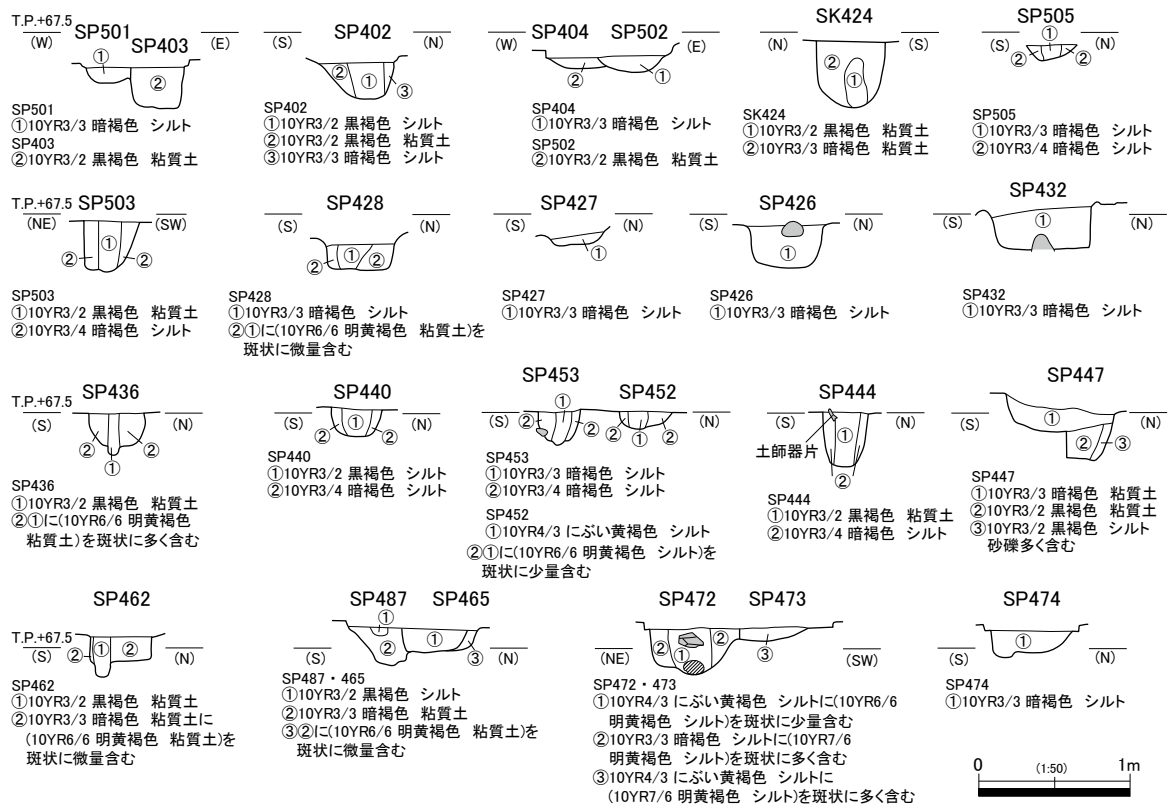


図 60 3-1 区ピット土層断面図 (S=1/50)

出できず、規模は推定で $4.1 \times 4.1\text{m}$ 、面積 16.8m^2 となる。掘りかたは約 $80 \times 120\text{cm}$ のややいびつな長方形だが SP647 は一辺 80cm ほどの隅丸方形を成す。検出面からの深さは $15 \sim 35\text{cm}$ と一定しない。

掘りかた埋土から弥生土器片、須恵器片、土師器片が出土している。図 58 - 263 は弥生土器壺の口縁部。端部は下方へ肥厚する。264、265 は弥生土器底部。266 は須恵器杯蓋。復元口径 12.2cm 、器高 2.9cm 。267、268 は須恵器杯身。いずれも立ち上がりが短く上方にのびる。復元口径はそれぞれ 11.4cm 、 14.6cm 。269 は土師器把手。断面は扁平な円形を成す。

これら SB3 ~ 6 の掘立柱建物群は、ほぼ南北に軸角をそろえており、同時代のものと考えられる。掘りかたの遺物は小片が多く弥生土器が混在するが、須恵器や土師器がその年代を示すものであろう。須恵器は杯 H が存在し、初現期の杯 G の出土を見ない。よって造営時期は 6 世紀後葉から 7 世紀前半に求めることができよう。廃絶の時期は、10 世紀頃の黒色土器が出土した SB4 以外では、8 世紀代を下限とする。建物を構成していないピットの多くも、同じく南北方向の列を指向していることから、さらに数棟の建物が 6 世紀後葉以降、平安時代にわたって営まれていたものと想定できる。

(5) ピット列・ピット・土坑 (図 59 ~ 62)

3 - 3 区では SB6 以東に、ピット列 3 列がほぼ平行して並ぶ (図 59)。検出面からの深さは $10 \sim 20\text{cm}$ 未満と浅く、遺構上部はかなり削平されている。SD638 に切られる SP636、637 も同様に列を成す可能性がある。

ピット列 4 (SP627、628、646) 3 - 3 区のほぼ中央に位置する。前述したように SB6 と方向を同じくし、庇となる可能性もある。列方向は $N - 1^\circ - E$ 、南北 2 間、 4.1m 以上を測る。柱間距離は推定で 2.1m 前後、掘りかたは直径 60cm 前後の不整形円形。

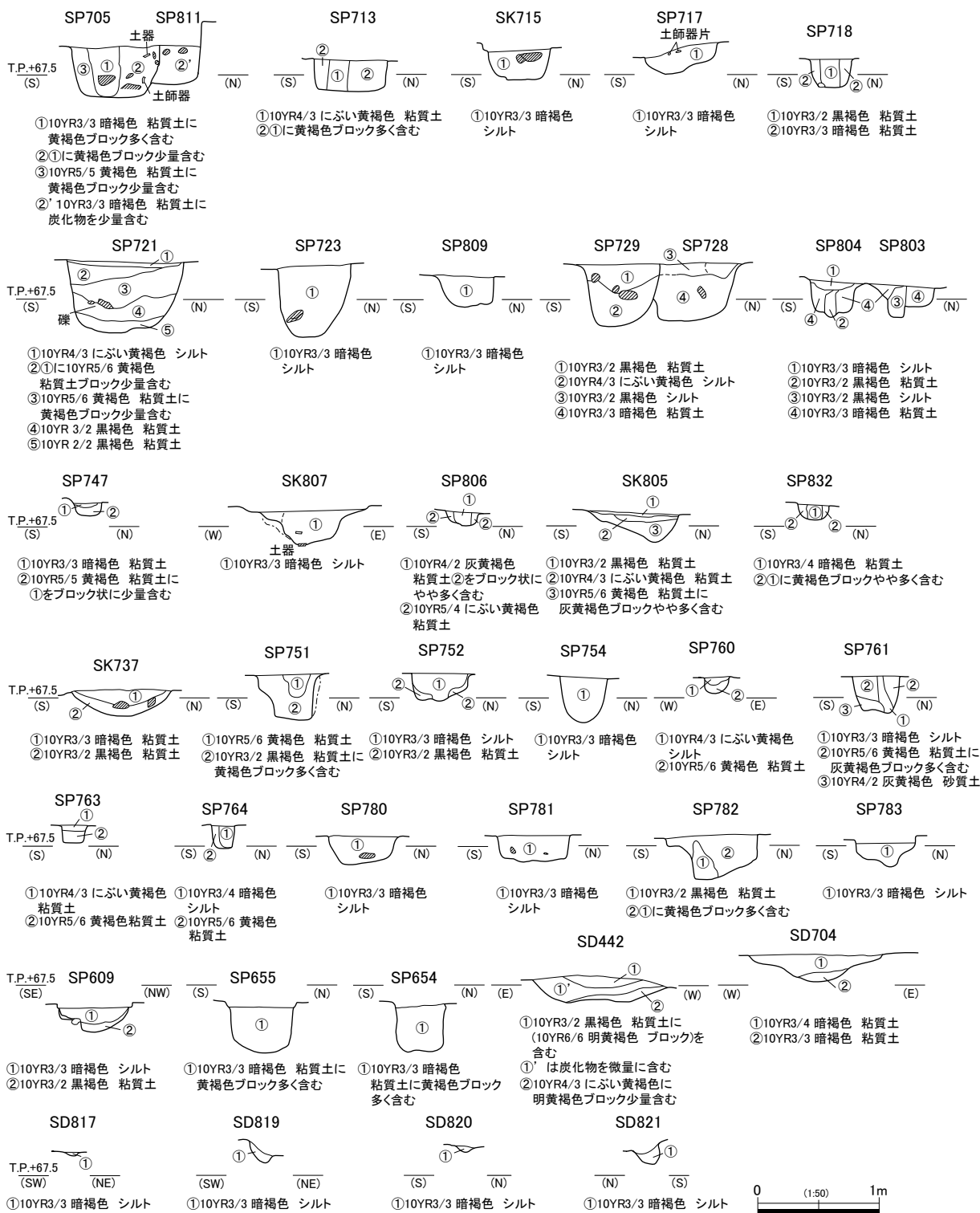


図 61 3-2・3 区ピット・土坑・溝土層断面図 (S=1/50)

ピット列 5 (SP631 ~ 633, 687, 688) 3-3 区で SH630 の壁溝を切る。唯一柱痕が検出できているが柱通りは悪い。列方向は N - 2° - E、規模は南北 4 間、8.0m 以上。柱間距離は約 2.0m、掘りかたは 60 × 50cm 前後の円形もしくは隅丸方形。

ピット列 6 (SP642 ~ 645) 3-3 区東端で検出した。列方向は推定で N - 3° - W とやや西に傾く。南北 3 間、5.4m 以上を測る。柱間距離は推定 1.6 ~ 2.0m と一定しない。掘りかたは直径 45cm 程度の不整形円形。ほかのピット列よりやや深い。

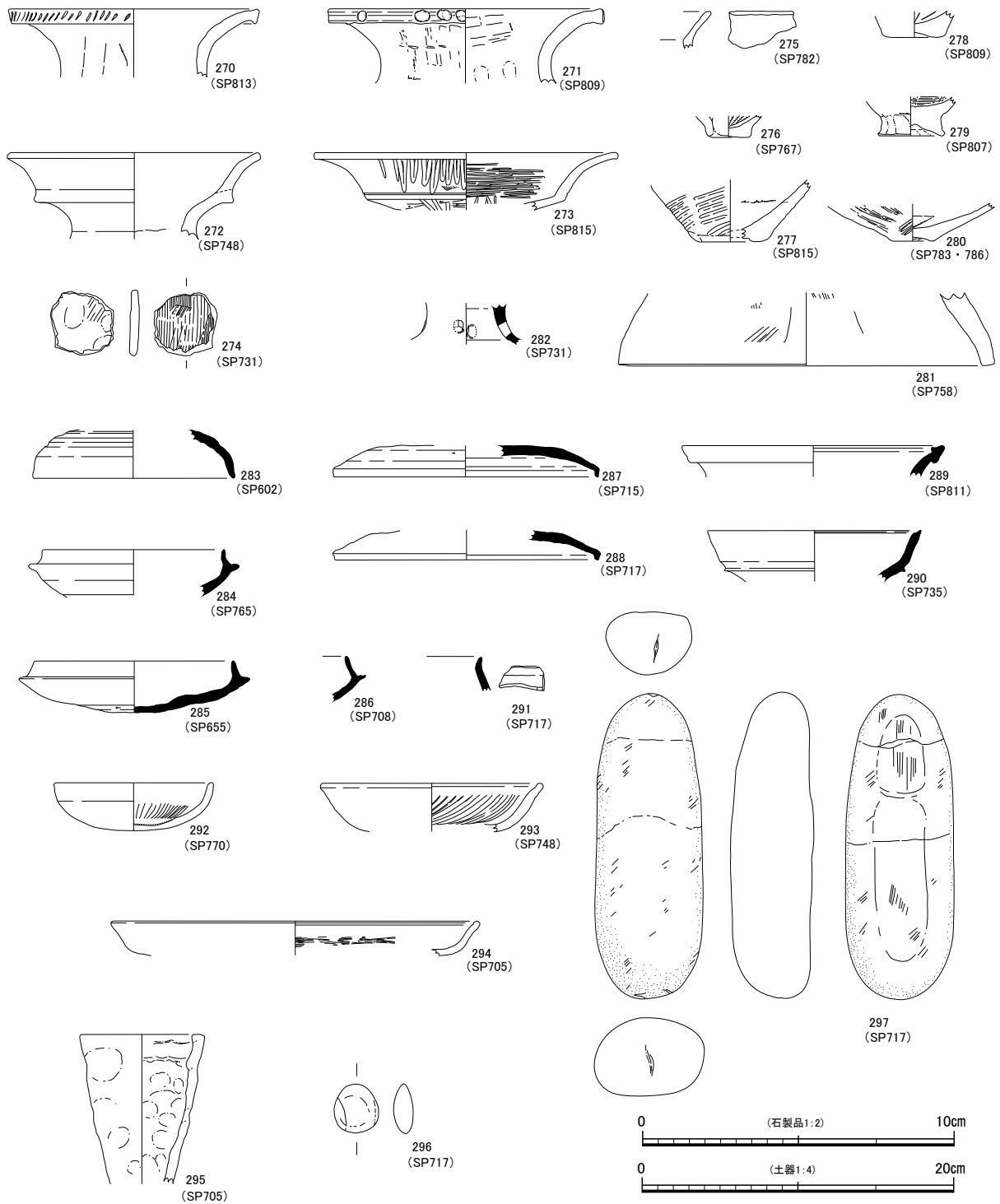


図 62 3-2・3 区ピット出土遺物実測図 (S=1/4, 石製品 S=1/2)

以上のピット列 4～6 は、掘立柱建物と軸方向を同じくしており、集落東端を区画する柵列と想定することも可能と考える。

そのほか建物としては復元できなかったが、柱掘りかたと思われるピットを 3-1～3 区で検出した (図 35～38、60、61)。特に 3-1 区西端では、東西方向に SP501、403、402、404、502、南北方向に SP426～429、503～505、424 が列を成しており、方向も SB3～5 とほぼ平行する (図 36)。SB3 と重複する位置にあり、SB3 に先行する建物の存在を考えるべきかもしれない。なお 3-2 区検出のピットは SB5 と関連して既述している。

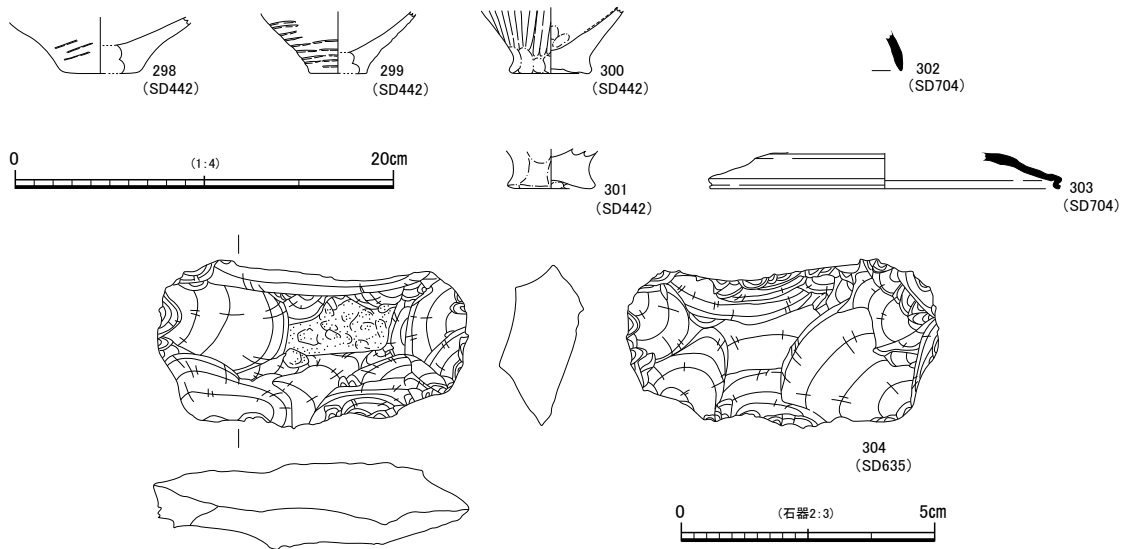


図 63 3 区 SD442,635,704 出土遺物実測図 (S=1/4, 石器 S=2/3)

出土遺物（図 62）は弥生土器や土師器、須恵器が混在するピットが多く、年代を確定できるものではないがおおよそ弥生時代後期から平安時代までの土器が出土している。270～281 は弥生土器。270、271 は広口壺。270 は列点文、271 は円形浮文が施される。272 は二重口縁壺。外反強く擬口縁の接合部は突帯状に張り出す。273 は高杯。杯部高は低いが、口縁部は大きく外反し、屈曲部には浅い沈線がめぐる。274 は土製円板。今回調査区内では珍しい。外面にハケ調整、内面に指痕。275 は甕の口縁部。内外面とも黒変する。276～280 は底部。276 は底径 2.6cm と小形化している。277 はドーナツ状の底部に穿孔が施されている。278 もドーナツ状の底部。279 は脚台状。280 は壺の底部であろう。外面にミガキ調整が残る。281 は器台か。裾部はわずかに屈曲して端面で面を成す。

282～291 は須恵器。282 は有蓋高杯の脚台部であろう。透かし孔はやや不定形だが円形。283 は杯 H 蓋。復元口径 12.9cm、残存高 3.1cm。口縁部からやや天井部よりに凹線状のくぼみがめぐる。284～286 は杯 H 身。285 以外は小片。284 の立ち上がりは内傾した後直立する。285、286 の立ち上がりは短く内傾し端部は丸い。287、288 は杯 B 蓋。口縁端部を下方に折り曲げるもの。289 は甕の口縁部か。端部は内傾する凹面を成し、鋭い稜を認める。290 は甕の口縁部であろう。鋭い稜をもった凸線が屈曲部にめぐる。291 は短頸壺の口縁か。

292～294 は土師器。292 は椀。内面には放射状暗文を施し、口縁部はヨコナデ、体部外面は不調整のまま残す。口径 10.0cm、器高 3.1cm。293 は杯。復元口径 14.0cm、内面には口縁内面には沈線状に凹む。外面調整不明。294 は皿。復元口径 23.3cm、残存高 2.2cm。口縁端部内面には強い沈線がめぐる。器面の剥離著しいが、内面に放射状暗文が見られる。295 は製塩土器。手づくね成形で、口縁端部内面にはナデによる段が作られる。

296 は基石か。直径約 1.5cm。黒色の自然の円礫を利用したものと思われ加工痕は観察できない。297 は砂岩製の磨石。擦痕は全体に見られるが、長軸両端に切り目状の欠けがあり、敲打痕も目立つ。全体被熱して赤変する。

図示したもののほか年代の分かるものとしては、SP440、444 から黒色土器 A 類、SP462 から平安時代の須恵器壺の口縁部、SP510 からは TK209 式期前後の須恵器杯が出土している。

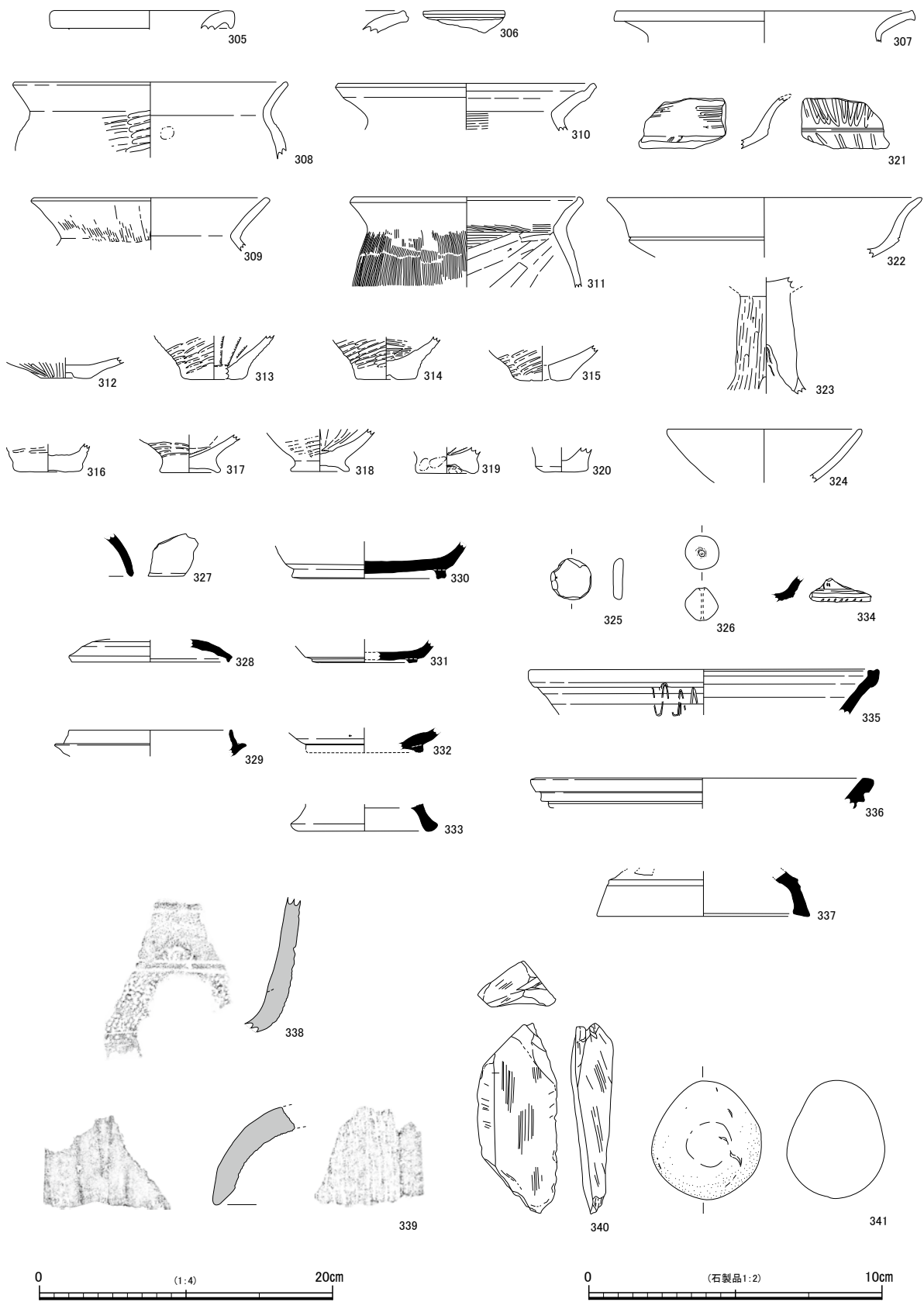


图 64 3 区包含层出土遗物实测图 (1) (S=1/4, 石器 S=1/2)

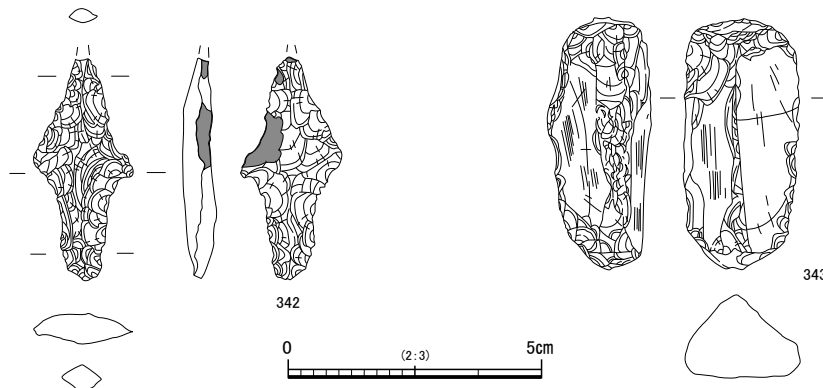


図 65 3区包含層出土遺物実測図(2)(S=2/3)

(6) 溝 (図 35・61・63)

3-1～3区にわたって、数条の溝がほぼ南北に走る(図 35)。幅 0.7～1.1m、深さ 20cm 前後の広くやや深い溝 (SD442、638、704) と、幅 0.8m 前後の深さ 10cm 強の広く浅い溝 (SD629)、幅 0.3～0.6m、深さ 10cm 前後 (SD455、603、634、635) の細く浅い溝がある。長軸方向が SB3～5 やピット列とほぼ平行しており、何らかの関係をもつものと考えておきたい。

SD629 は遺物の出土がなく、SD442 は弥生土器片のみが比較的多く出土する。そのほかの溝は弥生土器を主体に、須恵器片や土師器片が少量混在して出土する。そのほか SD634 から瓦器片が、SD704 からは、東播系播鉢片も出土している。図 63-298～301 は弥生土器底部。300 はミガキ状の痕跡が残るが風化のため不明瞭。302、303 は須恵器杯蓋。303 は天井部は平坦で、口縁端部が「Z」字状をなすもの。

SD635 から出土した 304 はサヌカイトの削器もしくは楔形石器。原礫面を残す剥片で、図の上部に先行剥離面をもつ。短軸方向両極に敲打痕。長軸 6.2cm、短軸 3.2cm、厚み 1.5cm、重さ 36.2g。

(7) 遺構に伴わない遺物 (図 64・65)

図 64 には耕作土や包含層から出土した遺物を示した。305～310、312～325 は弥生土器。311 は土師器。305 は壺の、306～311 は甕の口縁部。308 は外面黒変、内面赤変する。310 は受口状の口縁をもち、端部は面をなす。311 の体部内面は工具を強くナデ上げ、ケズリ状となる。口縁端部は上方に突出する。312～320 は底部。形態はドーナツ状 (312、314)、平底 (313、316、320)、上げ底や台状のもの (317～319) など多様。内面の簾状ハケ調整が目立つ。312 の外面はミガキ調整が施され、体部へ大きく開くことから壺と考えられる。314 は内外面赤変する。315 は底部穿孔。316 は粘土充填手法による成形で内面に指オサエ。317 は内面にミガキ状の痕跡が認められる。鉢か。318 は内面ハケ調整。体部へとナデ上げる。319 は簾状ハケ調整。320 は底部径 3.6cm と小型。321～324 は高杯。321 は図 62-273 と胎土・調整ともよく似ており同一個体の可能性がある。322 は風化のため調整不明。口縁部と受部の屈曲部に沈線がめぐる。323 は脚部の中ほどまで中実。外面は縦方向のミガキ調整。SH625 検出中の出土。324 は鉢もしくは高杯であろう。325 は転用の土製円板。326 は土玉。穿孔が施され、中位に稜のある菱形状を呈する。直径 2.2cm、9.1g。

327～337 は須恵器。327、328 は須恵器杯蓋。329 は杯身。330～332 は杯 B。330 の高台は低くわずかに外反し、内端部で接地する。331 はごく低い高台が「ハ」の字状にひらく。332 は風化のため高台形状が不明瞭である。333 は壺の高台部。内端部で接地する。334 は無蓋高杯、もしくは甕か。

屈曲部には沈線を、杯部側面と下面には刺突文を施す。335、336は甕の口縁。335の口縁端部は内傾する凹面をなし、稜をもつ。外面には沈線による簡素な波状文文様。自然釉がかかる。336は沈線によって口縁部に凹線をつくる。337は台付長頸壺の脚台部であろう。屈曲部には沈線を施し、透かし孔が一部残る。

338は瓦器火鉢。沈線がめぐる上方は花卉状のスタンプを押捺し、下方は円形刺突を繰り返したような凹みがめぐる。下面はヘラケズリ状。内面は上端破損部から幅約3cmに煤が付着する。

339は丸瓦。凸面は長軸方向の丁寧なミガキ調整、凹面は布目痕と、破線状の紐痕が明瞭に残る。

340は砥石。砥面は図示した幅の広い面と、その両側面2面、頂部をあわせて4面ある。石材は片麻岩状で仕上げ砥であろう。341は円礫。いびつな球形で、敲打して成形後、全体を研磨している。黒色の密な石材で白色の縞が一部観察される。直径3.4～4.0cm、重さ57.0gを測る。

図65-342は凸基式の石鏃。図中黒色で示した部分は新しい欠損。主剥離面の側辺の細部調整が粗く、未製品の可能性もある。石材はサヌカイトで、長軸4.3cm、短軸1.9cm、厚さ0.7cm、重さ4.0gを測る。343は楔形石器。頂部、側縁は全て敲打痕がみられ、特に頂部に著しい。2面に研磨が見られる。長軸4.9cm、短軸2.3cm、厚さ1.6cm、重さ22.6g。

(8) 小結

3区では、弥生時代後期と飛鳥から平安時代の遺構を検出した。弥生時代の主要な遺構としては、方形のプランをもつ竪穴建物SH625、630が挙げられる。その西側でも手焙形土器が出土したSD778や、弥生土器が多量に出土するSX741があり、3-2・3区の南北に居住域が広がっていたものと思われる。調査区北東方向(3-4区)は谷地形となり、遺構・遺物ともにほとんど検出しておらず、集落の境界として捉えられる。弥生土器には高杯の形態や、手焙形土器の存在、甕底部の内面調整に簾状ハケが目立つといった特徴をもっており、3区では後期後葉に集落が営まれていたものと思われる。

飛鳥から平安時代では、方形の掘りかたをもつ掘立柱建物を4棟検出した。遺物から6世紀後葉から7世紀前半にかけて造営され、SB4では10世紀頃、そのほかは8世紀代までに廃絶されたものと思われる。掘立柱建物掘りかたの間に並ぶピットについてはやや遡るかもしれないが、ピット列などについても南北方向を意識した集落が構成されており、ほぼ同時期に位置付けられるものと考えられる。

そのほか特に取り上げていないが、直径20cm以下の円形ピットも多数検出している。ごく少量ながら瓦器片や東播系須恵器片等も包含層等から出土しているため、中世期にもやや低調ながら遺構が形成されていたものであろう。

第7章 1・2区出土埴輪

1・2区からは円筒埴輪(344～347)と朝顔形埴輪(348)が出土している(図66)。344は1区包含層、345は1区SD7、346、347は1区SD10、348は2区SX299から出土した。3区からの出土はない。いずれも小片で、別時期の遺物が卓越していることから、調査区周辺からの流入と想定される。

暗橙褐色で堅く焼き締まる344と、明褐色を呈し軟質の345～348がある。いずれも黒斑の有無は不明。唯一調整が観察できる朝顔形埴輪(348)は外面にタテハケ、内面は斜め方向にハケ調整が施される。

1・2区から200～300m北東に離れた丘陵上で、方墳3基に伴って川西編年Ⅲ期の円筒埴輪と形象埴輪が出土している(86年度調査区)。今回調査区周辺は平坦な耕作地となっており、地形から古墳の存在を伺い知ることができないが、想像をたくましくすれば古墳時代の墓域が1・2区周辺、梅川を臨む丘陵上にも広がっていたと考えることができよう。

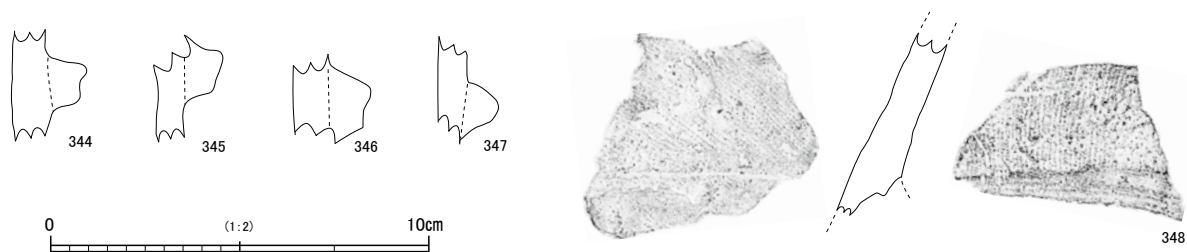


図66 1・2区出土埴輪実測図(S=1/2)

第8章 まとめ

今回の調査では、遺跡範囲の拡大を見、弥生時代後期、飛鳥・奈良・平安時代、中世の集落の一端を窺い知る資料を得た。既往の調査成果とあわせて各時代について概観し、まとめとしたい。

弥生時代 従来から弥生時代高地性集落として名高い遺跡として、集落域がさらに広がった意義は大きい。居住域は丘陵南部（68・69年度調査区）と、丘陵中央部（大阪府84年度試掘調査14・15トレンチ、94年度B・C調査区）に求められていたが、今回の調査で西部の中位段丘上（3区）にも広がった。今回検出した竪穴建物については以下の通りである。

	遺構名	平面形	方向	推定床面積	標高	備考
3-3区	SH625a	長方形	N-30°-W	17.5㎡	T.P.+67.3m	壁溝 SD656
3-3区	SH625b	長方形	N-30°-W	22.1㎡	T.P.+67.3m	壁溝 SD686
3-3区	SH625c	方形	N-30°-W	27.0㎡	T.P.+67.3m	壁溝 SD694
3-3区	SH630	方形	N-5°-E	14.1㎡	T.P.+67.0m	

検出遺構面はT.P.+67m前後で、比高差約20mで梅川の流れる低地に至る。遺跡の存在する独立丘陵南部では標高90～105m、中央部ではT.P.+80～90mで竪穴建物を検出しており、20～30m低い土地を選地していることになる。墓域は2か所に分かれることとなり、丘陵中央（94年度C調査区）の土器棺墓2基と、中位段丘西端（1区）の方形周溝墓に求められる（図1）。

68・69年度調査報告における1～7期の時期区分は、遺構の切り合い関係によるものが大きく、全体に敷衍することは難しい。そのため遺物とあわせて、大きな画期として認識できる円形から方形へという竪穴建物のプランの変化をもって集落の変遷をとらえなおしてみよう。

高地性集落を印象づけた丘陵南部では、V様式前半から3つの尾根に分かれて竪穴建物が営まれており、重複関係から求められる継続期間も比較的長い。ここでは3期から竪穴建物に方形プランが出現し、7期にはすべて方形となって終息することが分かっている。丘陵中央部では、竪穴建物のプランはほぼ方形に限定されており、転換期とされる6～7期¹⁾、遺物から求められるV様式末からVI様式期に、集落の中心を尾根伝いに遷したものと思われる。ただし、94年度C調査区では円形の竪穴建物が検出されていることから、南部に居住域が存在していた時期と並行して集落域の拡大が図られていたのでは

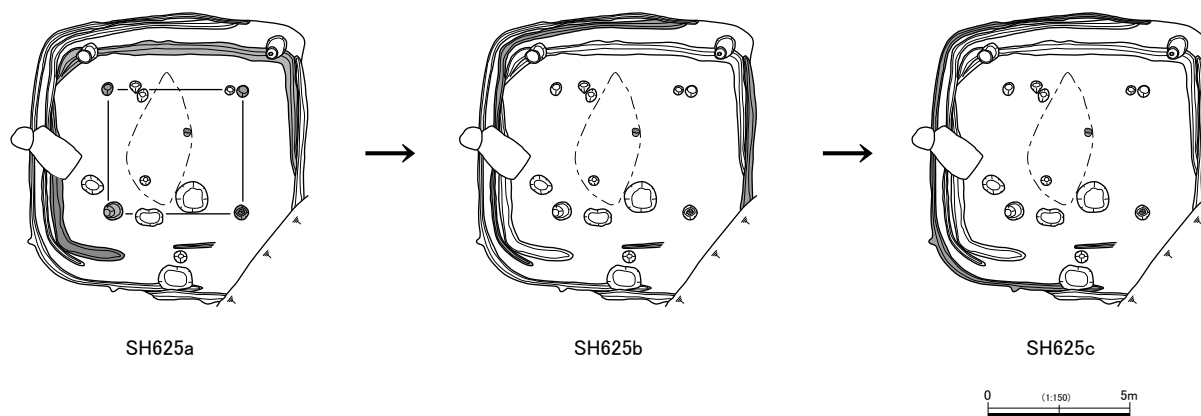


図 67 3-3 区 SH625 変遷模式図

ろう。84年度試掘調査の評価では、平和池北側の丘陵平坦地に溝をめぐる大規模な居住域が想定されている。その評価に基づき、ここを次の核として、弥生時代後期後半から古墳時代にかけての集落は、尾根伝いに中心を遷しながら徐々に北上し、葉室遺跡、伽山遺跡に至るものと評価されている²⁾。しかし方形プランをもつ時期には、大型でガラス玉や鉈を有するといった際だった建物の不在や、重複関係に乏しいことから想定される継続期間の短さを指摘でき、未調査部の内容にも左右されるものの、丘陵南部のB区ほど明確な求心性をみせていない。そして今回の調査で検出した竪穴建物によって、当該期の居住域は拡散した印象を強めた。

土器棺墓のある丘陵中央部は、古墳時代まで土壙墓や古墳が造られ、墓域として意識されていた地区である。1区方形周溝墓出土土器は、SH625よりやや古い様相を呈するものの、方形プランが主流となっていく過渡期には位置付けられる。同時期性について確証を得ないが、1・2区で出土した埴輪片や須恵器類を最大限に評価するなら、削平された古墳が西部にもあったとして、同じく継続的な墓域の維持を想定することができる。低地の集落と同じく墓域が個別の居住域に対応するものであれば、方形周溝墓の造墓主体は、中央部ではなく、西部の未調査部分に求められる。方形周溝墓という墓制を土器棺墓より上位に据えたとすれば、平和池北側の丘陵平坦部には、丘陵南部と同質の中心性を求めることは難しくなる。

ここで個別の竪穴建物に目を移してみると、SH625はV様式後葉からVI様式期にかけて長方形から方形プランへ変化し、推定で約5㎡ずつ拡張している(図67)。中央部の方形竪穴建物も、建替えによる拡張傾向にあり、68・69年度調査における大型竪穴建物(床面積35㎡以上)の棟数減少や床面積の縮小化傾向とは別に、個別の建物単位で安定した状況を見て取ることができる。

すなわち、個別の住居の安定性に基づいた居住域の等質的な性格と、個別の尾根をつなぐネットワークによって維持された集落像を、現段階では想定すべきではないかと考える。それが次に続く古墳時代前期には、隔絶した首長墓ではなく、墳丘をもたない土壙墓という形で表出することとなるのではないかとと思われる。立地上、主要な生産基盤を稲作に求めることはできなかったことも、その一因と考えたい。

以上のことから、弥生時代後期から古墳時代にかけて単純に居住域を北に移していただけでなく、内的な構造変化を伴いながら丘陵上に拡大していった様相を推定することができよう。

古墳時代前期から中期 古墳時代前期から後期には、86年度調査区で検出した土壙墓と古墳以外には顕著な遺構が見られない。1・2区で埴輪片や大型の須恵器壺、四耳壺などが出土していることから、上述したように削平された古墳があった可能性はあろう。

古墳時代後期から平安時代 6世紀後葉から8世紀にかけては、以下の掘立柱建物を検出した。

	遺構名	桁×梁	方向	桁行×梁間	面積	
1区	SB1	(2) × 2	N - 4° - E	3.1 × 2.8 m	8.7 m ²	
2-1区	SB2	2 × 2	N - 0°	3.3 × 3.3 m	10.9 m ²	
3-1区	SB3	(3) × 1	N - 0°	(6.5) × 4.7 m	(30.6)m ²	
3-1区	SB4	(3) × 2	N - 2° - E	(6.6) × 4.6 m	(30.4)m ²	
3-2区	SB5	4 × (2)	N - 92° - E	9.5 × (4.1)m	(39.0)m ²	
3-3区	SB6	1 × 1	N - 1° - E	4.1 × 4.1 m	16.8 m ²	※ () は推定値

特に3区では南北におよその軸角をそろえ、方形の柱穴掘りかたをもつ建物群や集落域を区画するピット列が集中する。SB4はやや小型の掘りかたをもち、廃絶時期が10世紀まで降る可能性があり、その他の円形小型ピットで構成されるだろう建物とともに飛鳥から奈良・平安時代にわたる集落域が想定される。2区SB2も同じく軸角をそろえており、周辺のピットとともに集落域が広がっていたものと推定される。丘陵中央部(94年C調査区)でも掘立柱建物もみられるが散発的で、今回の3区が当該期の集落の中心として位置づけられることとなる。

東山遺跡の南西、河南台地上に位置する山城廃寺では、飛鳥・奈良時代、東西方向に主軸をそろえた大型の方形柱穴をもつ建物群や多量の製塩土器が検出されており、白鳳期(7世紀後半から8世紀初頭)の古代寺院「山城廃寺」に係る施設と推定されている³⁾。この西側でも軸角をおよそ南北方向にし、方形柱穴をもつ掘立柱建物を検出し⁴⁾、南の別井遺跡南端でも方形の柱穴掘りかたが確認される⁵⁾など、河南台地に古代の建物群が立ち並んでいた様子が復元される。千早川流域の寛弘寺遺跡でも建物自体は復元されていないものの、方形の柱穴掘りかたや、現在の地割と方向を違え、奈良時代に遡り得る畦畔遺構が検出されている⁶⁾。

千早川・梅川流域で大規模な開発がおこなわれ、集落が形成されていたことを推定させるものである。東山遺跡は立地を異にするもの、方角をそろえた建物群はこうした遺跡との関連を推測させるもので、集落の性格について断言することは難しいが、一般集落とは異なる建物、わずかに出土した製塩土器や青磁器、交通の一環を担った梅川を西方に臨む位置にあることなどもあわせて、地方氏族の居館として捉えることも可能であろう。

6世紀後葉から8世紀代の墓域は遺跡内では一須賀古墳群の一つ、WA1号墳が南部丘陵にあるのみだが、周辺を見渡せば谷を挟んで南に広がる一須賀古墳群や、北の磯長谷、南の平石谷の終末期古墳など枚挙に暇がない。しかし東山の集落には、王陵クラスと評される大型古墳や、一須賀古墳群の被葬者に求められる官人や渡来人系の氏族といったイメージを喚起する資料は出土していない。近接する位置にある集落と墓域ではあるが、被葬者は別に求めるべきであろう。また奈良時代以降の墓域としては、南部(68・69年B地区)で土壙墓、土器棺墓、火葬墓、丘陵中央で86年調査区の火葬墓、刀子の出土した土壙墓、94年A調査区の火葬墓(8世紀前半)、C調査区の土器棺墓が検出されている。居住域とは離れた丘陵上に散発的に営まれていたものと思われる。

中世 古代の集落は11世紀にはいったん廃絶するようで、次の盛期は1・2区丘陵西端部にピットや溝、土坑、掘立柱建物などが営まれる14～15世紀を中心とする。古く見れば13世紀中頃に溝や土坑が形成され始めており、1区北側の落ち込みが14世紀前半には埋没し始め、その南側を走る溝は15世紀代まで機能している。中世中頃から新たに整地が行われ、土地利用が進んだものと捉えられる。また検出した土坑には、底面に礫をならべるものや、被熱するものなど性格の不明なものが多い。焼土坑については、一須賀古墳群東部の丘陵上でまとまって検出されている⁷⁾ほか、寛弘寺遺跡など周辺の遺跡でも散見されるが、その時期や性格については墓や炉など諸説あり、一定の結論を得ていない。今回の検出例も類例を増加させたにとどまった。

さて中世の遺物には、数点にとどまるものの大和型の羽釜や瓦器碗が含まれる。ほとんどが小片で良好な資料ではないが、参考として今回の調査区出土の破片数を母数として比率を挙げる。瓦器碗は時期の分かるものは尾上編年Ⅳ期(和泉型)に限定されており、浅い皿状のものも含めて131片中21片(個体数:2点)、約16%が大和型である。羽釜は土師質107片、瓦質228片を数え、うち大和型は8片(個

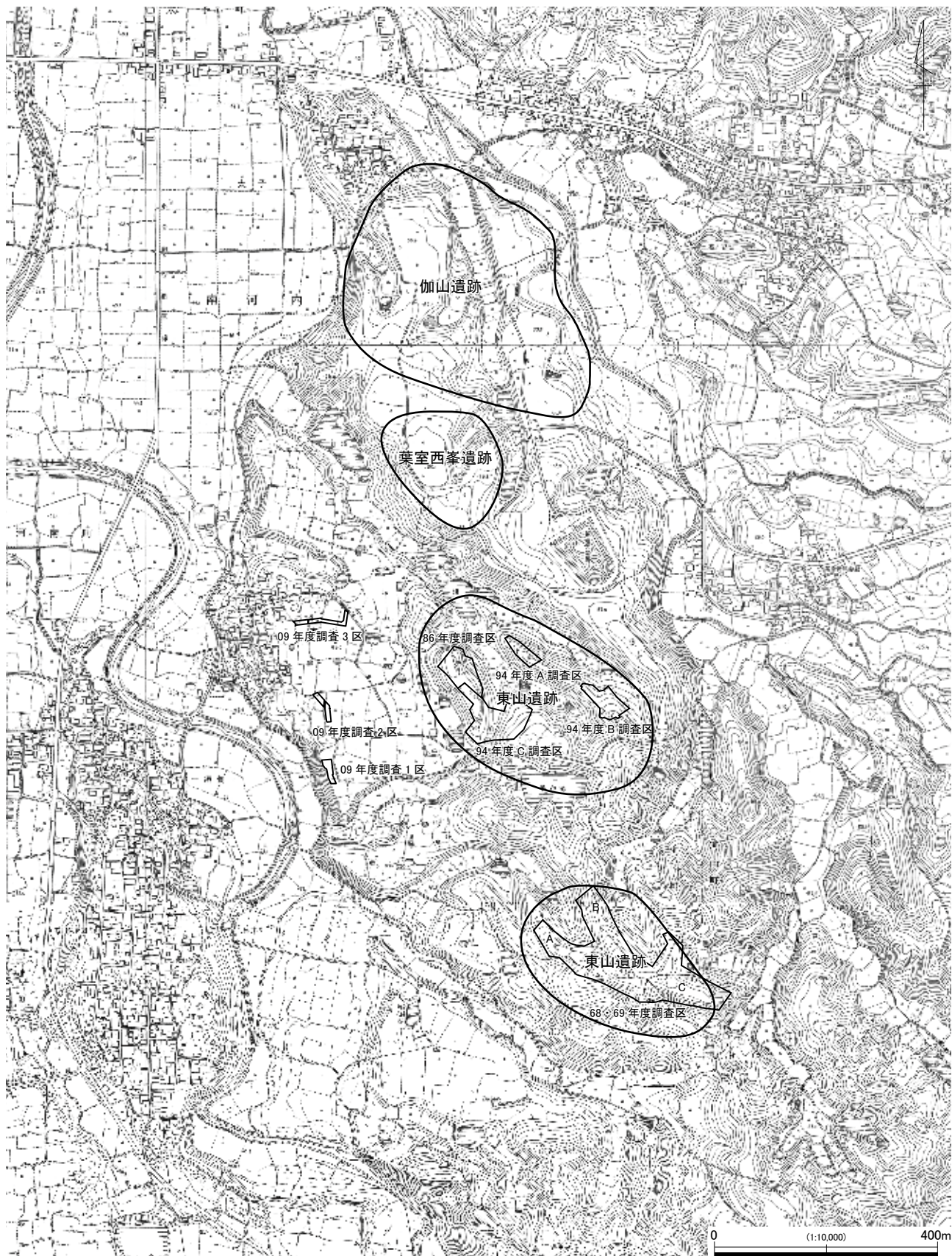


图 68 東山遺跡周辺遺跡分布图 (S=1/10,000)

体数 8 点) で約 2% に過ぎず⁸⁾、かなり低い比率である。南河内南部で当該期の大和型瓦器碗が出土しているのは、同じ山塊上だが太井川流域にある太子町植田遺跡で、大和地域との関係で評価されている。大和型羽釜は同じく植田遺跡と、千早赤阪村誕生地遺跡のほか河内長野市域、青磁器も同様に限定された遺跡から出土している⁹⁾。

東山遺跡は竹内峠、平石峠からほぼ中間に位置しており、葛城山を越えて大和地域と交流をもつことは容易であったと考えられる。奈良県吉野金峯神社の建武元(1334)年九月の文書に、寺領として「河内国加納庄、東山庄、板持名田三反」が挙げられている¹⁰⁾。この調査区に限定されるものではないが大和地域との関係の深さを示唆するものと言えよう。

以上、雑駁ながら今回の調査にかかわる時代について述べてきた。独立丘陵上に立地する東山遺跡は、集落の変遷が捉えやすい立地にある。今回の調査は弥生時代後期の集落変遷の一端を明らかにし、さらに多時期にわたる集落遺跡を捉える貴重な成果となった。町内には多岐にわたる良好な遺跡が分布するものの、未解明な部分を多く残すのも事実である。寛弘寺遺跡や一須賀古墳群、中世山城などといった特徴的な遺跡にとどまらず、さらに広域にわたる地域との関係のなかで検討を行い、遺跡を位置付けていく必要がある。

また遺跡範囲の拡大に伴い、低・中位段丘部でも慎重な調査が必要となった。従来の遺跡範囲である標高 80～100m の丘陵以外に、地図上平坦な田畑となっている段丘上へも遺跡が広がる可能性を指摘しておく。加えて集落が広がると予想される今年度調査区の中央部や、平和池北側は造成から外れており、集落の中心部分とされる区域は未解明である。しかし、逆に言えば遺跡の保存が図られた結果と評価でき、関係者の尽力によって近つ飛鳥風土記の丘として保存の図られた一須賀古墳群、寛弘寺古墳公園として丘陵の一部を残す寛弘寺遺跡とともに、大阪芸術大学体育館内に地形と古墳の模型を展示する東山遺跡についても、集落の中心部分への期待を残しつつ、今後も保存と活用が図っていききたい。

- 1) 68・69 年度調査では、建物の廃絶、土器の廃棄、建物の方形プランの出現、区画溝の出現から 3 期に、建物の廃絶、土器の廃棄、小型から大型への建物の変化などから 6 期に転換期があり、短期間、山を降りた時期があったとしている。
- 2) 赤井毅彦 1998 「第四章 まとめ」『大阪芸術大学グラウンド等造成に伴う東山遺跡発掘調査報告書』河南町文化財調査報告第 2 冊 p.p.65 - 67 河南町教育委員会
- 3) 大阪府教育委員会 2010 『山城廃寺発掘調査概要報』
- 4) 未報告。2010 年河南町教育委員会調査。未整理であるが、包含層からは円面碗が出土している。
- 5) 未報告。赤井によると立会調査で検出し、掘削深度が及ばなかったため上面の検出にとどまったものである。
- 6) 上林史郎 1987 『河西西部地区農地開発事業に伴う寛弘寺遺跡発掘調査概要 V I』大阪府教育委員会
- 7) 一須賀古墳群発掘調査委員会 1996 『太子カントリー倶楽部建設に伴う植田遺跡ほか発掘調査報告書』
- 8) 瓦器碗についても個体数を分子とすれば約 2% で同率となる。
- 9) 藤田徹也 2008 「南河内における中世前半期の土器概観」『南河内における中世城館の調査』 p.p.14 - 22 大阪府教育委員会
- 10) 河南町誌編纂委員会 1968 「波瀾つづきの中世」『河南町誌』 p.p.116 - 117 河南町役場

※ 図 1 と図 68 は国土地理院 1961、図 3 は国土地理院 2007 から作成した。

版 图



南東方向を臨む



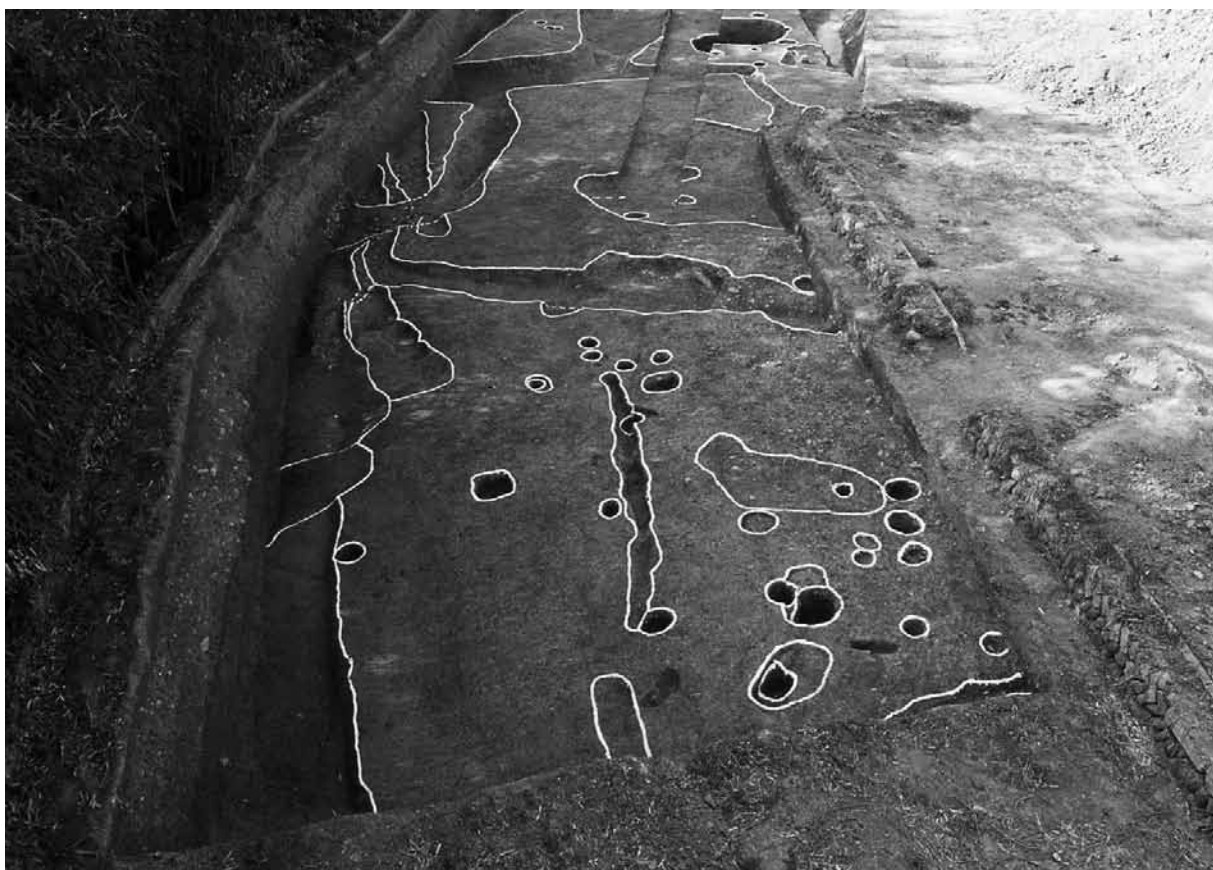
南方向を臨む



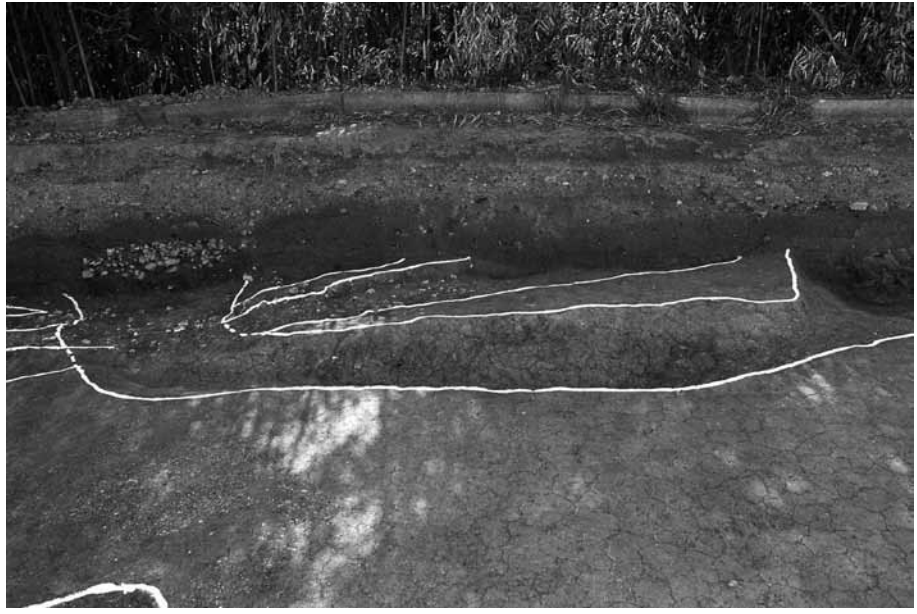
南西方向を臨む



調査区全景(北から)



調査区全景(南から)



SX25 完掘状況 (東から)



SX26 完掘状況 (東から)



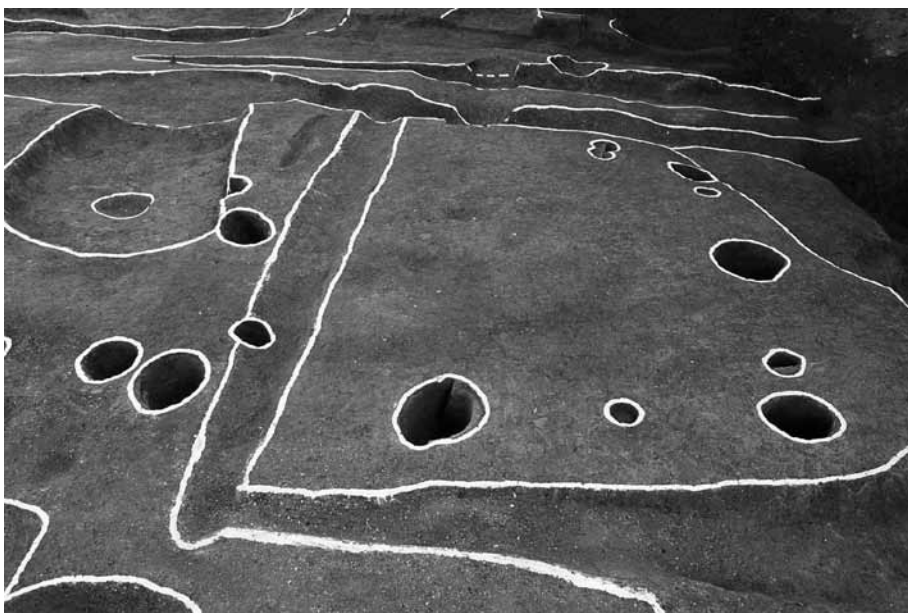
SX25
土器検出状況 (北から)



SX25・26
土器検出状況(南から)



SX15 半裁状況(西から)



SB1 完掘状況(北から)



調査区全景(北から)



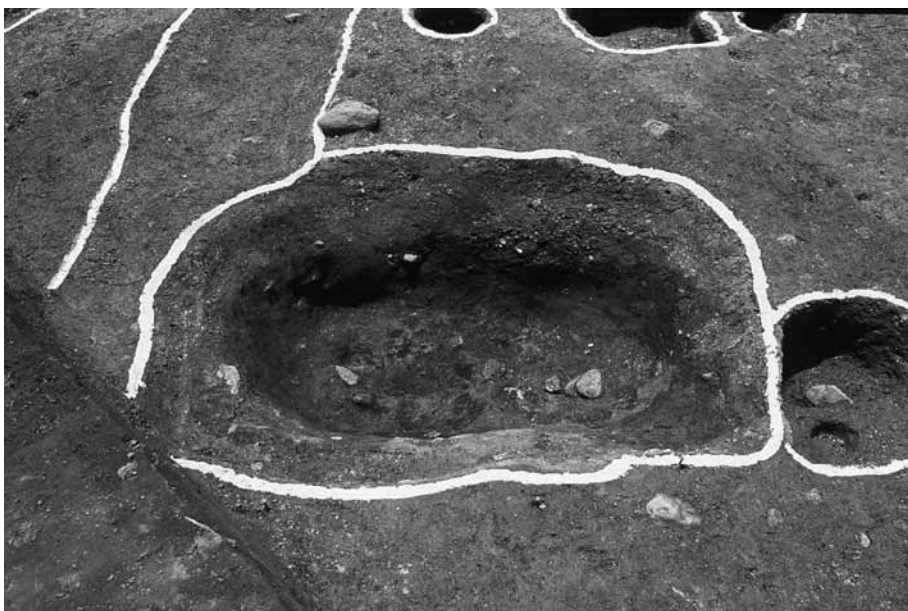
調査区中央(北から)



SX217 礫検出状況
・土層断面(西から)



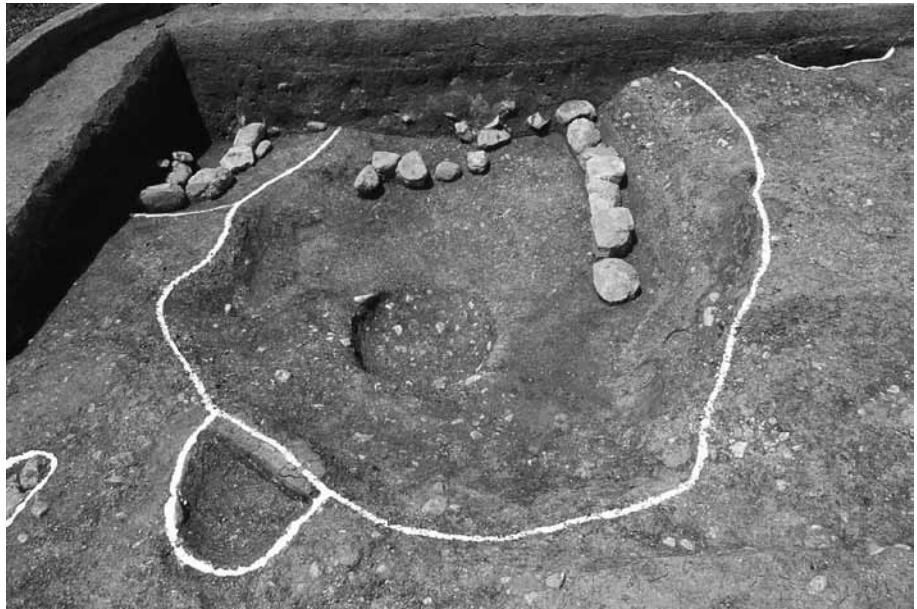
SX217 焼土層上面
検出状況(北から)



SX217
完掘状況(北から)



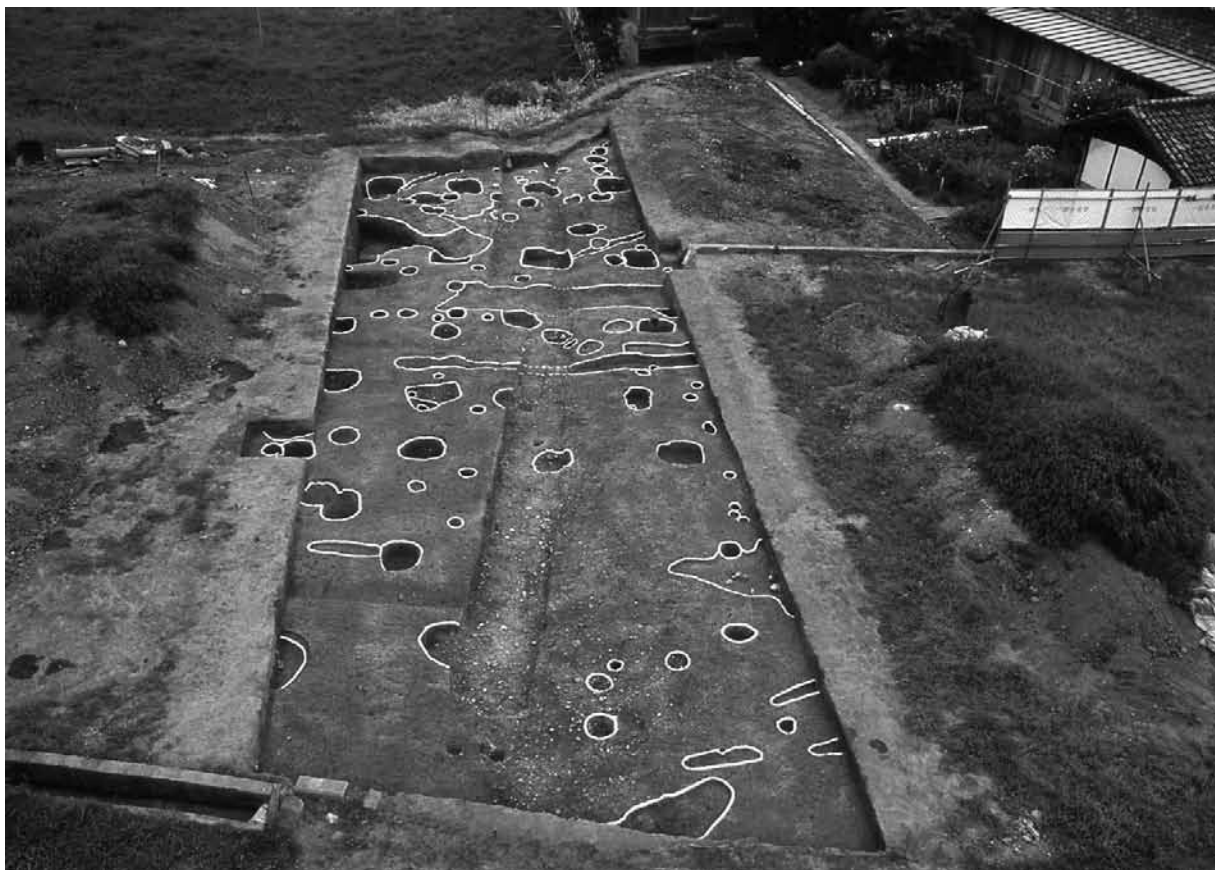
SX335 上層
礫検出状況(東から)



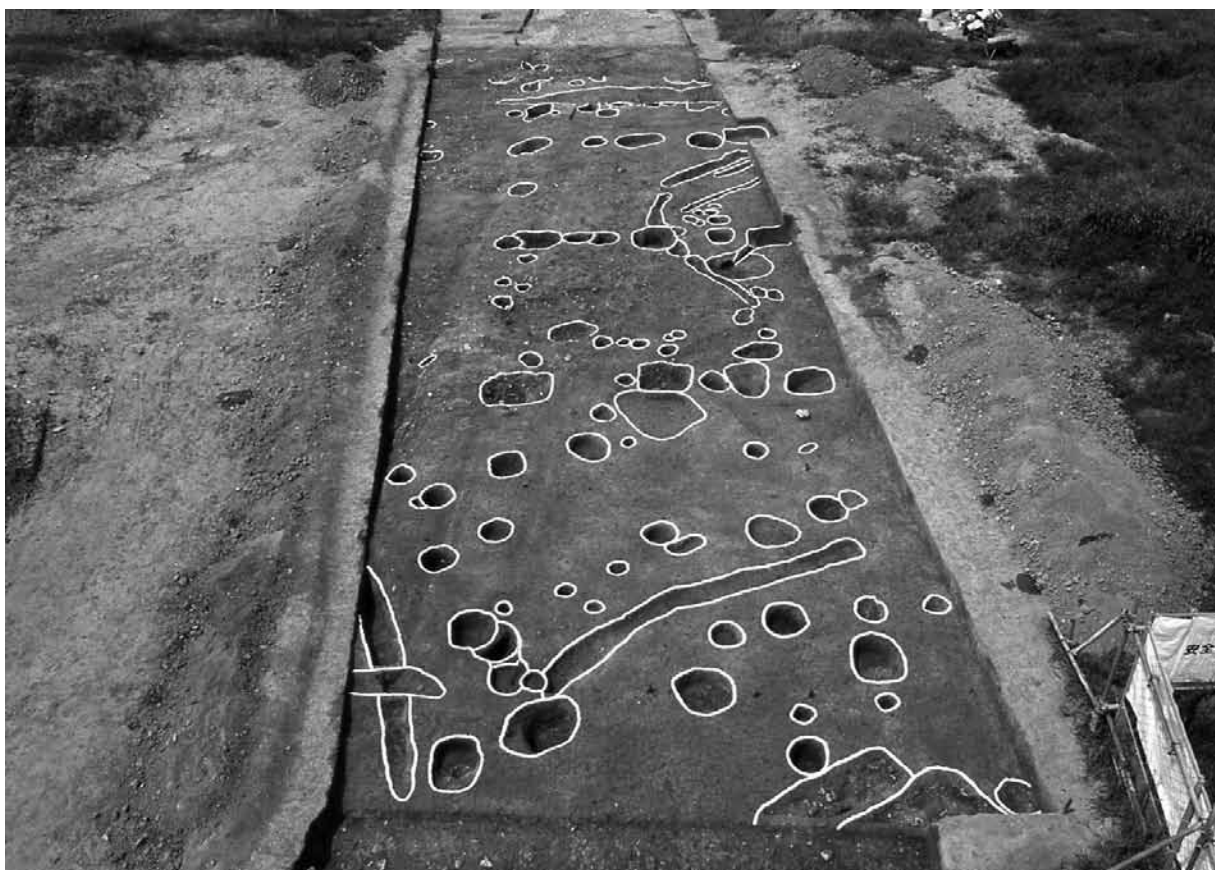
SX274・299
完掘状況(東から)



SX299
土層断面(北から)



3-1 区完掘状況(東から)



3-2 区完掘状況(東から)



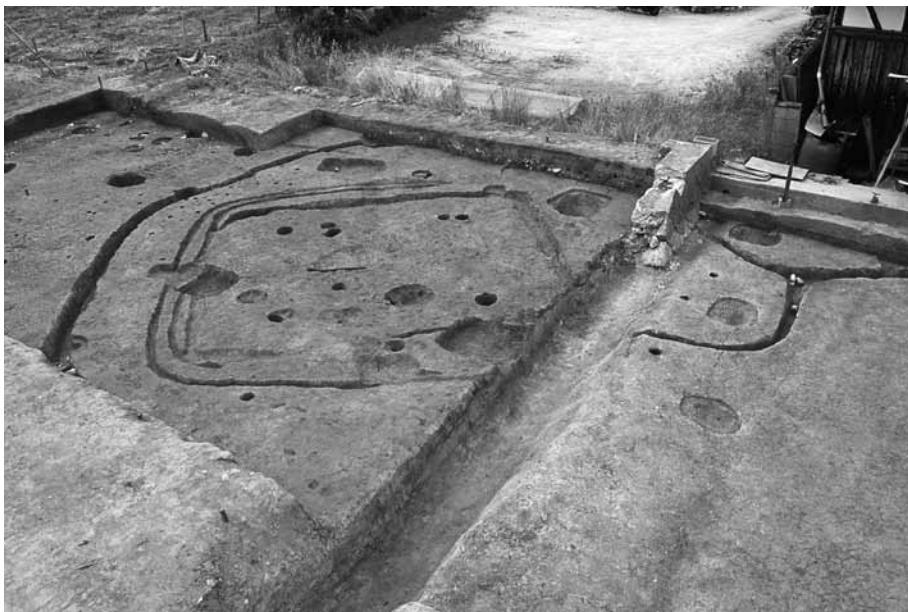
3-3区完掘状況(東から)



3-4区完掘状況(東から)



SH625 検出状況
(南東から)



SH625,SB6 完掘状況
(南東から)



SH625 南東土層断面
(北東から)



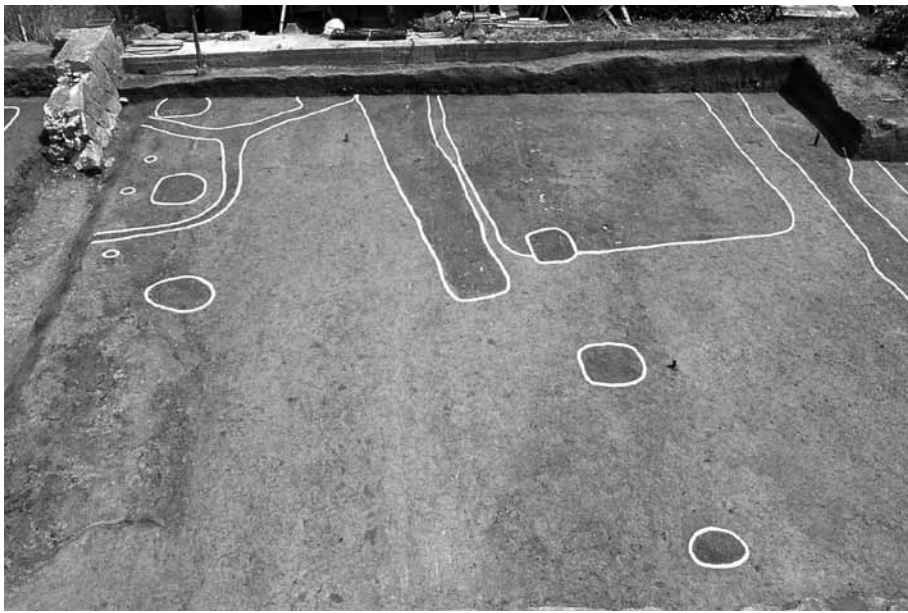
SH625 土器検出状況
(南東から)



SD614 土器検出状況
(北西から)



SD626 完掘状況
(北東から)



SH630 検出状況
(南西から)



SH630 完掘状況
(南西から)



SH630 西・SP687
土層断面(南から)



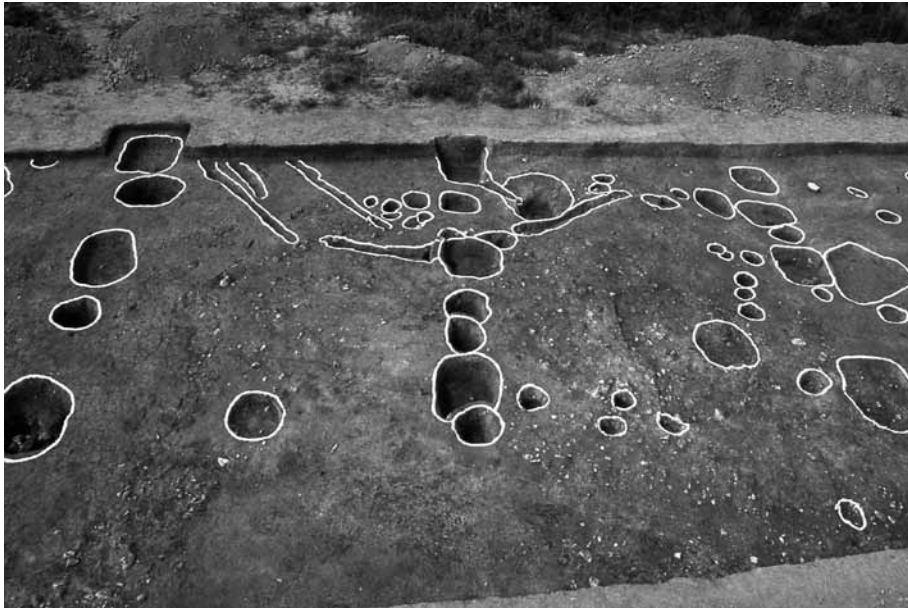
SD778,779 完掘状況
(北から)



SD778 土器検出状況
(北から)



SX741 完掘状況
(南から)



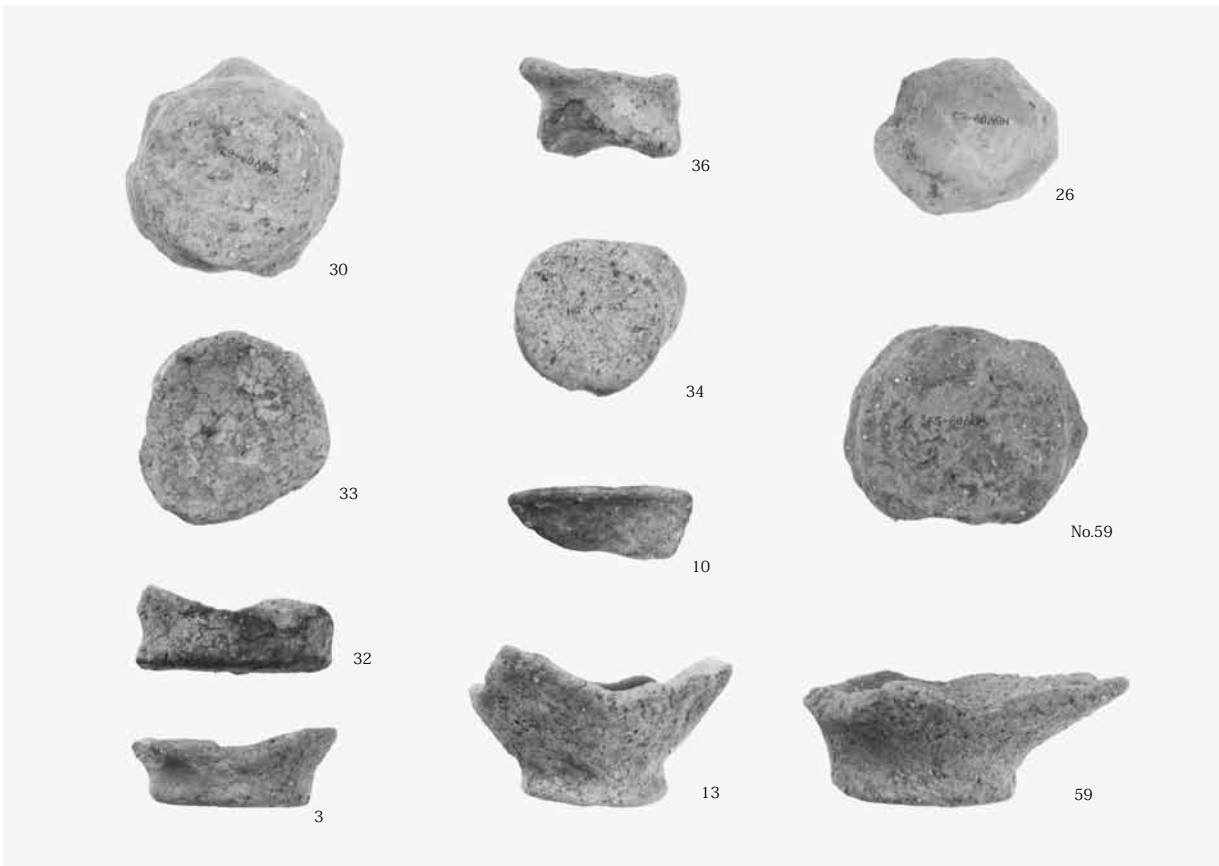
SB5 完掘状況 (南から)



SP730 半歳土層断面
(東から)



1区南側にあらわれた断層
(南から)

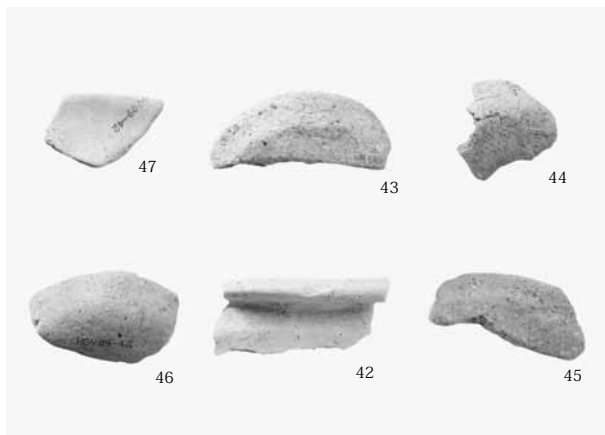


SX30



41

SX15

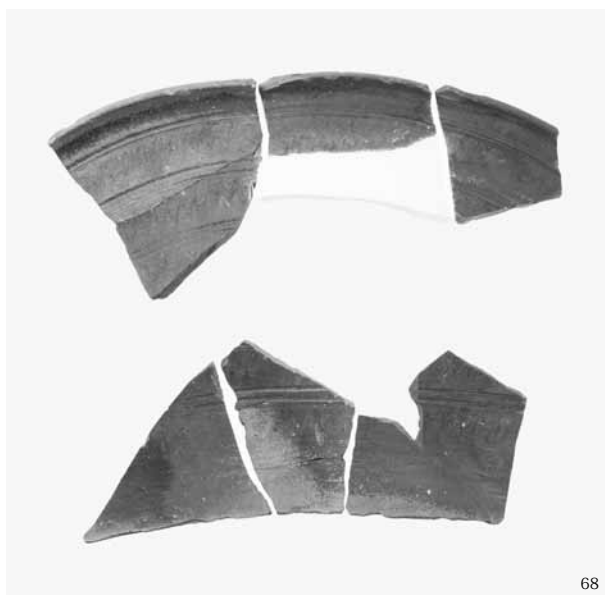


SX4,5,7



57

SX20



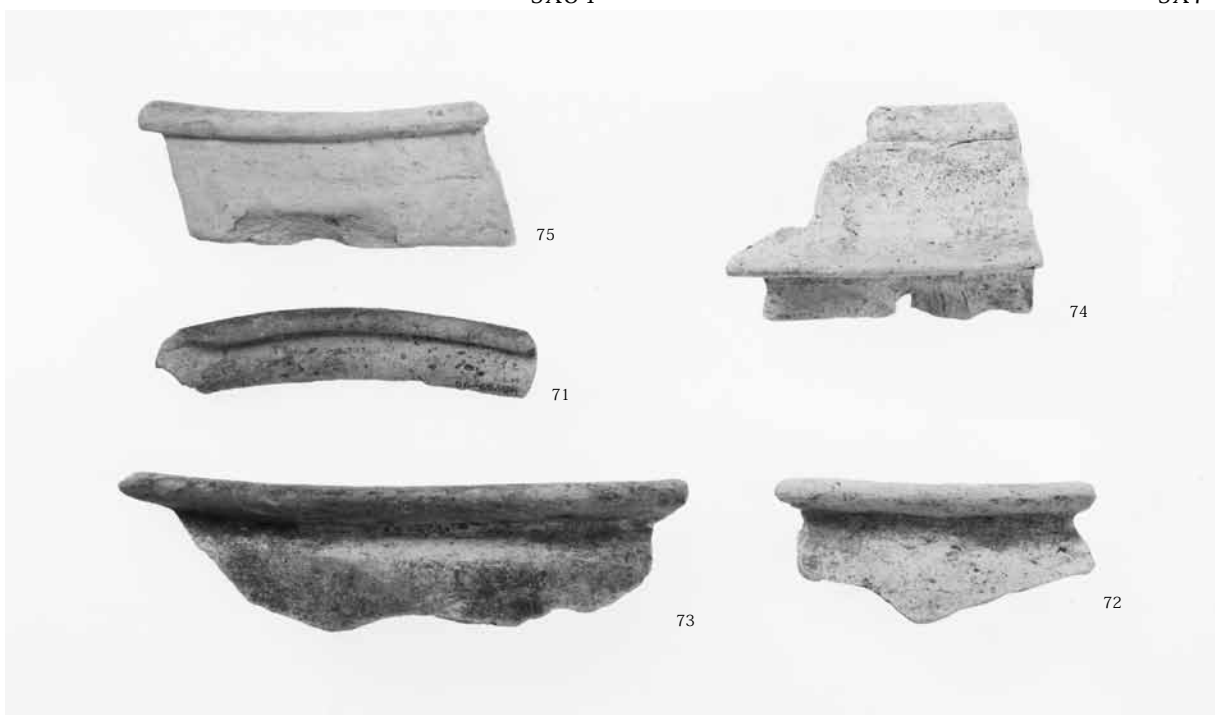
68

SX7



76

SX34



75

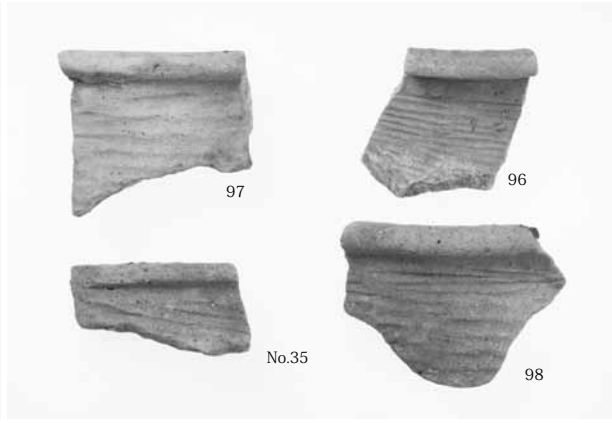
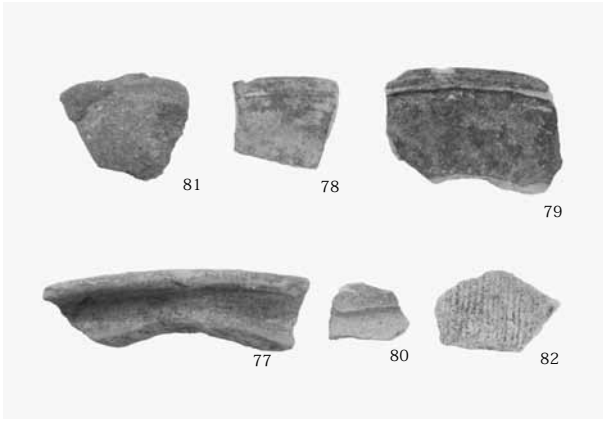
74

71

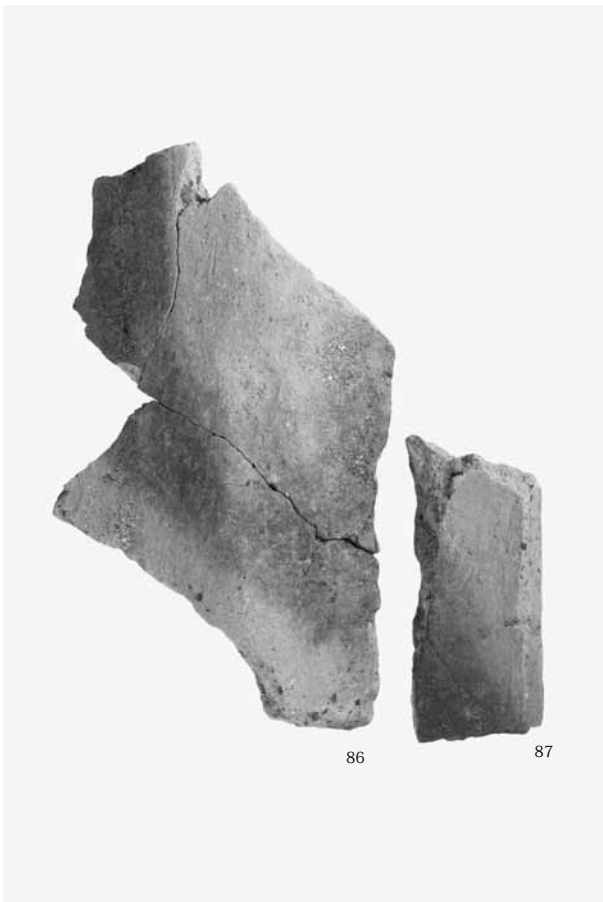
73

72

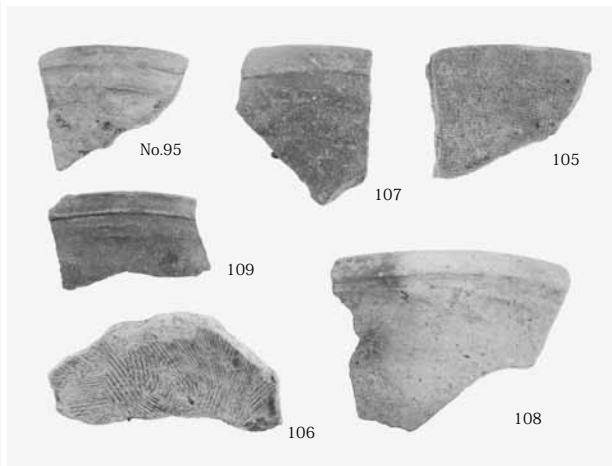
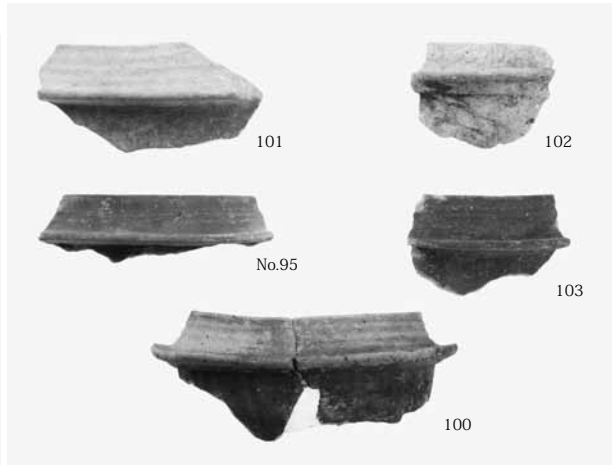
SX34



SX34



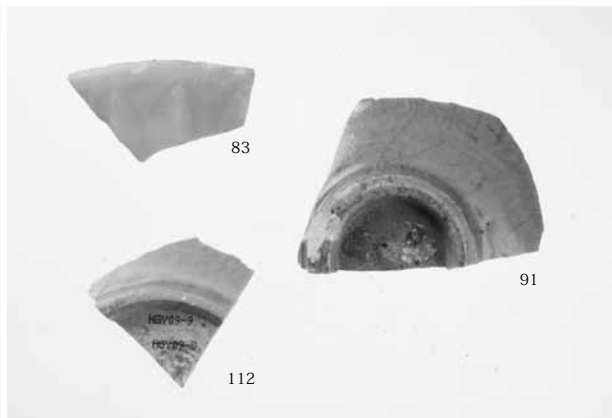
SP184



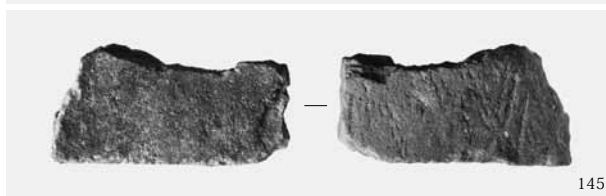
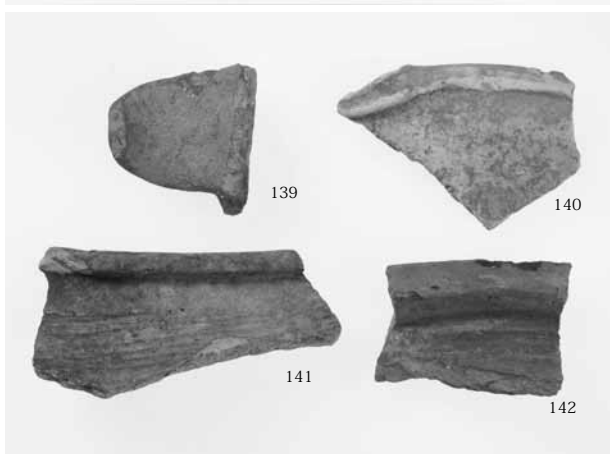
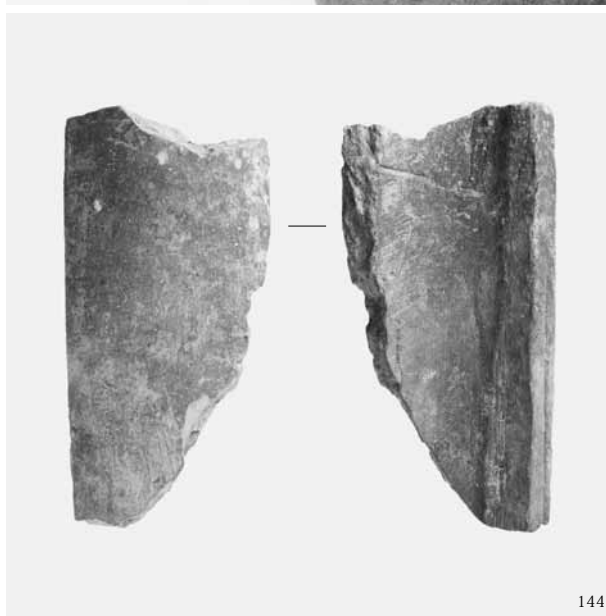
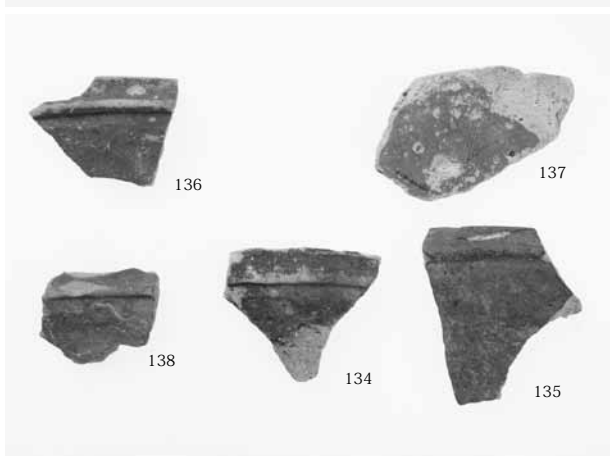
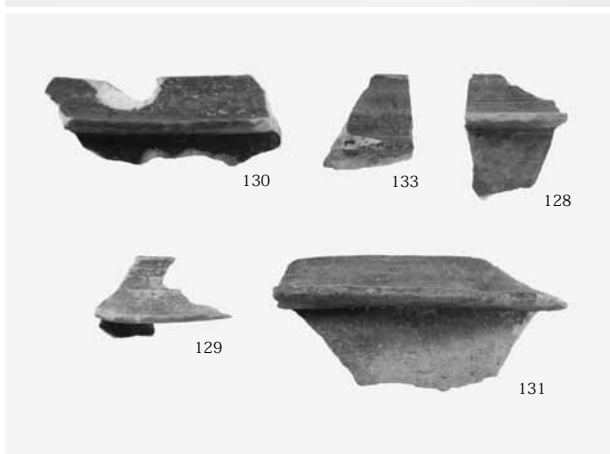
SD10

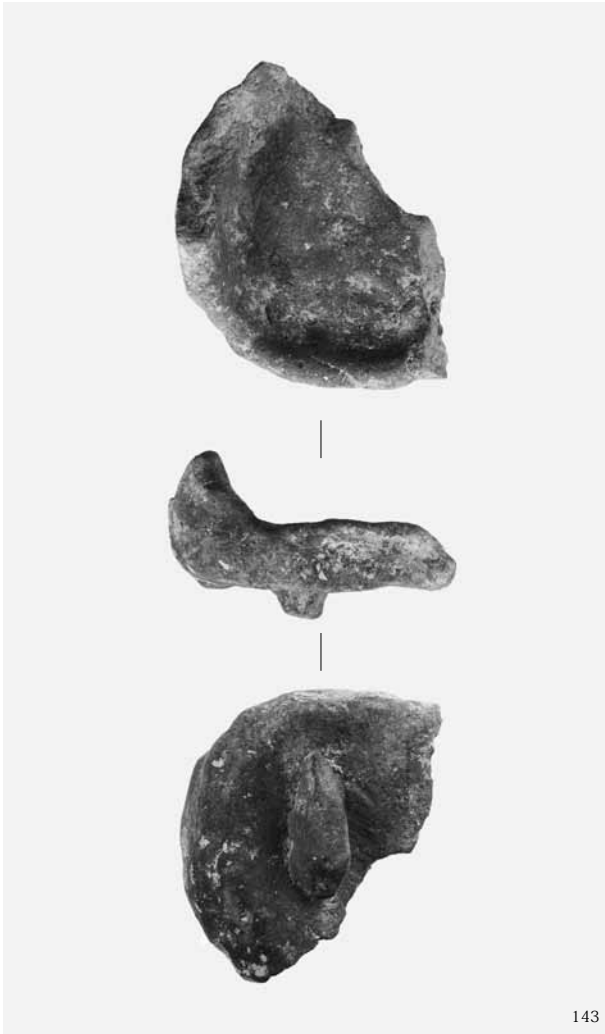


包含層



青磁

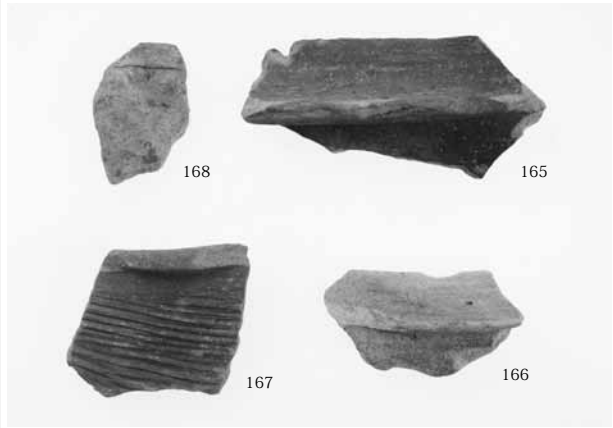




143
SX298



120
SX217



SP277



152
SP225



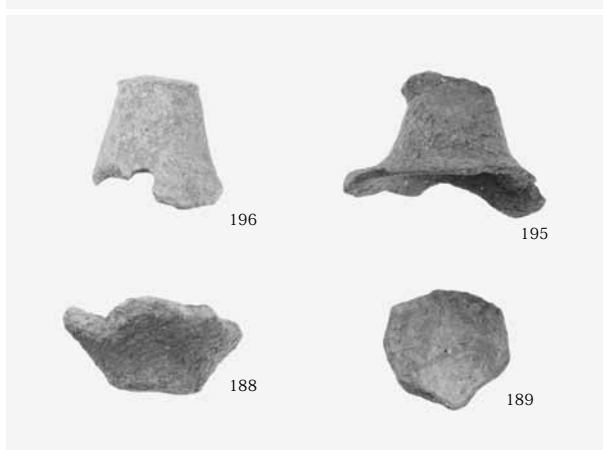
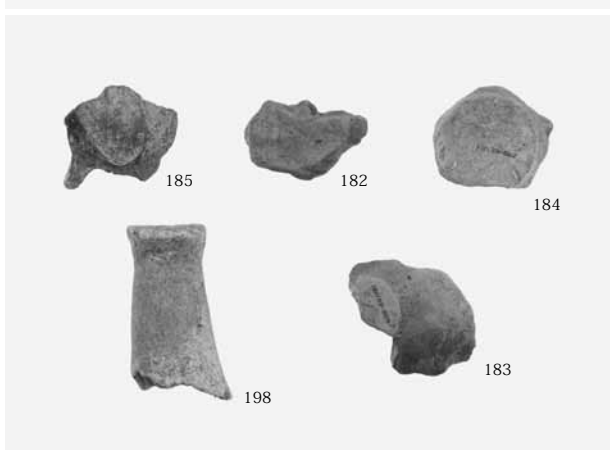
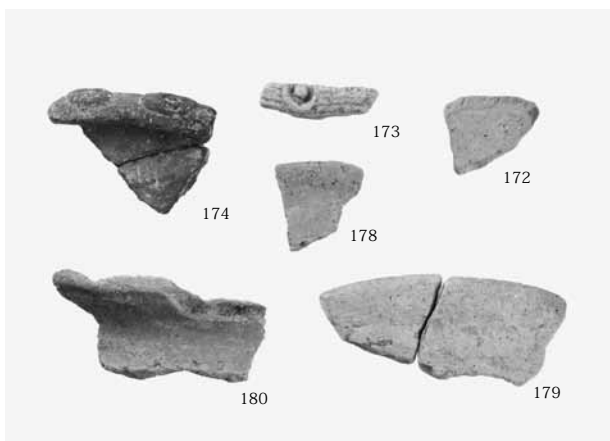
160
SP279



157
SP287

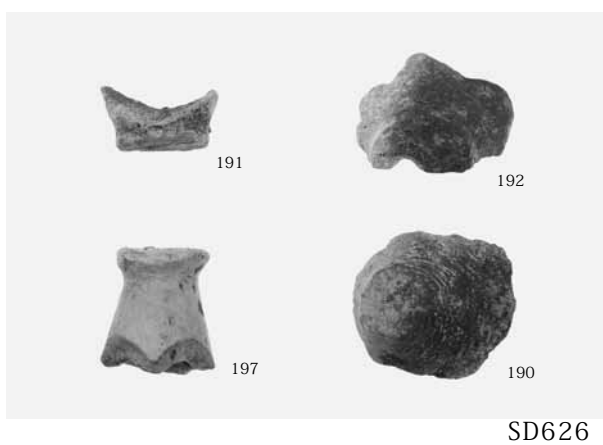


158
SP287



SH625

SD614



205

SD626



SD778

SD772

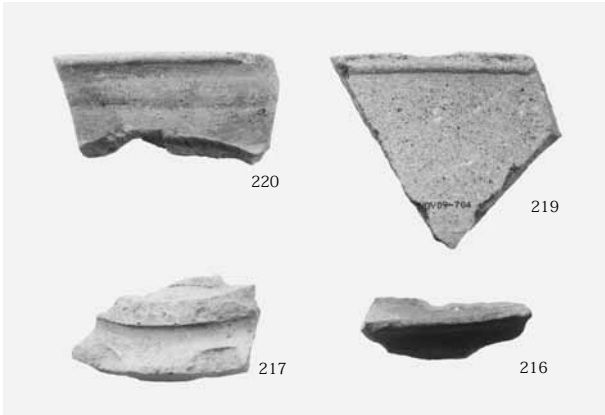


218



232

SP414



220

219

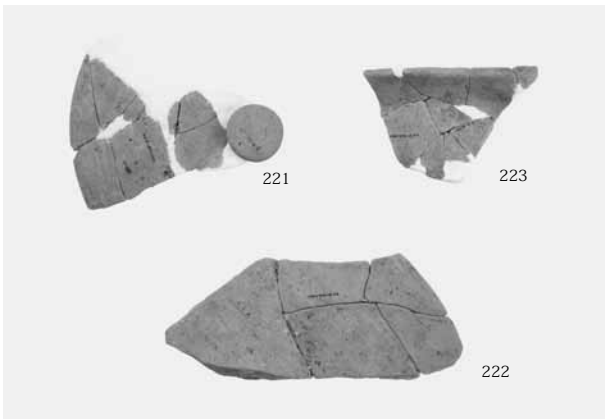
217

216



244

SP441



221

223

222

SX741



292

SP770



285

SP655



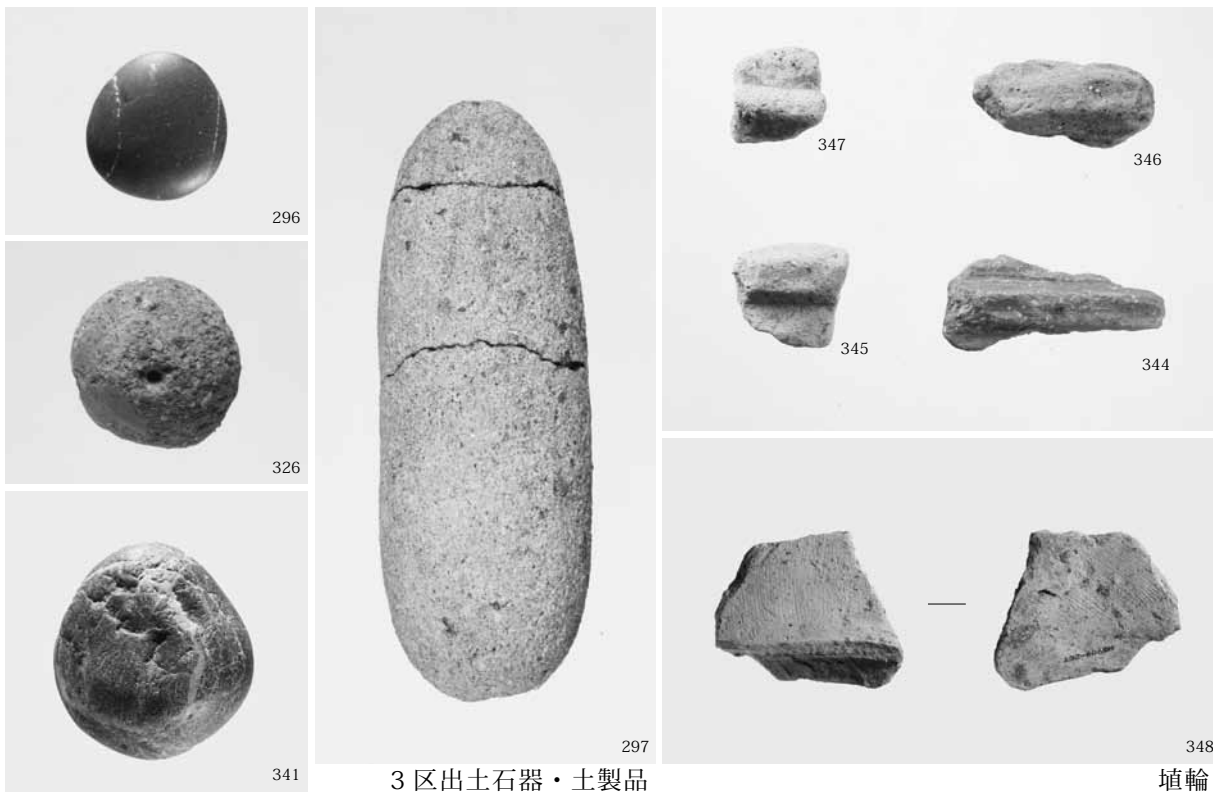
330

包含層



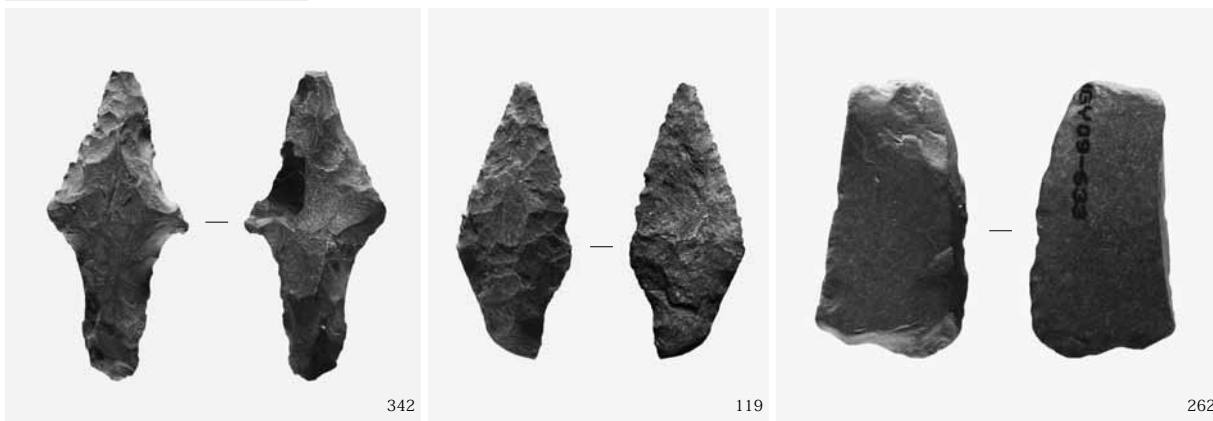
295

SP705



3区出土石器・土製品

埴輪



報告書抄録

ふりがな	ひがしやまいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	東山遺跡発掘調査報告書							
副書名	大阪芸術大学グラウンド整備に伴う							
巻次	II							
シリーズ名	河南町文化財調査報告							
シリーズ番号	第3冊							
編著者名	向井 妙 / 赤井毅彦							
編集機関	河南町教育委員会							
所在地	〒 585-8585 大阪府南河内郡河南町大字白木 1359 番地 6 TEL 0721-93-2500							
発行年月日	西暦 2011 年 5 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしやまいせき 東山遺跡	おおさかひなみかわちぐん 大阪府南河内郡 かなんちょう 河南町 おおあざひがしやま 大字東山	27382		34° 30' 34"	135° 68' 84"	20090216 ～ 20090826	1,727	グラウンド 造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
東山遺跡	集落	弥生	竪穴建物、方形周溝墓		弥生土器		手焙形土器	
		飛鳥～平安	掘立柱建物、土坑 ピット		土師器、須恵器		製塩土器	
		鎌倉～室町	掘立柱建物、集石土坑 土坑、ピット、溝		土師器、瓦器、陶器		青磁 大和型瓦器	
要約	<p>弥生時代後期の竪穴建物と方形周溝墓 2 基を検出し、従来の集落範囲が西の低位段丘へ拡大した。古墳時代の遺構はないが須恵器や数点の埴輪片が出土している。</p> <p>飛鳥～平安時代にかけては、方形の掘りかたをもつ掘立柱建物が方角をそろえて並列しており、地方氏族の居館を推測させるものである。</p> <p>鎌倉～室町時代には整地が行われ、掘立柱建物、焼土坑、溝などが形成されている。大和型瓦器碗や羽釜などの出土から大和地域とのつながりが示唆される。</p>							

河南町文化財調査報告第3冊
大阪芸術大学グラウンド整備に伴う
東山遺跡発掘調査報告書Ⅱ

発 行 河南町教育委員会
〒585 - 8585
大阪府南河内郡河南町大字白木 1359 - 6
TEL 0721 - 93 - 2500 (代表)

発行日 平成23年 5月 31日

印 刷 能登印刷株式会社